埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

東方城山遺跡群

1986.3

深谷市教育委員会

第　　号
昭和 61.11.15 日
川本町教育委員會

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告集　第13集

東方城山遺跡群

（ひがし がた しろ やま）

1986.3

深谷市教育委員会

序

深谷市の幡羅地区には、木の本古墳群をはじめ、延喜式内社と伝えられる楡山神社、中世の城郭とされる東方城跡など、数々の歴史の足跡が残されております。こうした過去の遺産を後世に伝えていくとともに、物心両面にわたりますます今後の発展に寄与することは、現在を生きる私たちの重要な責務です。

現在、深谷市では、産業の進展や市街地の拡大に伴い、生活・生産環境の整備を推進しております。幡羅地区を貫通する公共下水道東第１号雨水幹線の工事も、深谷市の発展のために実施された事業です。この工事に伴い、市教育委員会は、歴史豊かな幡羅地区の埋蔵文化財を記録保存するため、昭和56年度から59年度にかけて、発掘調査を実施しました。56年度・57年度の発掘調査については、既に報告書を刊行しておりますが、此の度、58年度・59年度の発掘調査成果がまとまり、ここに報告書として公表する運びとなりました。郷土史研究や文化財保護思想の普及などに少しでも貢献できれば幸甚に存じます。

発掘調査にあたり、関係者のみなさまや地元のみなさまには大変お世話になりました。心より感謝を申し上げて、序といたします。

昭和61年３月

深谷市教育委員会
教育長　鳥塚恵和男

例　　言

1．本書は、埼玉県深谷市公共下水道東第１号雨水幹線工事に伴う、深谷市大字東方字杉町 1,751 番地ほか所在遺跡の発掘調査報告書である。遺跡名は東方城山遺跡群とした。

2．発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、３次にわたって実施した。その日程は、第１次発掘調査が昭和58年７月23日～８月12日、第２次発掘調査が昭和58年10月７日～10月21日、第３次発掘調査が昭和59年７月９日～８月10日及び10月19日～11月14日である。

3．発掘調査経費は、昭和58年度～60年度国庫補助事業公共下水道東第１号雨水幹線工事費より支出した。

4．出土品の整理及び本書の図版作成等は、整理参加者全員で行った。なお、図版中の方位は座標北を示しており、本文中の遺構に関わる数値は確認面においてのものである。

5．本書の写真撮影及び執筆・編集は、澤出晃越が行った。

6．本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御助言を賜った。（敬称略）

井上肇、小川望、小俣悟、柿沼幹夫、栗原文蔵、笹森健一、利根川章彦、坂東隆秀

発掘調査の組織

調査主体者　深谷市教育委員会　教育長　鳥塚恵和男

事　務　局　深谷市教育委員会社会教育課　課長　武井克己（昭和58・59年度）

飯島光武（昭和60年度）

課長補佐兼文化財保護係長

島田良一（昭和58年度）

河田記久平（昭和59・60年度）

主事　大屋貞夫、村田正義、小林京子

調査担当者　深谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主事　澤出晃越

調査補助員　山口徹、清水健治、鈴木靖夫、田中秀逸（以上、発掘調査当時埼玉大学生）

調査参加者　井口知佐子、宇賀地桂子、榎本真琴、笠木ヒロ子、加藤佳子、金谷恵美子、河合詔子、神田真理子、木下敦子、久米紀子、倉上多美子、小沼和子、斉藤ひろみ、佐々木由紀子、里山まり子、猿田律子、柴崎侑子、砂田伊久子、滝口知子、竹中玲子、田代秀子、玉野井照子、田村喜代子、都築百合子、鉄石光美、富田教子、浜端春子、平野安喜子、平本法子、福田竟子、細川ケイ子、松村登志子、松村朋美、松本みづ江、水野祥代、溝越教子、本橋玲子、森光代、柳真理子、湯沢直子、渡部けい子、渡辺哲子、猪野好文、時田正一

目　　次

序
例言
目次

Ⅰ．発掘調査に至る経過……1

Ⅱ．遺跡の地理的・歴史的環境……3

Ⅲ．第１次発掘調査
１．調査の概要……6
２．遺構と出土遺物
(1)　遺構……6
(2)　出土遺物……12

Ⅳ．第２次発掘調査
１．調査の概要……22
２．遺構と出土遺物
(1)　遺構……22
(2)　出土遺物……24

Ⅴ．第３次発掘調査
１．調査の概要……31
２．Ａ区の遺構と出土遺物
(1)　遺構……32
(2)　出土遺物……40
３．Ｂ区の遺構と出土遺物
(1)　遺構……53
(2)　出土遺物……62
４．Ｃ区・Ｄ区の遺構
(1)　Ｃ区の遺構……73
(2)　Ｄ区の遺構……74

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１／40,000）
第２図　調査区周辺地形図（１／5,000）
第３次　第１次発掘調査区全測図（１／300）
第４図　第１～５・７・８号土坑実測図
第５図　第９～11号土坑実測図
第６図　第12～16号土坑実測図
第７図　第17・18・20号土坑実測図
第８図　第19・21～26号土坑実測図
第９図　第６・27～29号土坑、第１・２号溝状遺構実測図
第10図　第１次発掘調査出土遺物（１）
第11図　第１次発掘調査出土遺物（２）
第12図　第１次発掘調査出土遺物（３）
第13図　第２次発掘調査全測図（１／200）
第14図　第１・２号土坑、第１号溝状遺構実測図
第15図　第２～４号土坑実測図
第16図　第５～８号土坑実測図
第17図　第２次発掘調査出土遺物
第18図　第３次発掘調査Ａ区全測図（１／200）
第19図　Ａ区北半遺構実測図
第20図　Ａ区北半遺構土層断面図（１）
第21図　Ａ区北半遺構土層断面図（２）
第22図　第11～15号土坑実測図
第23図　第16～20号土坑・第１号溝状遺構実測図
第24図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物（１）
第25図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物（２）
第26図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物（３）
第27図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物（４）
第28図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物（５）
第29図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物（６）
第30図　第３次発掘調査Ｂ区全測図（１／200）
第31図　第１～４・６号土坑実測図
第32図　第７～11・13号土坑実測図
第33図　第14～16・18～20号土坑実測図
第34図　第23号Ａ～Ｃ・第27～29号土坑実測図
第35図　第24～26・30～36・38号土坑実測図
第36図　土層断面図・第１号井戸跡実測図
第37図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物（１）
第38図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物（２）
第39図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物（３）
第40図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物（４）
第41図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物（５）
第42図　第３次発掘調査Ｃ区・Ｄ区全測図(1／200)
第43図　Ｃ区の遺構実測図
第44図　Ｄ区の遺構実測図（１）
第45図　Ｄ区の遺構実測図（２）

Ⅰ．発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を挟んで群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人渋沢栄一の生地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは康正２年（1456）に上杉房憲が築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約89,000人、面積約70㎢で、農業生産高は県内随一を誇り、近年は工業団地の形成、住宅の増加など、急速に都市化が進行している。こうした都市化の波に対し深谷市では、道路網や上下水道の整備などを推進している。

このような状況を背景に、市東部の工業団地を南北に縦断する県道深谷弁財線建設予定地の、旧中山道（県道原郷熊谷線）から福川までの区間に、公共下水道東第１号雨水幹線の埋設工事が計画され、昭和56年度から５ケ年度計画で工事が実施されることになった。

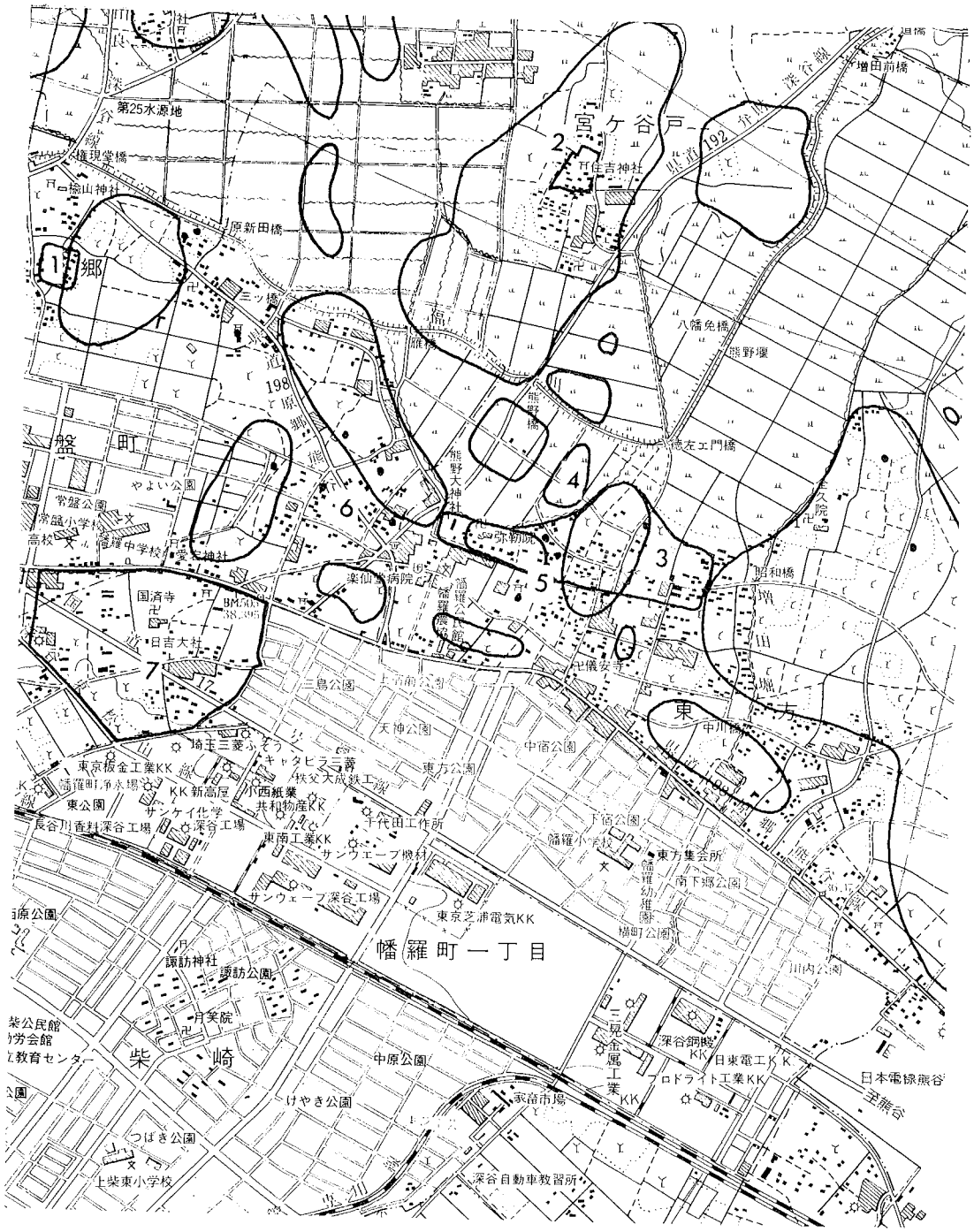
昭和56年度・57年度の工事予定地は、福川の南の水田面上約250mの区間であったが、工事に先立ち、埋蔵文化財の保護対策について市教育委員会と市建設部との間で協議が行われた。試掘調査の結果、工事予定区間のうち約140ｍの部分で遺構・遺物等を発見、遺跡名を城下遺跡とし、昭和56年12月14日～57年１月22日に第１次発掘調査を、昭和57年11月21日～12月15日に第２次発掘調査を実施した。第１次発掘調査では主に縄文時代後期・古墳時代後期の遺構等が、第２次発掘調査では主に江戸時代の遺構等が調査された。

昭和58年度～60年度の工事予定地は、旧中山道から台地末端に至る約500ｍの区間であった。上記のような経過及び周辺に木の本古墳群の一部、東方城跡があることなどから、台地上に遺跡が存在することは十分に予想された。そこで市教委員会と市建設部は、再び埋蔵文化財保護対策について協議し、各年度の工事予定地について、各年度の初めに試掘調査を行い、遺構・遺物等が発見された場合には、工事に先立って発掘調査を行うことになった。

昭和58年度の工事予定地は、旧中山道から北へ約300ｍの区間であった。昭和58年５月23・24日に試掘調査を行い、工事予定地の北半約100ｍの区間で遺構等が発見された。このため、昭和59年度・60年度の工事予定地が、縄文時代の遺跡・古墳・城跡等に隣接することも考慮し、遺跡名を東方城山遺跡群とし、昭和58年７月23日～８月12日に発掘調査を実施した。

ところがその後、昭和58年度の工事予定地が、更に北へ30mほど延長されることになった。そこで昭和58年９月13日に試掘調査を行い、遺構・遺物等を発見し、昭和58年10月７日～10月21日に東方城山遺跡群第２次発掘調査を実施した。

昭和59年度・60年度の工事予定地は、残る約170ｍの区間であった。昭和59年５月17日・18日に試掘調査を実施し、遺構・遺物等が発見されたため、昭和59年度中に残る部分全面の発掘調査が実施されることになった。工事予定地上の住宅の立退き等の関係から、この東方城山遺跡群第３次発掘調査は、昭和59年７月９日～８月10日、10月19日～11月14日の２回に分けて実施することになった。



1．伝幡羅太郎館跡　2．堀の内　3．東方城跡　4．城下遺跡　**5．東方城山遺跡群**
6．木の本古墳群　7．庁鼻和城跡

第1図　遺跡位置図（1／40,000）

Ⅱ．遺跡の地理的・歴史的環境

東方城山遺跡群は、深谷市大字東方字杉町及び字入郷ほかにわたる広い範囲にある。国鉄高崎線深谷駅の東北東約３km、櫛挽台地寄居面の北端部で、標高は35～36m、妻沼低地との比高は４～５mである。周辺には、木の本古墳群、東方城跡など、縄文時代から江戸時代に至る遺跡が密集している。

深谷市の地形を概観すると、市の中央部をほぼ東西に走る国鉄高崎線付近を境に、南半を占める櫛挽台地と北半を占める妻沼低地に二分される。櫛挽台地は、荒川の作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる扇状地性の洪積台地である。妻沼低地は、利根川の作用により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は乾燥した台地であり、晩冬から初春にかけてはひどい土埃に悩まされることもしばしばである。養蚕が盛んで桑畑が広がっているが、近年は花・植木などの栽培も盛んになっている。また、台地北端部は、居住環境の整備等により、住宅などが急増している。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ケ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼ高崎線沿いの崖線で、比高５～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高２～５mをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は、櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面の西には、岡部町山崎山などの松久丘陵を挟んで、立川面に比定される本庄台地が広がっている。寄居面の南側には、荒川を挟んで、下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層から成る残丘、標高98.0mの仙元山があり、熊谷市内の寄居面東端にも同様の残丘、標高77.4mの観音山がある。なお、台地北端の櫛挽面と寄居面の境付近に、活断層（深谷断層）が確認されている。

妻沼低地は、利根川流域に広がる低地である。南は熊谷市付近を境として、秩父山塊に連なる台地や丘陵と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は行田付近を境として加須低地に連なる。妻沼低地内は、利根川の氾濫や流路の変遷により、自然堤防が発達していたものと思われ、血洗島、矢島、大塚島、内ケ島などのように島地名が多いこともこのことを裏付けている。市内明戸地区では、昔は「畑七分に田が三分」と言ったらしいが、現在では耕地整理が進み、かなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である。しかし、深谷市遺跡詳細分布調査（註1.）によれば、寄居面北端部付近から西北へ、主に古墳時代後期以降の遺跡が、島地名の土地を包括して連続していることが確認された。このことは、自然堤防の状況をよく表しているものといえよう。なお、妻沼低地の南端、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心部があり、周辺では住宅が急増している。

深谷市内では、まだ旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代早期・前期の遺跡は、櫛挽台地の北端部に若干数確認されている。東方城山遺跡群の周辺でも、わずかではあるが、前期関山式土器片などが採集されている。縄文時代中期になると、島之上遺跡・出口遺跡（註２）、小台

第2図　調査区周辺地形図（1／5,000）

遺跡（註３）など、遺跡数は飛躍的に増加する。これらの遺跡は、中期末から後期初頭にかけてのものが多く、櫛挽面北端部の南北に開析された谷筋や、東方城山遺跡群のある寄居面北端部に密集している。こうした状況は、扇状地形にみられる扇端湧水に深く関わっているものと考えられる（註４）。堀之内期になると遺跡数は激減するが、桜ケ丘組石遺跡など、櫛挽面北端部に若干数確認されている。東方城山遺跡群の北側の低地面にある城下遺跡（註５）や、市街地の北側の深谷町遺跡（註６）では、堀之内期の遺構などが調査されている。

古墳時代後期には、妻沼低地内の自然堤防上に数多くの遺跡が存在するようになる。低地を見おろす台地末端にある東方城山遺跡群の周辺には、木の本古墳群がある。直径20mほどの小円墳が10数基ほど残っているが、以前はもっと多くの古墳が残っていたらしい。今回の調査区に隣接して、５号墳、８号墳がある。

14世紀の後半頃に、深谷上杉氏の祖、上杉憲英が、現在の国済寺に庁鼻和城を構築したといわれる。東方城山遺跡群の西南西約１kmである。憲英は、関東管領山内上杉憲顕の子である。憲英の曽孫である房憲は、古河公方足利成氏との戦闘がくり返される中で、康正２年（1456）、現在の市街地に深谷城を築いたといわれる。

深谷城の東の防備に当たっていたと考えられるのが、東方城山遺跡群にある東方城跡である。台地が低地側へ突出した部分が本丸伝承地で、土塁が残っている。本丸伝承地の西約400ｍにある熊野大神社の周囲にも１辺80mほどの正方形状に土塁が残っている。本丸伝承地の東約150ｍにも土塁が正方形状に巡っている箇所がある。城主別邸と呼ばれ、１辺70～75ｍほどである。

東方城の築城時期や築城者は不明である。『新編武蔵国風土記稿』の幡羅郡東方村の項には「古城跡　村ノ北ニテ広サ三町余今陸田ナリ相伝フ当所ハ古上杉氏領地ノ頃其家人住セシトイヘト其姓名ハ伝ヘス御打入ノ後松平丹波守康長ニ此辺ヲ賜ヒシ頃此所ヲ居所トセシカ慶長七年下総国古河ヘ所替ノ後廃セシト云今モ四方ニ土居ノ跡残レリ又コノ北に続キテ凡五段許ノ地ヲ御所屋敷ト呼フ想フニ上杉氏族ノ居館ナルヘシ」とある。豊臣秀吉の関東攻めにより深谷上杉氏は滅び、天正18年（1590）の徳川家康の関東入国に際し、松平康長がこの地に陣屋を構えたと伝えられる。康長は、慶長６年（1601）一万石を加増され、上野国白井城に移封、さらに翌慶長７年（1602）下総国古河に移封され、東方城は廃城となった。しかし、既に小規模な城下町が形成され、それが中山道沿いの宿町として存続したらしく、付近の小字名に、上宿、中宿、下宿、仲間町、杉町などがある。

なお、東方城跡の北約2.5kmに、康長の側室が居住したと伝えられる堀の内という館跡があり、東方城跡の北北東約4.5kmには、足利成氏の家臣といわれる増田重富の館跡がある。また、昭和56年度の城下遺跡発掘調査では、東方城の外堀の可能性のある溝状遺構が発見され、昭和58年度の城下遺跡第２次発掘調査（註６）では、18世紀頃の船着き場状の遺構が発見された。

註１　昭和56・57年度に実施。調査主体は深谷市教育委員会。
註２　横川好富ほか　「前畠・島之上・出口・芝山」　昭和52年３月　埼玉県教育委員会
註３　蛭間真一ほか　「小台遺跡」　昭和54年３月　深谷市小台遺跡調査団
註４　柿沼幹夫　「Ⅱ、立地と環境」（註２所収）
註５　澤出晃越ほか　「城下遺跡」　昭和58年３月　深谷市教育委員会
註６　澤出晃越　「城下遺跡（第２次）」　昭和59年３月　深谷市教育委員会

Ⅲ．第１次発掘調査

１．調査の概要

昭和58年７月20日、パワーショベルによる表土の除去から第１次発掘調査を開始した。23日より精査を行い、26日から遺構の調査に入った。28日・29日に、４ｍ間隔でグリッド杭を設定し、北から南へアラビア数字を、西から東へアルファベットを付してグリッドを呼称した。

調査中は天候に恵まれ、調査は順調に進展した。第17号土坑のみ遺物の出土量が多かったため、調査に多少手間取った。しかし他には困難な遺構もなく、８月12日、全景写真を撮影し、第１次発掘調査を終了した。

検出された遺構は、溝状遺構２条と土坑である。土坑は第29号までナンバーを付けたが、切り合い関係を含むものが多いため、実際の数は29よりも多い。縄文時代の遺構は第18号土坑１基のみである。円形の浅い土坑で、縄文土器片等が出土したが、近世の長方形の土坑に切られている。他はいずれも近世の遺構と考えられる。近世の遺物としては、土師質土器（皿など）、瓦質土器（内耳焙烙など）、陶器（擂鉢、茶碗、壺など）、磁器（染付茶碗など）、煙管、瓦などがある。流入したものと思われる遺物としては、縄文土器片、埴輪片などがある。

なお、調査面積は約800㎡である。

２．遺構と出土遺物

(1) 遺構（第４図～第９図）

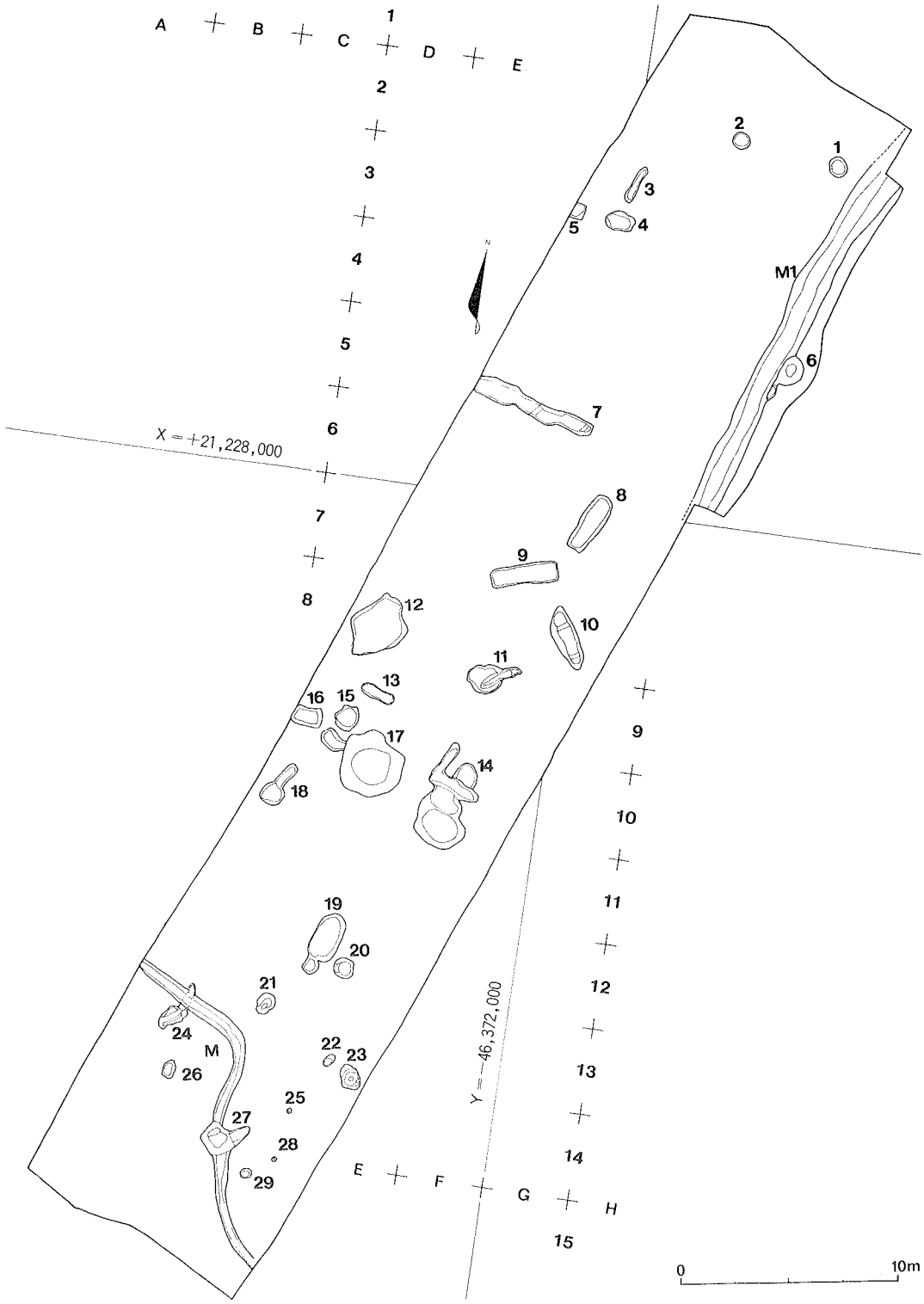
○第１号土坑（第４図）　２－Ｉグリッドに位置する。径約90cmの円形を呈する。深さは約30cmで、底面は平坦である。瀬戸・美濃系無頸壺が出土した。

○第２号土坑（第４図）　２－Ｈグリッドに位置する。90×75cmほどの、やや歪んだ円形を呈する。深さは15cmほどで、底面は東側へ緩く立ち上がっている。焙烙、磨き石などが出土した。

○第３号土坑（第４図）　３－Ｆ・Ｇグリッドに位置する。180×40cmほどの細長い形態を呈する。底面は平坦である。壁は、両端が緩く立ち上がっている。出土遺物はない。

○第４号土坑（第４図）　３－Ｆ・Ｇグリッドに位置する。140×90cmほどの長方形とも長円形ともつかぬ形態を呈する。深さは約25cm、壁は、西側の一部と南側を除き、比較的緩く立ち上がる。出土遺物はない。

○第５号土坑（第４図）　３－Ｆグリッドに位置する。全掘はできなかったが、幅75cmほどの長方形を呈するものと思われる。深さは約30cmで、底面は平坦である。瀬戸・美濃系の塗り分け茶碗が出土した。



第３図　第１次発掘調査区全測図（１／300）

○第６号土坑（第９図）　５－Ｉグリッドに位置する。第１号溝状遺構を切っているが、径150㎝ほどの円形を呈する。深さは約50㎝で、底は擂鉢状である。

○第７号土坑（第４図）　５・６－Ｅ・Ｆグリッドに位置する。幅70～100㎝ほどで東西に延びており、完掘はできなかったが、少なくとも土坑２基以上の切り合いとみられる。深さ15～20㎝で、底面は、東側は平坦で、西側は舟底状を呈する。出土した縄文土器片は、流入したものと考えられる。

○第８号土坑（第４図）　６・７－Ｆ・Ｇグリッドに位置する。250×100㎝ほどの長方形を呈する。深さは10㎝ほどで、ほとんど底面のみを調査したような状態であり、全容ははっきりしない。

○第９号土坑（第５図）　７・８－Ｅ・Ｆグリッドに位置する。350×90㎝ほどの長方形を呈する。深さ約40㎝。底面は平坦で、底面近くより礫が数個出土した。

○第10号土坑（第５図）　７・８－Ｆグリッドに位置する。300×110㎝ほどの長円形状を呈する。深さは約60㎝で、底面は舟底状を呈し、壁は南端が特に緩く立ち上がる。

○第11号土坑（第５図）　９－Ｆグリッドに位置する。400×100㎝ほどの細長い土坑が、350×280㎝ほどの円形状の土坑を切っている。細長い土坑は、深さ15～50㎝ほどで、西南へ向って下がる底面は舟底状である。円形状の土坑は深さ20～70㎝で、底面は凹凸が激しい。円形状の土坑より釉をかけ分けた茶碗が出土した。

○第12号土坑（第６図）　８・９－Ｄ・Ｅグリッドに位置する。550×400ほどの方形状を呈する。深さは25㎝ほどであるが、平坦な底面は砂礫を多く含む層に達している。

○第13号土坑（第６図）　９－Ｄ・Ｅグリッドに位置する。170×55㎝ほどの細長い形態を呈する。深さは30㎝ほどで、底面は平坦である。

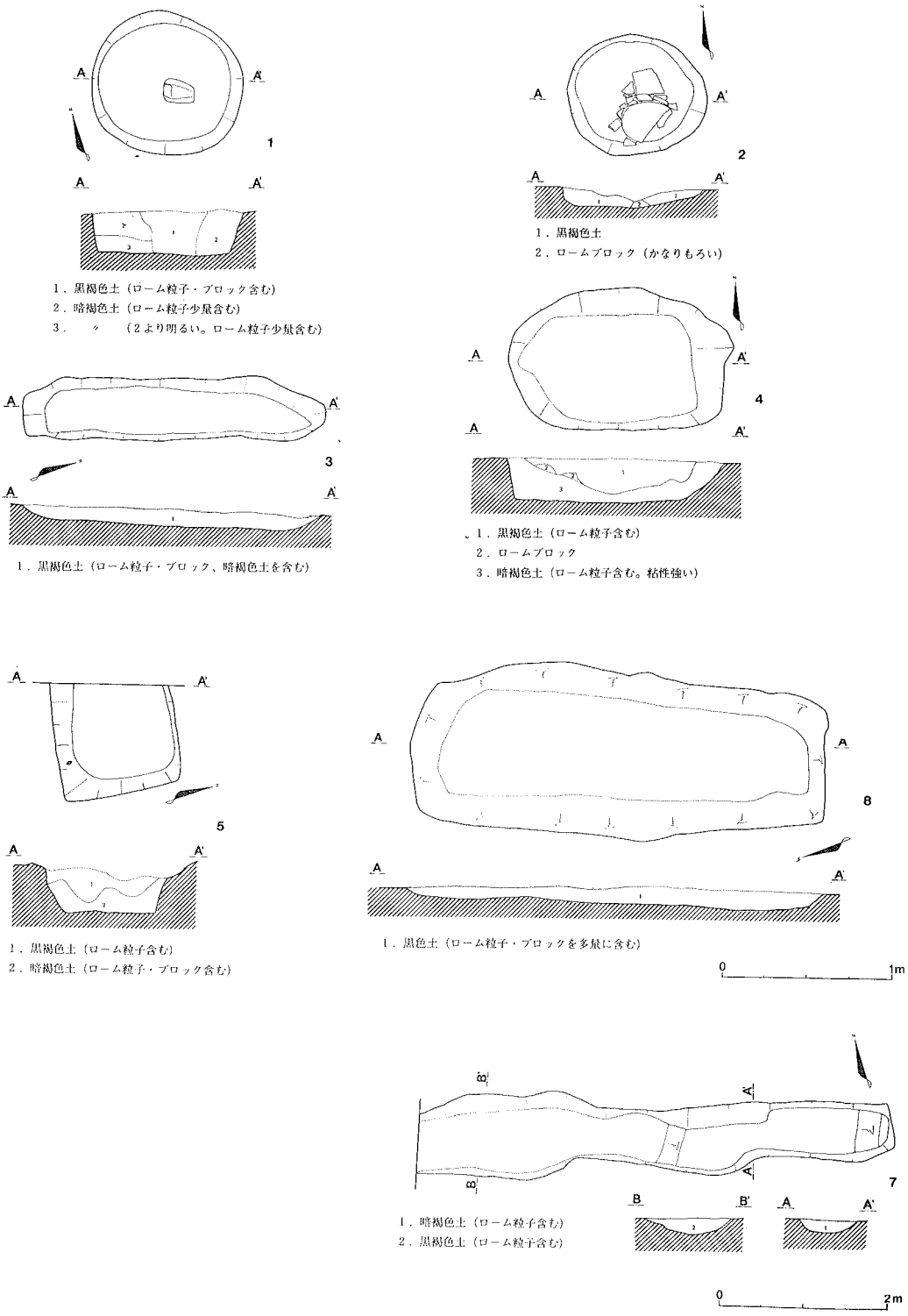
○第14号土坑（第６図）　９－Ｄグリッドに位置する。140×85㎝ほどの長方形を呈する。深さは30～35㎝で、底面は平坦である。

○第15号土坑（第６図）　９－Ｄグリッドに位置する。110×120㎝ほどの不整形を呈する。深さは10～15㎝で、底面は緩やかな傾斜がある。

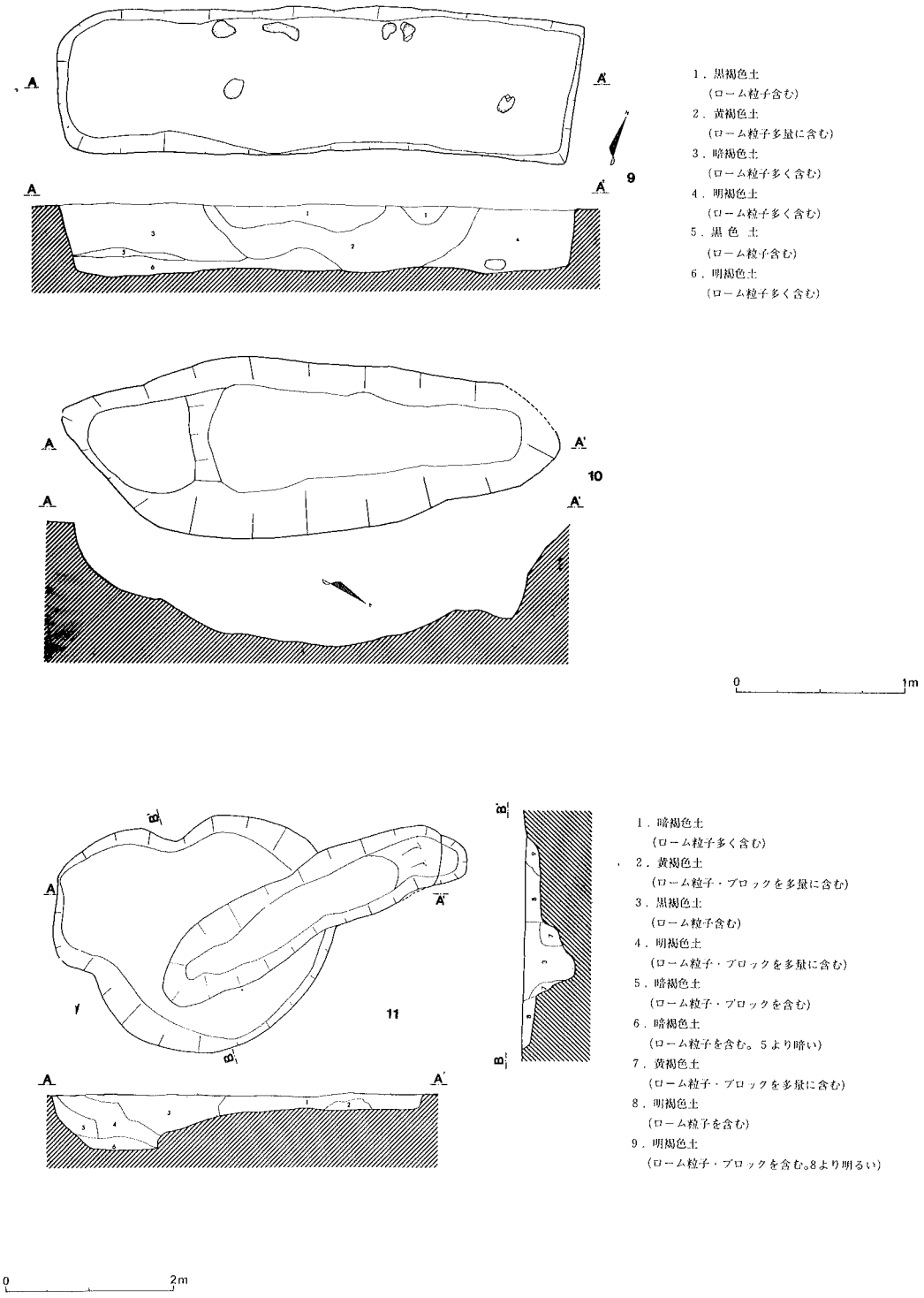
○第16号土坑（第６図）　10・11－Ｅグリッドに位置する。土坑４～５基の切り合いとみられ、全体の大きさは450×250㎝ほどである。深さは、最も深い部分で30㎝、浅い部分では10㎝ほどである。内耳土鍋、土師質皿、陶器片口、擂鉢などの破片が出土した。

○第17号土坑（第７図）　10－Ｄ・Ｅグリッドに位置する。径270～300㎝ほどの不整な円形状を呈し、幅約80㎝の小さな土坑を切っている。深さは約40㎝で、全体は擂鉢状を呈する。覆土には焼土・炭化物が多く含まれており、底面の一部は焼けていた。第７図のスクリーントーンは焼けていた底面の範囲である。陶器（茶碗など）、磁器（染付茶碗など）、煙管などが比較的多く出土した。

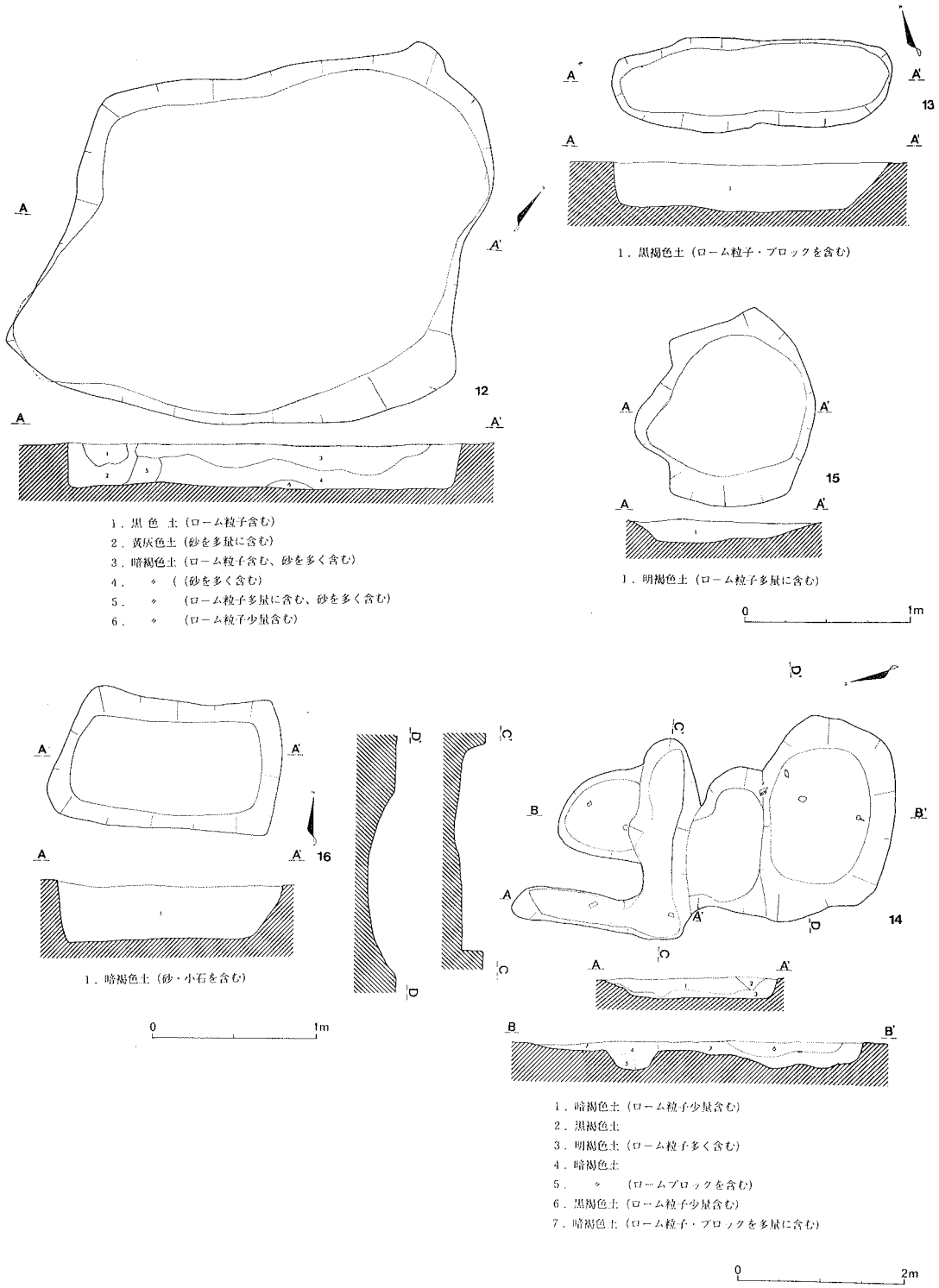
○第18号土坑（第７図）　10－Ｃ・Ｄグリッドに位置する。径約100㎝の円形状の土坑を、140×50㎝ほどの長方形状を呈する土坑が切っている。深さはいずれも10～15㎝と浅く、底面は平坦である。円形状の土坑からは縄文土器片等が比較的多く出土し、この第１次発掘調査では唯一の縄文時代の遺構と考えられる。



第４図　第１～５・７・８号土坑実測図（１／40・１／80）



第5図　第9～11号土坑実測図（1／40・1／80）



第６図　第12～16号土坑実測図（１／40・１／80）

○第19号土坑（第８図）　12―Ｄグリッドに位置する。240×140cmほどの長円形状を呈し深さ約40cmの土坑を、90×70cm、深さ約20cmほどの土坑が切っている。深い土坑の底面はやや凹凸がある。

○第20号土坑（第７図）　12―Ｄ・Ｅグリッドに位置する。径100cmほどの円形状を呈する。深さは約30cmで、底面は皿状に窪んでいる。焙烙片が出土した。

○第21号土坑（第８図）　13―Ｄグリッドに位置する。100×80cmほどの不整円形状を呈する。深さは約20cmで、片側はテラス状になっている。

○第22号土坑（第８図）　13―Ｄ・Ｅグリッドに位置する。65×45cmほどの長円形状を呈する。深さ約10cmの浅い土坑である。

○第23号土坑（第８図）　13・14―Ｅグリッドに位置する。130×95cmほどの不整長円形状を呈する。深さは約30cmで、全体は擂鉢状を呈するが、底面は中央が少し高くなっている。

○第24号土坑（第８図）　13―Ｂグリッドに位置する。140cm×80cm、深さ約30cmの土坑を、130×50cm、深さ約５cmの浅い土坑が切っている。深い土坑は、北西側がテラス状になっており、一部に焼土が認められ、陶器片等が出土した。浅い土坑は第２号溝状遺構も切っており、底面は平坦である。

○第25号土坑（第８図）　14―Ｄグリッドに位置する。径20cm、深さ約10cmの柱穴状の土坑である。

○第26号土坑（第８図）　14―Ｃグリッドに位置する。80×60cmほどの長方形状を呈する。深さは約15cmで、底面は平坦である。

○第27号土坑（第９図）　14・15―Ｃ・Ｄグリッドに位置し、第２号溝状遺構に切られている。240×150cmほどの不整形を呈する。深さは約60cmで擂鉢状を呈し、北東へ深さ約30cmの浅い部分が延びている。土坑２基の切り合いとも考えられるが、明確ではない。

○第28号土坑（第９図）　15―Ｄグリッドに位置する。径約25cm、深さ約５cmの小土坑である。

○第29号土坑（第９図）　15―Ｄグリッドに位置する。径約50cm、深さ約15cmの小土坑である。

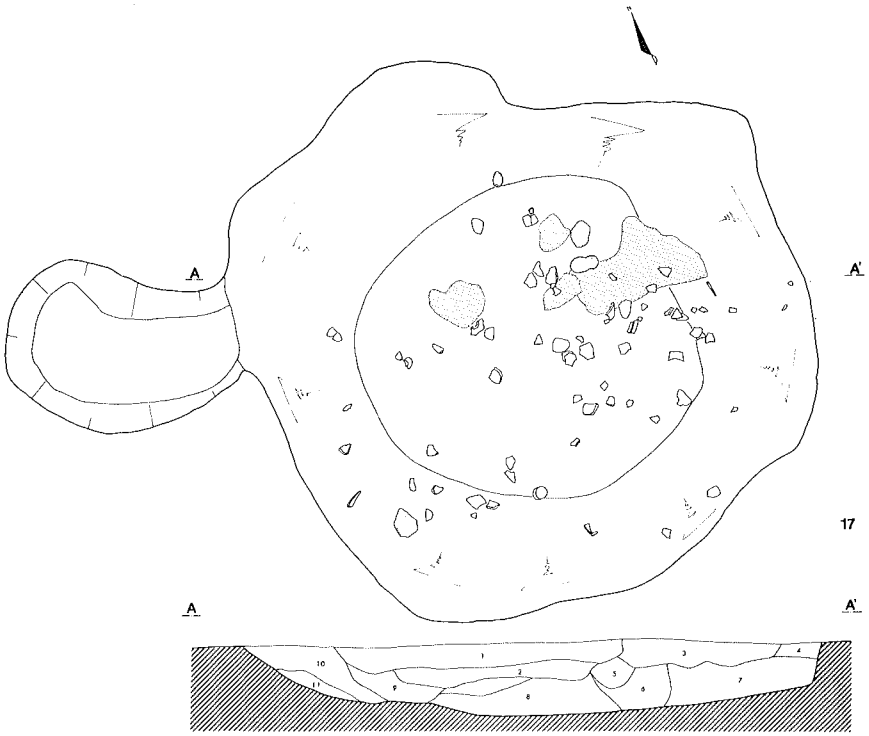
○第１号溝状遺構（第９図）　調査区の北東隅を、Ｎ―15°―Ｅほどの角度で延びている。上幅120～160cm、下幅30～60cm、深さ70～80cm、壁は斜めに立ち上がる。覆土中層に礫が並んでおり、同様のレベルから円筒埴輪の底部が出土した。他に、流入したものと思われる縄文土器片や、陶器片（香炉）などが出土した。

○第２号溝状遺構（第９図）　調査区の南隅を湾曲しながら横断しており、第24号土坑に切られ、第27号土坑を切っている。上幅40～70cm、下幅10～30cm、深さは最も深い部分で30cmで、南へ次第に浅くなっている。出土遺物はない。

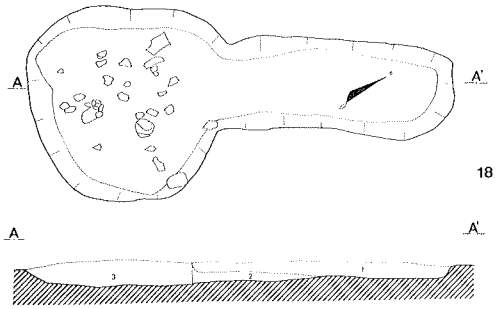
(2)　出土遺物（第10図１～第12図100）

○第１号土坑出土遺物（第10図１～３）

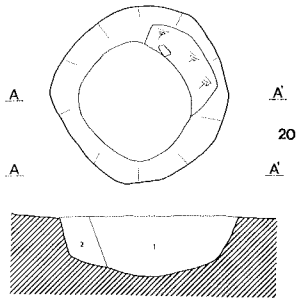
１．縄文土器片である。縄文はＲＬ単節縦転、内面はよく磨かれている。淡橙色を呈し、焼成良好。



1．黒褐色土（焼土、炭化物を含む）
2．〃
3．暗褐色土
4．〃　（ローム粒子、ブロックを多く含む）
5．明褐色土
6．〃　（ローム粒子を含む）
7．〃　（ローム粒子、ブロックを含む）
8．〃　（ローム粒子、ブロックを多量に含む）
9．暗褐色土
10．明褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）
11．〃　（ローム粒子を含む。10より暗い）



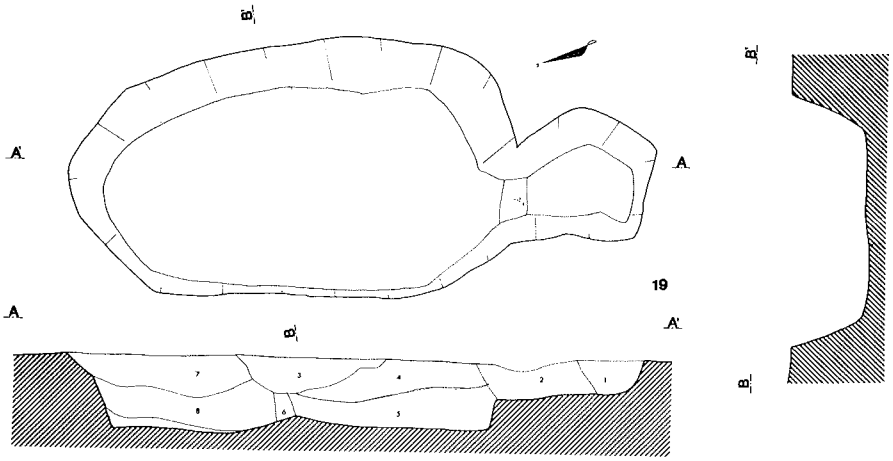
1．黒褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）
2．黄褐色土
3．明褐色土



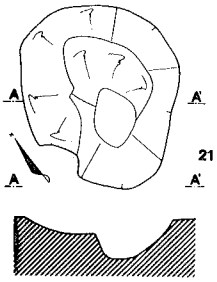
1．暗褐色土（ローム粉子、ブロックを含む）
2．黒褐色土（ローム粒子、ブロックを多く含む）

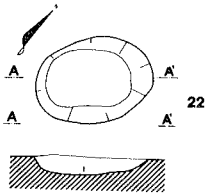
0　1m

第７図　第17・18・20号土坑実測図（１／40・１／80）

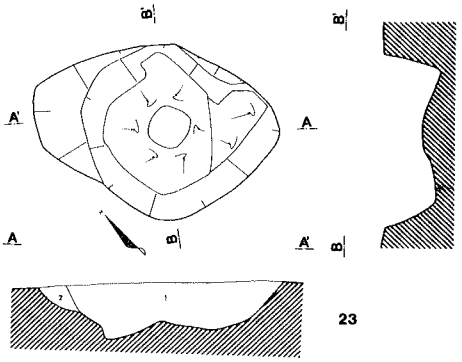


1．暗 褐 色 土（ローム粒子含む）
2．明黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
3．明灰褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
4．　〃　（ローム粒子を少量含む。3より暗い）
5．　〃　（ローム粒子を含む。4より暗い）
6．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
7．暗褐色土（ローム粒子含む）
8．　〃　（ローム粒子含む。7より暗い）
9．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）

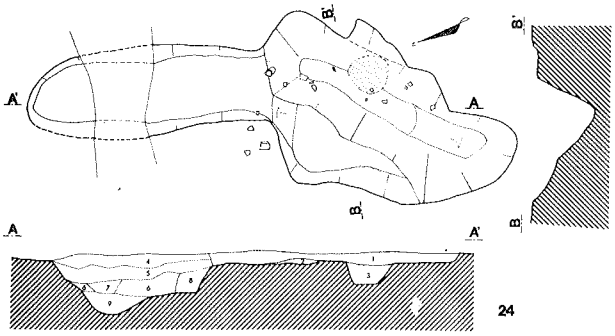


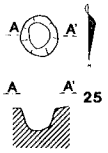


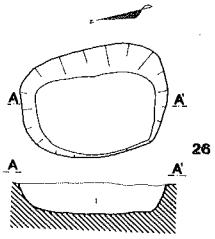
1．黒褐色土
（焼土粒子、炭化物わずかに含む）



1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
2．明褐色土（ロームを多く含む）





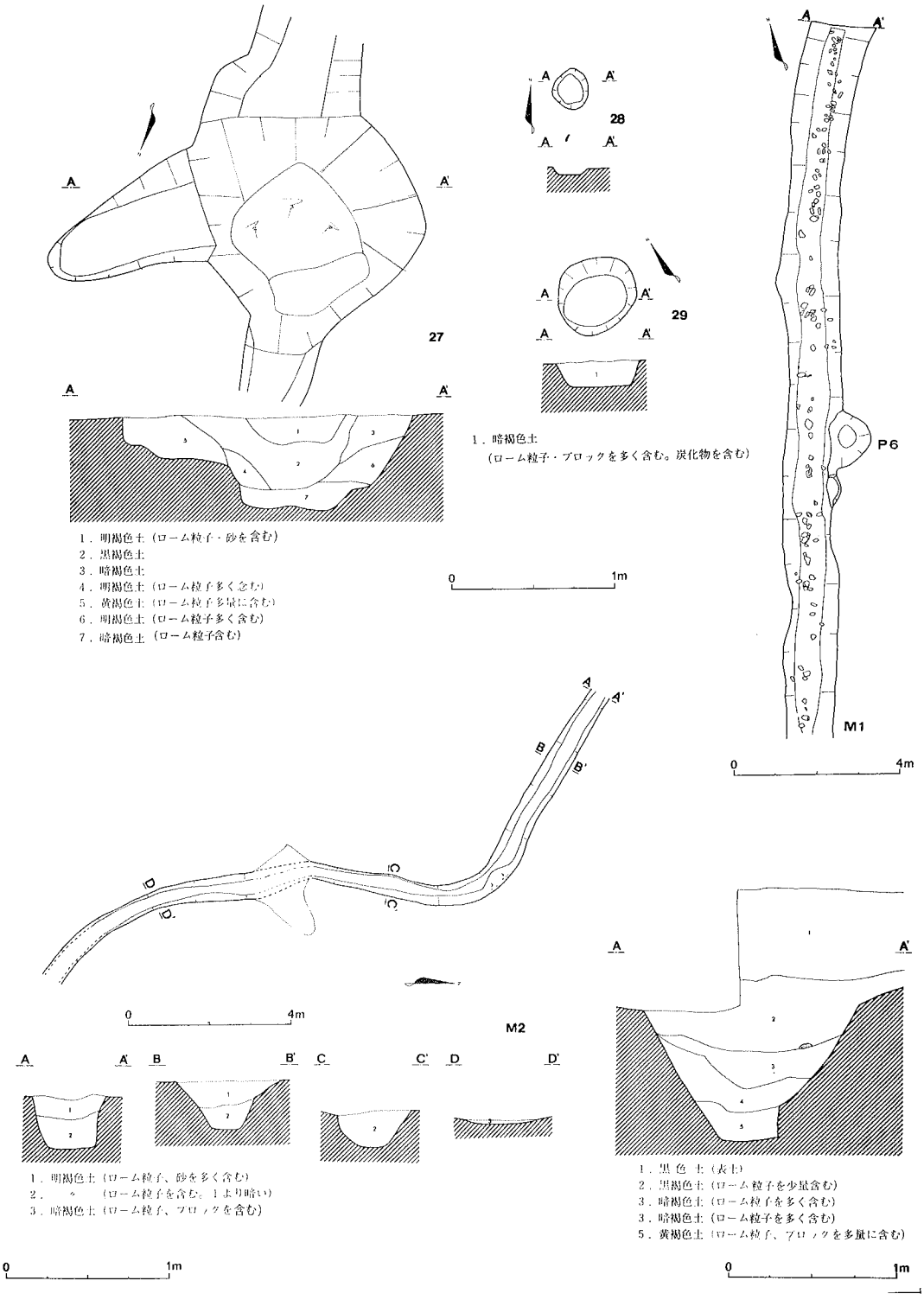


1．暗褐色土（ローム・ブロックを含む）

1．暗褐色土（ローム粒子・ブロック、砂を多く含む、炭化物をわずかに含む）
2．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）
3．明褐色土（ローム粒子を多く含む）
4．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む。炭化物、焼土ブロックをわずかに含む）
5．　〃　（ローム粒子・ブロックを多く含む。炭化物、焼土ブロックをわずかに含む。4より明るい）
6．　〃　（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
7．　〃　（焼土粒子を多く含む。4より暗い）
8．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
9．黒褐色土（ローム粒子を少量含む）

0　1m

第8図　第19・21～26号土坑実測図（1／40）



第９図　第６・27～29号土坑、第１・２号溝状遺構実測図（１／40・160）

2．瀬戸・美濃系の灰釉と鉄釉をかけ分けた丸碗である。底径4.8㎝。内面の灰釉に貫入が認められ、外面の濃茶色の鉄釉は、畳付のみふきとられている。胎土黄白色を呈し、焼成良好。

3．瀬戸・美濃系の陶器だが、徳利を無頸壺状に再利用したものとみられ、口唇部は内側が平坦に調整されている。口径9.3㎝、底径11.4㎝、器高19.0㎝。外面には黄褐釉が施され、貫入が認められる。内面にも釉が少し流れている。ほぼ完形だが、底面のみ打ち欠かれている。胎土黄白色を呈し、焼成良好。

○第2号土坑出土遺物（第10図4～8）

4．縄文土器片である。両耳壺の把手であろう。縄文はＲＬ単節。淡褐色を呈し、焼成良。

5～7．木などの軟質の物質の表面を磨いた石と思われる。5・7はスコリア質の角閃石安山岩、6はスコリア質の輝石安山岩。

8．焙烙である。内耳の有無は不明。推定口径39.0㎝、推定底径34.0㎝、器高5.7㎝。体部外面下位は指の押圧と指ナデにより調整されている。底面はほとんど無調整。

○第5号土坑出土遺物（第10図9）

9．濃茶色の鉄釉と貫入のある灰釉をかけ分けた茶碗である。推定底径5.0㎝、残存高2.6㎝

○第6号土坑出土遺物（第10図10）

10．流入した縄文土器片である。縄文はＲＬ単節、焼成良、橙褐色を呈する。

○第7号土坑出土遺物（第10図11～14）

11～14．流入した縄文土器片である。縄文はいずれもＲＬ単節。12は高台状の底部で、推定底径7.0㎝、残存高3.8㎝。焼成は14が良好、他は良。11は淡橙褐色、他は淡褐色を呈する。

○第11号土坑出土遺物（第10図15・16）

15．流入した縄文土器片である。縄文はＲＬ単節。焼成良、淡褐色を呈する。

16．貫入のある灰釉と濃茶色の鉄釉をかけ分けた、たらい形の茶碗である。推定口径11.0㎝、推定底径5.0㎝、器高5.4㎝。

○第14号土坑出土遺物（第10図17～22）

17．内耳土鍋の破片である。焼成良、黒灰色を呈する。

18．19．土師質の皿である。18は推定口径9.5㎝、推定底径5.0㎝、器高2.1㎝。19は推定底径5.5㎝、残存高0.9㎝。いずれも底面回転糸切り、焼成良、橙褐色を呈する。

20．湯飲み茶碗と思われる磁器である。推定口径7.5㎝。内外面とも灰釉が施され、灰白色を呈す。

22．片口の破片である。推定口径16.0㎝、残存高3.4㎝。内外面とも黄褐釉が施されている。

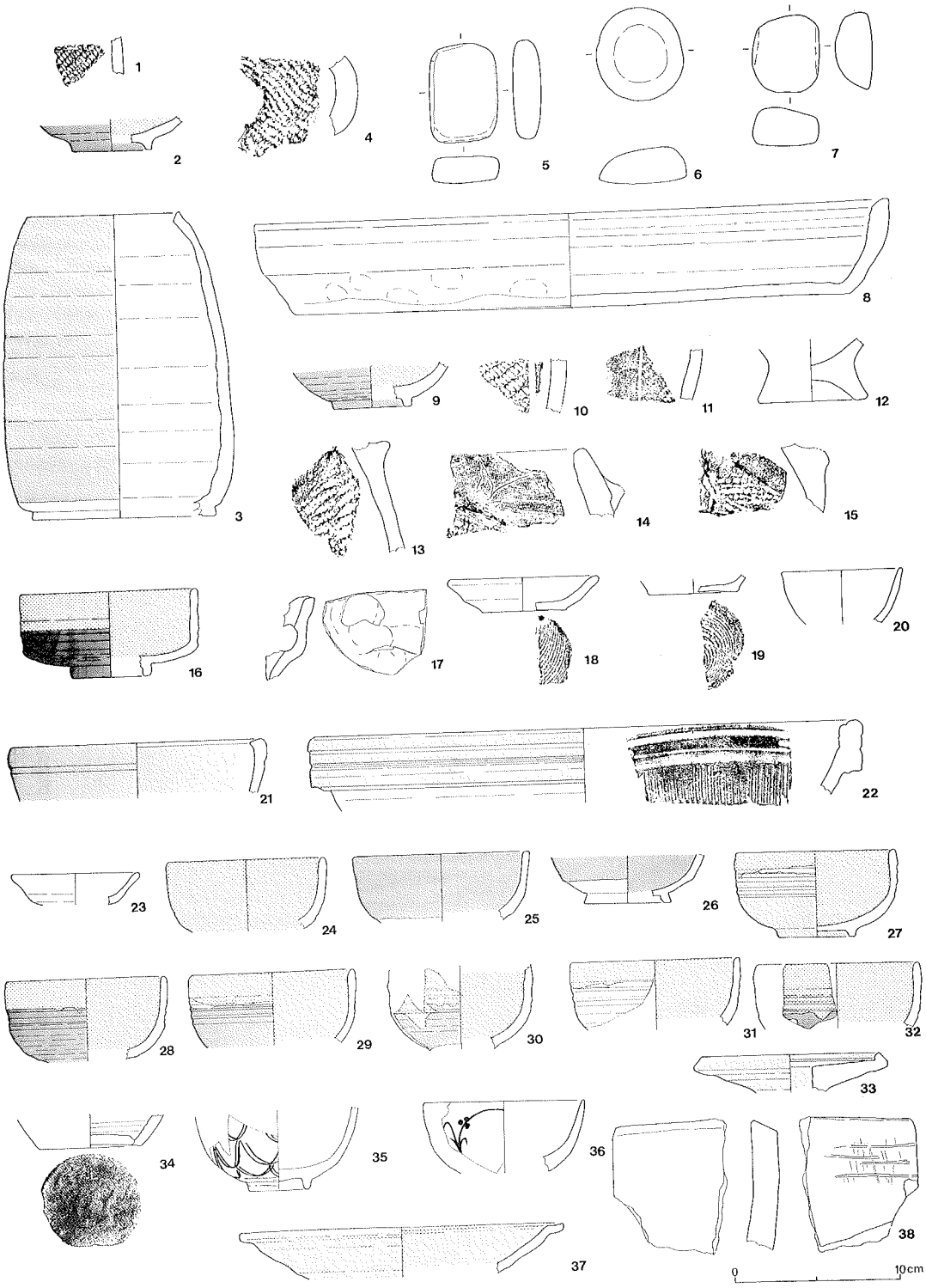
22．擂鉢の破片である。推定口径34.0㎝。内面の櫛目は8条1組。赤褐色を呈し、外面口縁部に薄く鉄釉が施されている。

○第17号土坑出土遺物（第10図23～第11図42）

23．土師質の皿である。推定口径8.0㎝。焼成良、橙褐色を呈する。

24．灰釉茶碗である。推定口径10.0㎝。貫入が認められる。胎土は黄白色を呈する。

25・26．濃茶色の鉄釉が施された茶碗である。外面高台脇以下は素地である。65は推定口径11.0㎝、胎土は黄白色を呈する。26は、推定底径5.5㎝、胎土は白色を呈する。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
10cm

27～32．鉄釉と貫入のある灰釉をかけ分けた茶碗である。鉄釉は、27と31が緑褐色を呈し、他は濃茶色。27は推定口径10.0cm、器高5.4cm。28は推定口径10.0cm。29は推定口径10cm強。31は推定口径10.5cm。32は推定口径10.0cm。27は右回転のロクロで調整されているようである。

33．花瓶の口縁部であろう。推定口径11.0cm。内外面とも黄褐釉が施され、上面に重ね焼痕がある。

34．備前系徳利の底部と思われる。推定底径6cm強。底部は円盤状で、底面にL字状の刻印がある。

35・36．染付茶碗である。35は推定底径4cm弱、呉須の発色は淡紺色で、畳付には銹が施されている。36は推定口径10.0cm、呉須の発色は淡青灰色である。

37．灰釉皿である。推定口径20.0cm。貫入が認められる。胎土は淡褐色を呈する。

38．平瓦である。厚さ1.6cm。内面に数条の沈線が施され、その周囲が磨られており、再利用された可能性がある。焼成良好・灰白色を呈する。

39．煙管の雁口である。火皿口径2.0cm、長さ4.0cm、羅宇結合部径1.0cm、銅板厚さ0.6～1.2mm。火皿の口はやや扁平で一部を欠損。全体に緑青がふいている。

40・41．煙管の吸口である。いずれも厚さ0.5～0.8mmの薄い銅板を丸めて作られている。40は長さ8.1cm、羅宇結合部径0.95cm、吸口径0.35cm。41は長さ5.5cm、羅宇結合部径0.9cm、吸口径0.45cm。いずれも緑青がふいており、41の銅板を丸めた結合部には金箔のような痕跡がある。

42．中世中国青磁の皿と思われる。推定口径12.5cm。青磁釉の発色は淡緑灰色、胎土は白色を呈す。

○第15号土坑出土遺物（第11図43・44）

43．縄文土器片である。縄文はLR単節。焼成やや不良、淡褐色を呈する。

44．鉢の底部であろう。推定底径14.5cm。外面に濃茶色の鉄釉が施され、内面には灰釉がわずかにたれている。底面は回転糸切りであろう。

○第20号土坑出土遺物（第11図45）

45．焙烙の破片である。外面口縁部及び内面は指ナデ、外面下位はヘラ削り。焼成良、黒褐色。

○第18号土坑出土遺物（第11図46～58）

46～57．いずれも円形の土坑より出土した縄文土器片である。46は、縄文はRL単節横転、焼成良好、暗褐色を呈する。47は波状口縁の頂部で、縄文はLR単節、焼成やや不良、黄白色を呈する。48は、縄文はLR単節、焼成良、暗褐色を呈する。49は、縄文はRL単節、器面はよく磨かれており、焼成良好、外面黒灰色、内面橙褐色を呈する。50は、縄文はLR単節横転、焼成やや不良橙褐色を呈する。51は、縄文はLR単節縦転、焼成良、淡橙褐色～黄灰褐色を呈する。52は、縄文はLR単節縦転であろう。焼成良好、外面暗褐色、内面淡褐色を呈する。53は、縄文はRL単節縦転、微隆線が垂下しており、焼成良好、赤褐色を呈する。54は、上下に懸垂文がみられ、縄文はRL単節であろう。焼成良好、外面黒灰色、内面橙色を呈する。55は、縄文はLR単節縦転外面に炭化物付着、焼成良好、淡黄色を呈する。56は、縄文はLR単節縦転、焼成良好、淡褐色を呈する。57は、縄文はRL単節縦転、焼成やや不良、外面橙褐色、内面暗褐色を呈する。

58．磨石と思われる。長さ11.0cm、幅7.1cm、厚さ3.7cm。扁平な自然石が用いられている。凹の上面と平坦な下面に使用痕が認められる。石質は角閃石安山岩である。

○第24号土坑出土遺物（第11図59～61）

59・60．縄文土器片である。59は口縁部の破片であろう。内面はよく研磨されている。焼成良、淡橙褐色を呈する。60は、縄文はＲＬ単節、焼成良、橙褐色を呈する。

61．磨石である。残存長7.5㎝、幅5.7㎝、厚さ2.0㎝。約２分の１を欠損しているものと思われる。やや扁平な細長い自然石が用いられ、図の上面に凹みがある。石質は輝石安山岩。

○第１号溝状遺構出土遺物（第12図83～100）

83～97．流入したと思われる縄文土器片である。83は、口縁部直下に微隆線が施されている。焼成良、黄白色を呈する。84は両耳壺の口縁部と思われる。焼成良、外面淡橙褐色、内面灰白褐色を呈する。85は、縄文はＬＲ単節縦転、焼成良、黄白色を呈する。86は、縄文はＬＲ単節縦転と思われる。焼成良、淡褐色を呈する。87は、縄文はＬＲ単節と思われ、焼成良好、淡黄色を呈する。88は、縄文はＲＬ単節縦転、焼成やや不良、外面淡褐色、内面灰褐色を呈す。89は、縄文はＬＲ単節縦転、内面に炭化物付着、焼成良好、淡橙色を呈する。90は、縄文はＲＬ単節の縦転と思われ、焼成良、橙褐色を呈する。91は、微隆線が垂下しており、縄文はＬＲ単節と思われ、焼成良好、黄灰色を呈する。92は、縄文はＲＬ単節縦転、焼成良好、淡黄色を呈する。93・94は条線文土器である。93は焼成良、淡褐色～暗褐色を呈する。94は、焼成良、橙褐色を呈する。95・96は同一個体と思われる。波状口縁で、平行沈線間にＬＲ単節の縄文が横位に施されている。外面に炭化物付着。焼成良好、淡褐色を呈する。97は、縄文はＬＲ単節、焼成良、外面黄白色、内面黒灰色を呈する。

98・99．流入したと思われる埴輪片である。98は、焼成良、橙褐色を呈する。99は、円筒埴輪の底部である。推定底径16cm強、残存高16.1cm。やや扁平である。底は指の押圧等により粗く調整されているが、器肉はかなり外側へはみ出している。ハケ目は５～６本／１㎝。焼成良好、橙褐色を呈する。

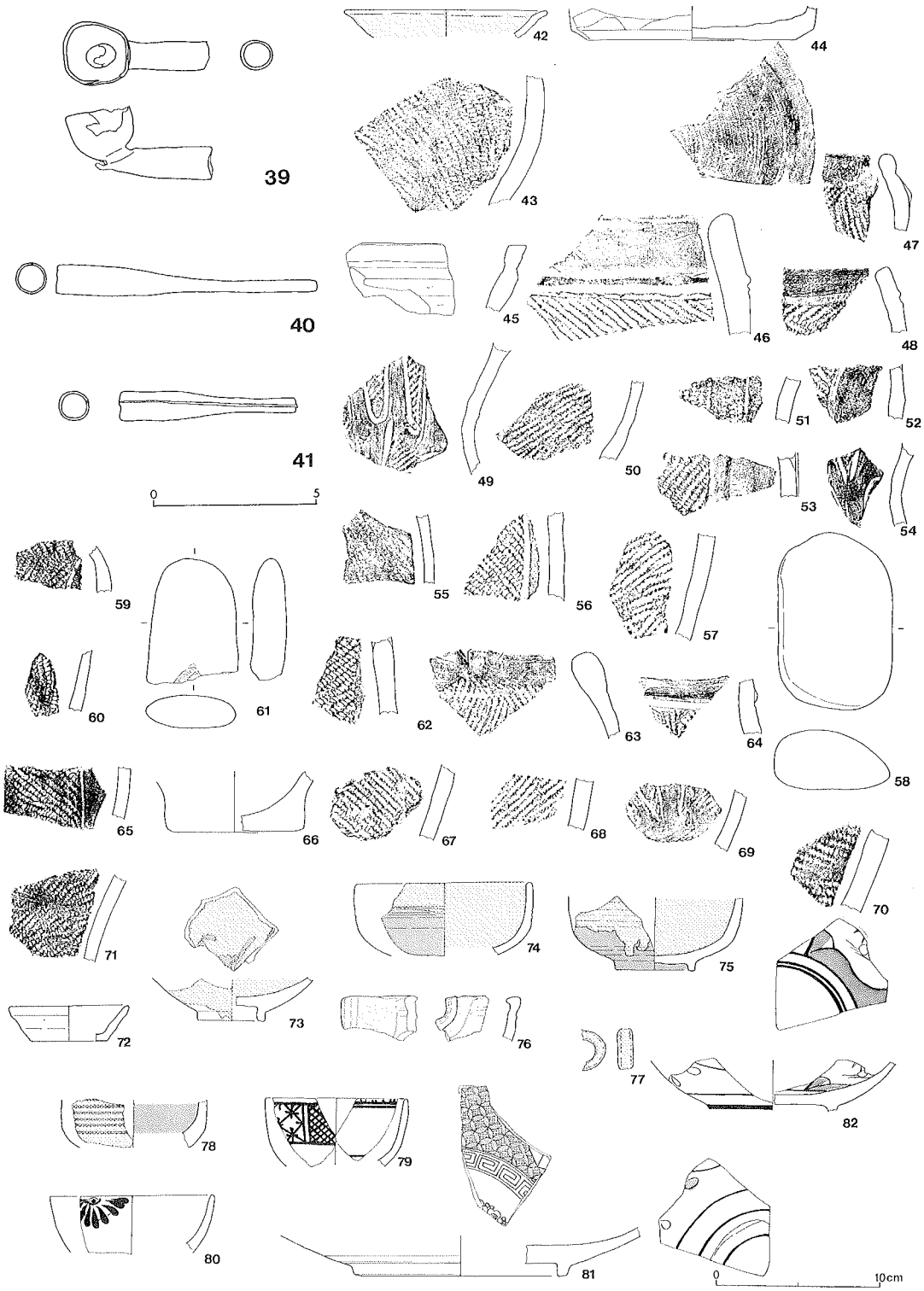
100．香炉の破片である。推定口径12cm弱。外面及び内側へ少しせり出した口唇部上面に灰釉が施され、内面は素地である。焼成良好、素地は黄白色を呈する。

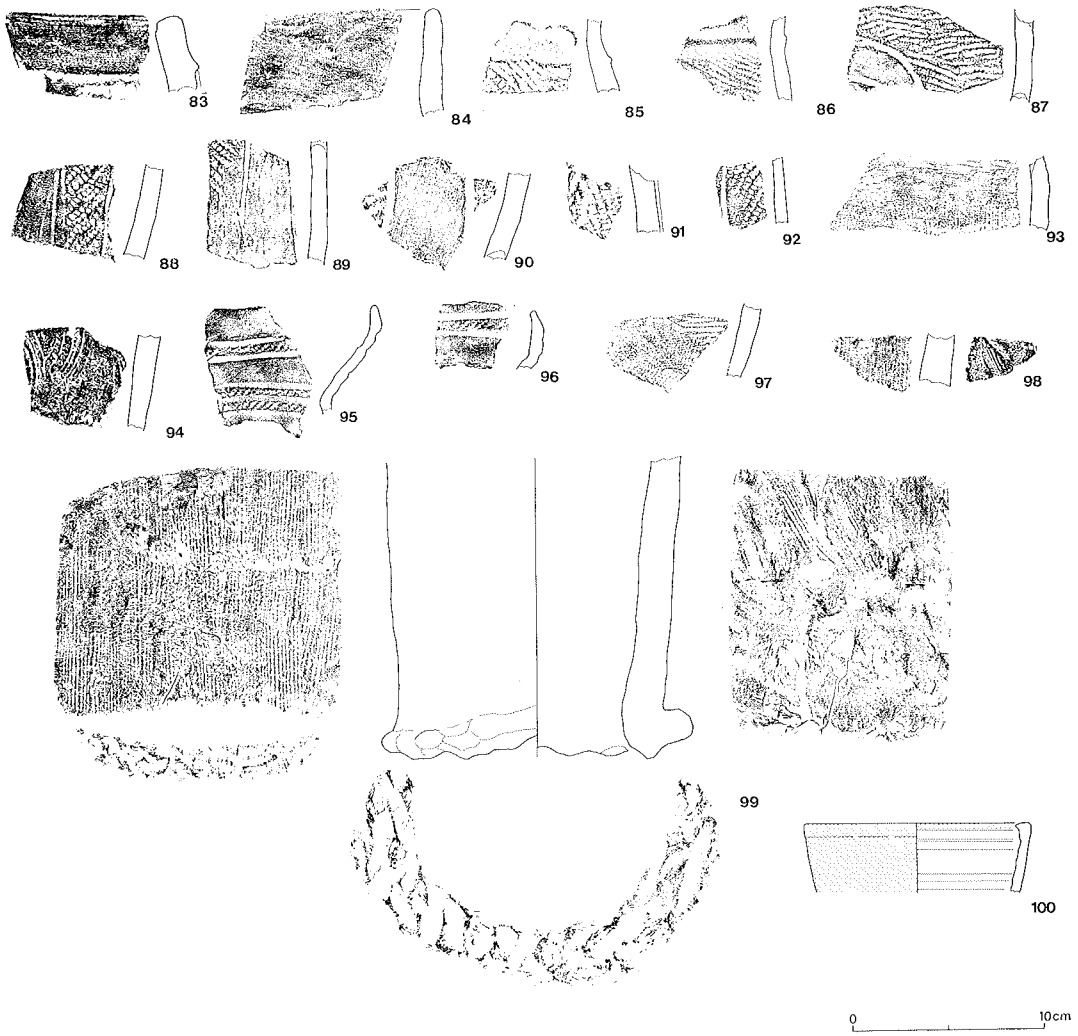
○表面採集遺物（第11図62～82）

62～71．縄文土器片である。62は、縄文はＲＬ単節縦転、焼成良好、淡黄色を呈する。63は波状口縁の頂部である。縄文はＲＬ単節、焼成良好、淡褐色～灰褐色を呈する。64は、縄文はＬＲ単節、焼成良好、橙褐色を呈する。65は、縄文はＬＲ単節縦転、焼成良好、外面淡褐色、内面黒褐色を呈する。66は、平底の底部である。焼成やや不良、黄白色を呈する。67は、縄文はＬＲ単節縦転、焼成良、淡褐色を呈する。68は、縄文はＲＬ単節縦転、焼成良、黄褐色を呈する。69は底部に近い破片と思われる。縄文はＲＬ単節、焼成良好、淡褐色を呈する。70は、縄文はＲＬ単節、焼成良、黄褐色を呈する。71は、縄文はＬＲ単節、焼成良好、淡褐色を呈する。

72．土師質の皿である。推定口径7.5㎝強、推定底径4.5㎝弱、器高2.2㎝。底面は回転糸切り。焼成良好、橙褐色を呈する。

73．鉄絵染付皿である。推定底径４㎝強。高台を含む底面を除き、全面に細かい貫入のある飴釉が施されている。素地は灰白褐色を呈する。


39
40
41
0
5
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
0
10cm



第12図　第１次発掘調査出土遺物(3)（１／４）

74・75．濃茶色の鉄釉と貫入のある灰釉をかけ分けた茶碗である。74は推定口径11.0cm弱。75は推定底径5.0cm弱。胎土はいずれも黄白色を呈する。

76．片口の破片である。緑色を帯びた黄褐釉が全面に施されている。貫入が認められる。

77．全面に貫入のある灰釉が施された磁器である。花瓶などの把手と思われる。胎土灰白色を呈す。

78．外面に薄い灰釉、内面に濃茶色の鉄釉が施された茶碗である。外面は平行に細かい刺突線が巡る。須恵質に近く、胎土は灰色を呈する。

79・80．染付茶碗である。79は推定口径9.0cm弱、呉須の発色は紺色で、貫入が認められる。80は推定口径10.0cm強。呉須の発色は青灰色である。

81・82．染付皿である。81は、推定底径13.0cm弱、上面にいわゆるプリント柄による文様が施されている。呉須の発色は青紺で鮮明。畳付は釉がふきとられている。82は、高台脇推定径8.0cm、呉須の発色は青紺で鮮明である。

Ⅳ．第２次発掘調査

１．調査の概要

第２次発掘調査の調査区は、第１次発掘調査区の北約50m にあり、調査面積は約200㎡である。

昭和58年10月６日、パワーショベルによる表土の除去から第２次発掘調査を開始した。７日午前中に精査により遺構を確認し、午後から遺構の調査に入った。12日に、座標北に揃えた４m 間隔のグリッド杭を設定し、第１次発掘調査に倣い、北から南へアラビア数字を、西から東へアルファベットを付してグリッドを呼称した。

調査は、五輪塔空風輪が出土した第２号土坑の井戸跡と思われる部分のみやや手間取ったが、他は順調に進行した。10月19日には調査区の全景写真を撮影し、20日の午前中に周辺の安全を確認し器材を撤収して調査全体を終了した。

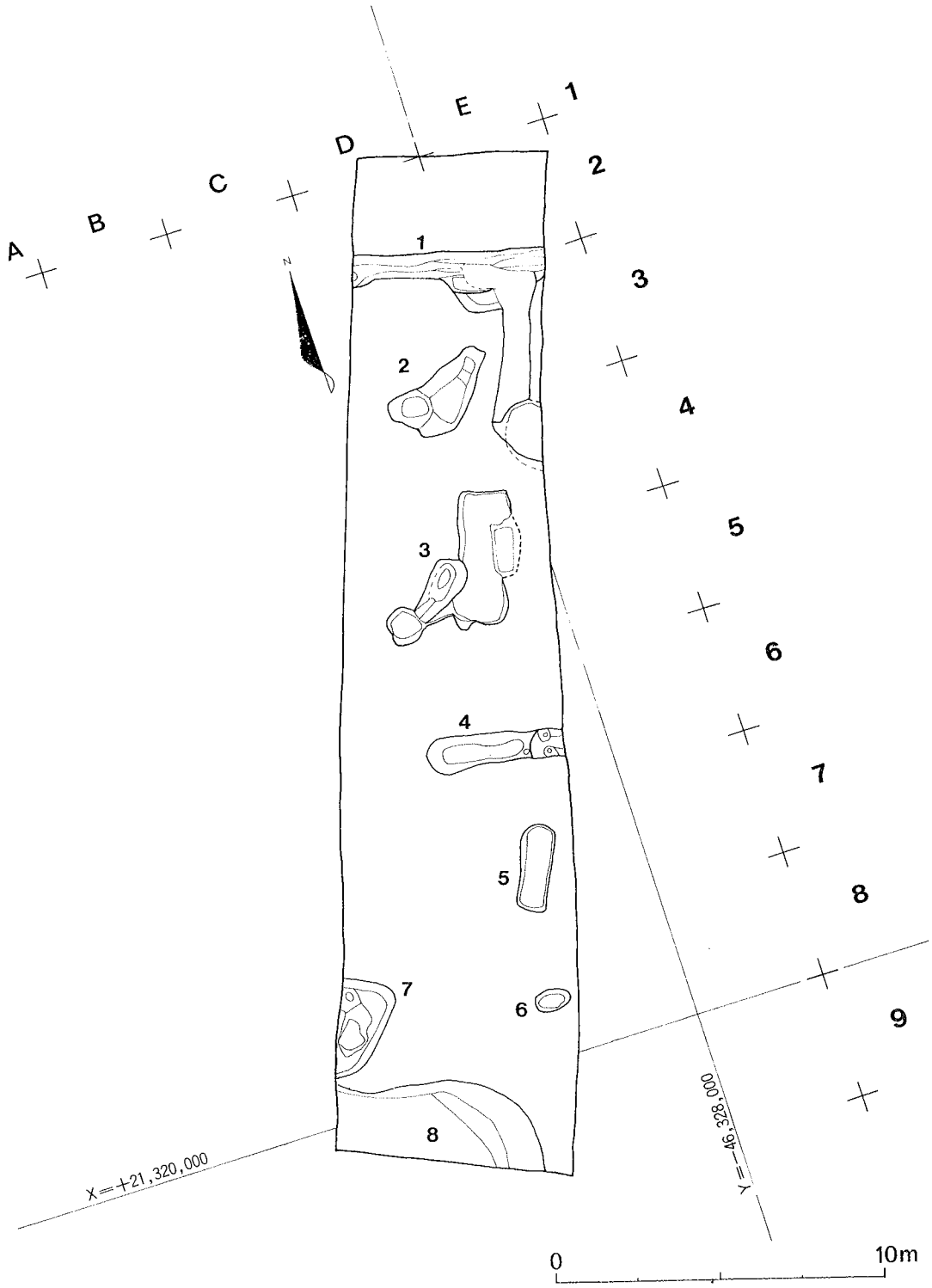
検出された遺構は、溝状遺構１条と土坑で、いずれも近世の遺構と考えられる。土坑は第９号までナンバーを付したが、切り合い関係を含むものがあるため、実際の数はもう少し多く、前記の第２号土坑の一部は井戸跡と思われる。出土遺物は、前記の五輪塔空風輪の他、土師質土器（皿、焙烙など）、瓦質土器（手焙りなど）、陶器（擂鉢、茶碗、壺など）、磁器（染付茶碗）、石臼（粉挽臼上臼）などがなる。また、流入したと思われる遺物として、縄文土器片、埴輪片、須恵器片などがある。

２．遺構と出土遺物

(1) 遺構（第14図～第16図）

○第１号土坑（第14図）　２・３―Ｄ・Ｅグリッドに位置する。少なくとも土坑４基以上の切り合いと考えられ、北隅は第１号溝状遺構を切っている。全体の規模は長さ700cmほどで、深さは、南端の壁の一部が袋状となった不整長円形を呈する土坑が約60cm、中間の南北に細長い幅約120cmの土坑が約30cm、北端部が30～50cmである。底面はそれぞれほぼ平担であった。不整長円形の土坑から、いわゆる瀬戸天目の破片が出土した。

○第２号土坑（第14図・第15図）　３・４―Ｄグリッドに位置し、土坑３基（１基は井戸跡か）の切り合いと考えられる。全体の規模は330×170cmほどで、深さは、北端の土坑が約45cm、中央の土坑が約70cm、南西端の径約120cmの不整円形を呈する土坑が約160cmである。最も深い不整円形の土坑は、底は砂利層まで達しており、井戸跡の可能性がある。この井戸跡と思われる土坑の中には礫がびっしりと充満しており（第15図）、五輪塔空風輪、石臼片、土師質皿、瓦質擂鉢片などが出土した。



第13図　第２次発掘調査全測図（１／200）

○第３号土坑（第15図）　４・５－Ｃ・Ｄグリッドに位置し、土坑４基以上の切り合いと考えられる。中央の長方形を呈する土坑は、410×150cmほどで、深さは35～40cmほどである。その東辺を切って170×70cm、深さ約100cmの長方形を呈する土坑が構築されている。この土坑の東辺は攪乱を受けている。中央の長方形土坑の南西辺には深さ約90cmの土坑があり、さらにその南西端には径100～120cm、深さ約20cmの不整円形を呈する土坑がある。

○第４号土坑（第15図）　６－Ｃ・Ｄグリッドに位置し、土坑２基の切り合いの可能性がある。西側の土坑は、350×100cmほどの大きさだったものと思われ、深さは約30cmである。東側の土坑は、全体を知ることはできなかったが、幅は西側の土坑とほぼ同様、深さは約20cmで、西端に深さ約55cmと約35cmの２ヶ所の柱穴状の部分が認められた。

○第５号土坑（第16図）　７－Ｄグリッドに位置する。270×80cmほどの長方形を呈し、深さは約30cmである。底面は緩い起伏がある。流入したものと思われる縄文土器片、須恵器片が出土した。

○第６号土坑（第16図）　８－Ｃ・Ｄグリッドに位置する。110×75cmほどの不整長円形を呈し、深さは約10cmである。底面には緩い凹凸がある。

○第７号土坑（第16図）　７・８－Ｂ・Ｃグリッドに位置する。全掘はできなかったが、調査できた部分だけでも長さ310cmほどになる。深さは最も深い部分で約70cmである。全体は擂鉢状を呈するが、底面には凹凸がある。底面近くから礫が数多く出土しており、再利用された可能性のある埴輪片、鉄釉の茶碗片などが出土した。

○第８号土坑（第16図）　調査区の南端に位置し、全掘はできなかったが、長さが640cm以上もある大きな土坑である。深さは約50cmで、東側の壁はごく緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。出土遺物は、流入したものと思われる縄文土器片、須恵器片の他、瓦質土器片（手焙り）、陶器片（茶碗、擂鉢、徳利、耳付壺）、磁器片（染付茶碗）などである。

○第１号溝状遺構（第14図）　調査区の北端を東西に横断しており、第１号土坑北端部に切られている。上幅70～120cm、下幅15～30cm、深さ35～45cm。東側は壁の中位に稜を有し、高底差等による明確な方向性は確認できなかった。

(2)　出土遺物（第17図１～24）

○第１号土坑出土遺物（第17図１）

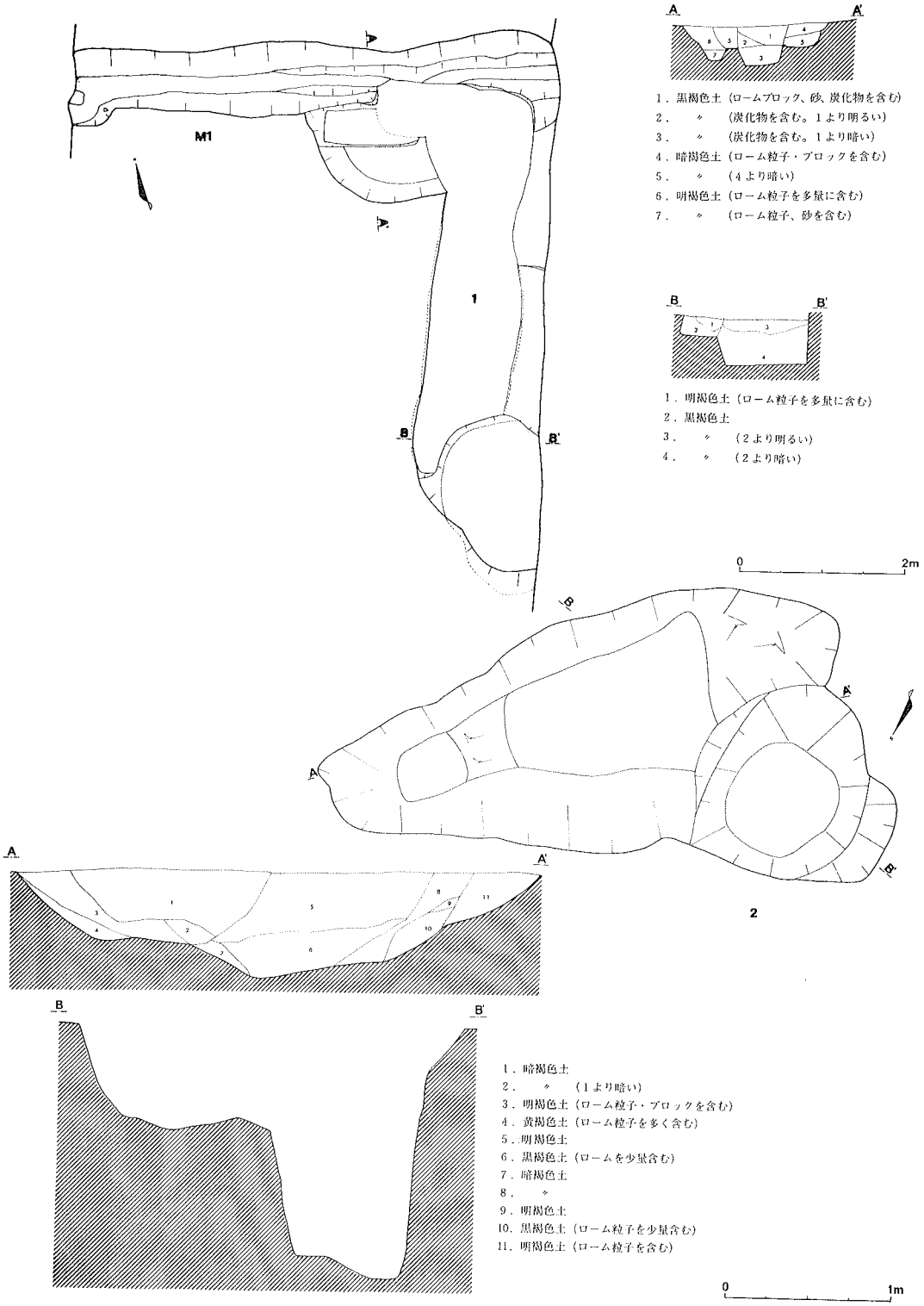
１、いわゆる瀬戸天目の口縁部である。推定口径10.0cm。内外面とも黒褐色の鉄釉が施されており、胎土は灰白色を呈する。第１号土坑南端の不正円形の土坑より出土した。

○第２号土坑出土遺物（第17図２～６）

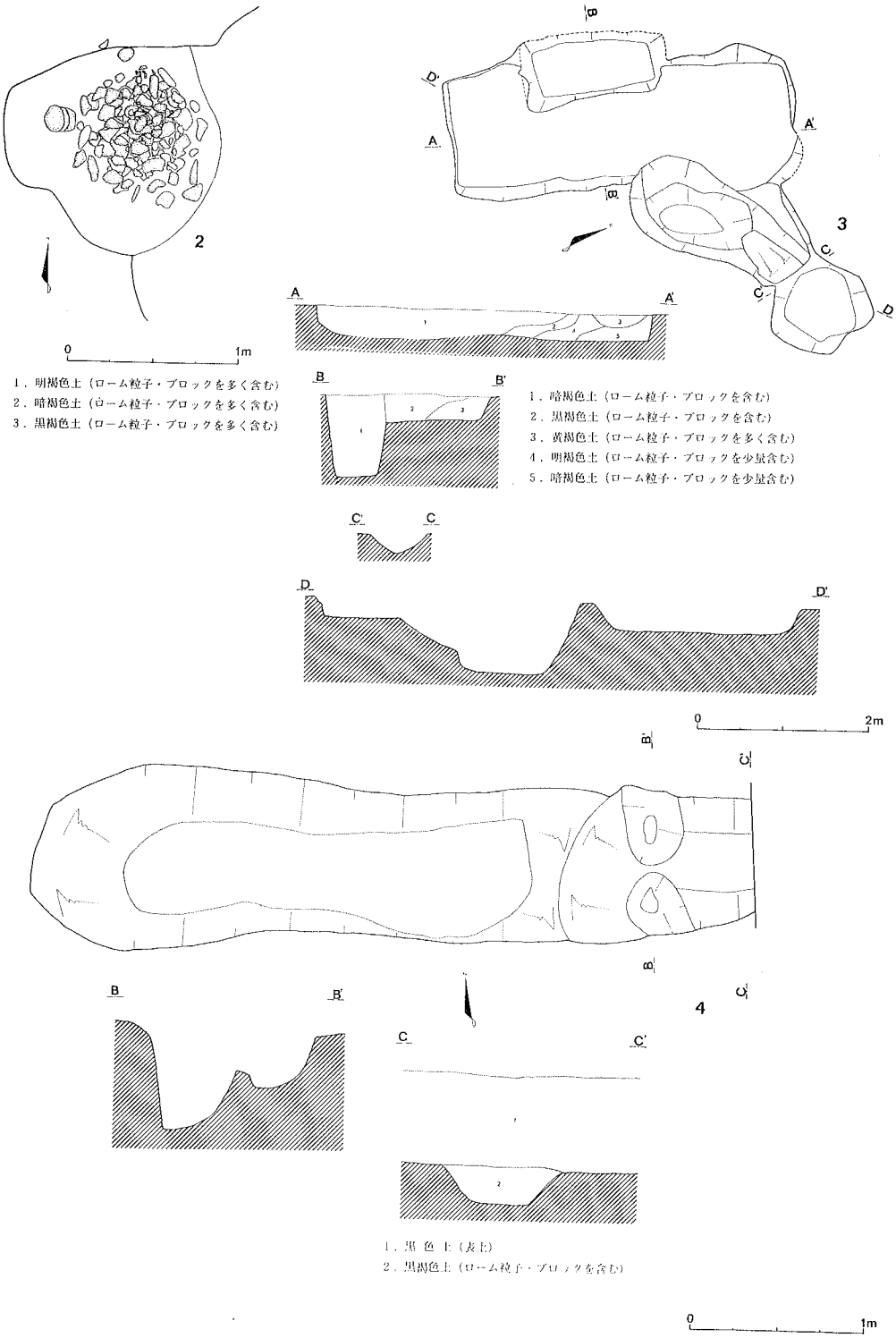
２～６は、いずれも第２号土坑南東端の、井戸跡の可能性のある土坑より出土したものである。

２、土師質の擂鉢である。内面の櫛目は10条１組で、内面はよく使用されている。内外面とも炭化物付着。焼成良好、暗橙褐色を呈する。

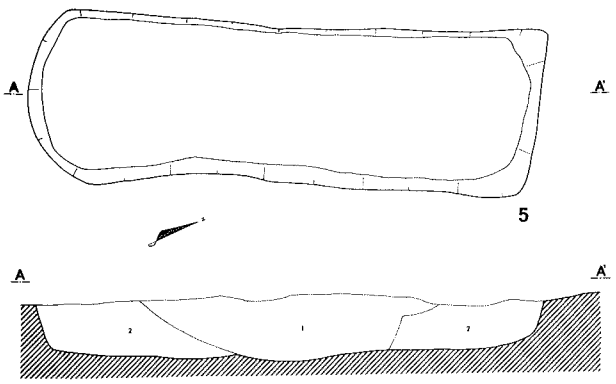
３、土師質の皿である。推定口径11cm強、推定底径 6.5 cm弱、器高 3.4 cm。口縁部は内彎気味に直



第14図　第1・2号土坑、第1号溝状遺構実測図（1／40・1／80）

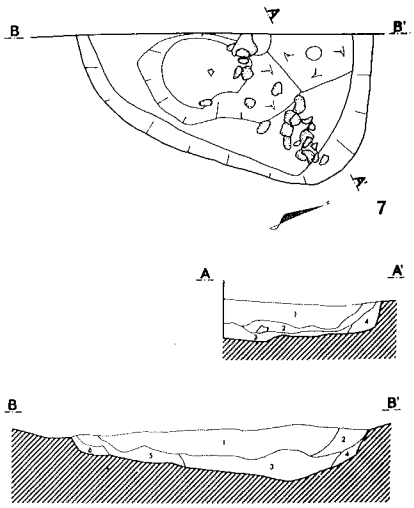


第15図　第２～４号土坑実測図（１／40・１／80）



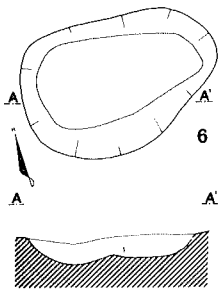
1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
2．　〃　（ローム粒子・ブロックを多量に含む。1より明るい）

0　1m



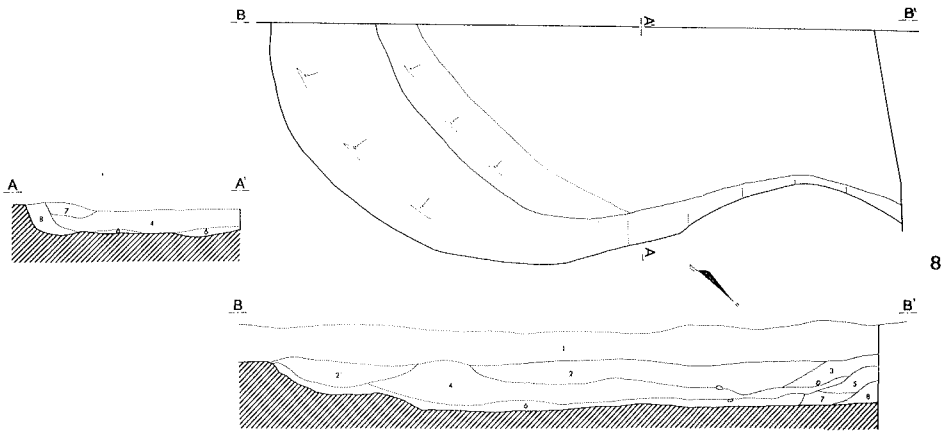
1．暗褐色土（炭化物、砂を含む）
2．　〃　（1より明るい）
3．明褐色土（ローム粒子、ブロック、炭化物を含む）
4．　〃　（ローム粒子、ブロック少量含む。3より明るい）
5．暗褐色土（ローム粒子、炭化物少量含む。2より明るい）
6．明褐色土（ローム粒子含む。3より暗い）

0　2m



1．明褐色土（ローム粒子・ブロック、砂を含む）

0　1m



1．黒褐色土（表1）
2．　〃　（焼土、炭化物を含む。1より明るい）
3．　〃　（2より暗い）
4．暗褐色土（炭化物を含む）
5．　〃　（ロームブロックを含む。4より暗い）
6．明褐色土（ローム粒子、ブロックを少量含む）
7．　〃　（ローム粒子を少量含む。6より明るい）
8．暗褐色土（5より明るい）

0　2m

第16図　第5～8号土坑実測図（1／40・1／80）

立する。内面の底は強い指ナデ、底面は回転糸切り。焼成良好、淡褐色を呈する。

4．瓦質の擂鉢である。推定底径12.0cm、残存高 9.2 cm。内面の櫛目は10条１組。外面下位に炭化物付着。内面はよく使用されたことが明瞭だが、上位は器面が剝離している。底部は薄い。焼成良、外面橙色、内面灰色を呈する。

5．五輪塔の空風輪である。残存高30.8cm、空輪最大径17.1×14.5cm、頸部径12.6× 8.8 cm、風輪最大径16.5×12.2cm。正背面はやや平坦に成形されており、横断面は長円形を呈する。風輪背面は中央から上位にかけて若干窪んでいる。正面には朱の日輪の中に、浅い薬研彫の梵字（キャ、カ）が黒く塗られている。梵字カはあまり明瞭ではないが、字体も若干崩れているようである。空輪正面下位がわずかに欠損しており、基茎部はほとんど欠損している。石質は輝石安山岩。

6．石臼（粉挽き臼の上臼）である。凹面となっている下面は、周囲がわずかに輪台状となっている。よく使用されており、溝はわずかにしか認められない。下面中央に芯棒をさし込んだと思われる孔がわずかに認められる。石質は角閃石安山岩である。

○第５号土坑出土遺物（第17図７・８）

7．流入したと思われる縄文土器片である。平行沈線間に施された細かい縄文は、ＬＲ単節であろう。焼成良、橙褐色を呈する。

8．流入したと思われる須恵器高台付坏の破片である。推定底径 7.0 cm。底面は回転糸切り、高台は貼付である。焼成良好、灰色を呈する。

○第７号土坑出土遺物（第17図９～11）

9．埴輪片であるが、上下の割れ口は平坦に磨られており、何らかの用途に再利用されたことが考えられる。ハケ目は１cmあたり５～６本、内面はハケ目調整の後指ナデ。焼成良、黄白色を呈す。

10．内外面に鉄釉が施された茶碗（丸碗）である。推定口径11cm強。釉は口縁部が黄褐色、下位は濃茶色を呈し、その間は白濁している。焼成良好、胎土は灰白色を呈する。

11．いわゆる瀬戸天目である。内外面に黒色の鉄釉が施されているが、表面は薄茶色にやや白濁している。胎土は灰白色を呈する。

○第８号土坑出土遺物（第17図12～21）

12．流入したと思われる縄文土器片である。縄文はＬＲ単節縦転。焼成良好淡褐色を呈する。

13．流入したと思われる須恵器高台付皿の破片である。高台は剝離している。高台脇の推定径7.0cm。底面は回転糸切り。焼成良好、灰色を呈する。

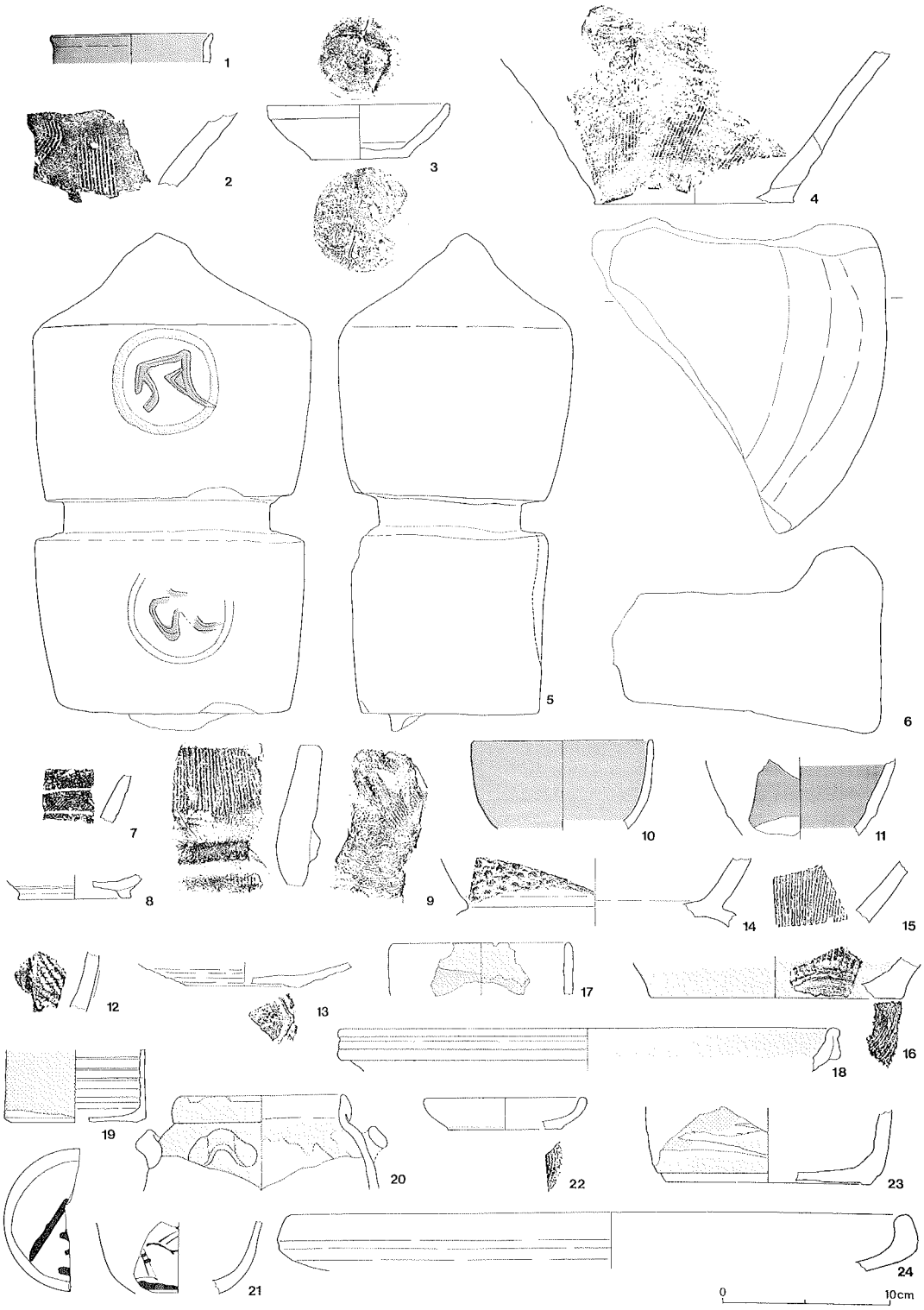
14．瓦質の手焙りである。外側へ広がる高台があったようで、高台脇の推定径は15.5cmである。体部外面には形押しによると思われる円形瘤が数多くみられる。焼成良好、暗褐色を呈する。

15．煉瓦質の擂鉢片である。焼成堅緻、淡橙褐色を呈する。在地産と思われる。

16．陶器擂鉢片である。推定底径15.0cm。内外面とも褐色の鉄釉が施されている。底面は回転糸切り。胎土は黄白色を呈する。

17．灰釉と鉄釉をかけ分けた茶碗である。推定口径11cm弱。口縁部に白濁した灰釉、胴部に濃茶色の鉄釉が施されている。胎土は黄白色を呈する。

18．陶器の擂鉢である。推定口径31cm弱。内外面とも光沢のない薄い鉄釉が施されている。胎土は



第17図　第２次発掘調査出土遺物（１／４）

黄白色を呈する。

19．徳利の底部である。推定底径９cm弱。体部外面に灰釉が施されており、底面には墨書（金？）が認められる。胎土は黄白色を呈する。

20．耳付壺である。推定口径10cm。耳は１つだけ残存し、両端を押しつぶすようにして貼り付けられている。口縁部は折り返し。口唇項部及び胴部内面中位以下に薄く鉄釉が、他の部分はいわゆる飴釉が施されている。飴釉には貫入が認められる。胎土は黄灰白色を呈する。

21．染付茶碗である。呉須の発色は淡青～淡紺色でやや不鮮明。胎土はわずかに灰色がかった白色を呈する。

○表面採集遺物（第17図22～24）

22．土師質の皿である。推定口径10.0cm、推定底径７.０cm、器高２.０cm。底面は回転糸切り。焼成良好、淡橙色を呈する。

23．徳利の底部と思われる。推定底径12.5cm。体部下位及び底面には、ごく薄い鉄釉がハケ状の用具により塗布されており、その上には灰釉がかけられている。灰釉は底面の一部にも認められる。胎土は黄白色を呈する。

24．浅い焙烙の破片である。内耳の有無は不明。推定口径36.0cm。底部は丸底気味であったものと思われ、底面はあまり調整されていないようである。焼成良好、外面は橙褐色～黒褐色、内面は橙褐色を呈する。

Ⅴ．第３次発掘調査

１．調査の概要

第３次発掘調査の発掘調査区は、第２次発掘調査区の北側、櫛挽台地寄居面の最末端上である。台地直下の水田面にある城下遺跡は、昭和56年12月～57年１月及び57年11月～12月に発掘調査を実施し、縄文時代後期、古墳時代後期、江戸時代の遺構・遺物などが検出された。

昭和59年５月17日、18日に、第３次発掘調査予定地の試掘調査を行って遺構等を確認し、調査対象区域を延長約120ｍ、約1,400㎡とした。しかし、予定地上の住宅の立ち退き等が遅れたため、調査区全体を四分割してからＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区として、７月～８月にＡ区とＣ区、10～11月にＢ区とＤ区の調査を実施することにした。

７月６日、パワーショベルによる表土の除去から第３次発掘調査を開始した。７月９日、Ａ区の精査を行ったが、Ａ区の北半部は遺構が密集しており、かなり複雑な切り合い等が予想された。７月10日より遺構の調査を開始した。土坑等の切り合いは予想以上に複雑であるため、主要と思われる遺構にのみ、番号を付けることにした。11日にＡ区・Ｃ区とも座標北に揃えたグリッド杭を設定し、今までの経過に倣って北から南へアラビア数字を、西から東へアルファベットを付してグリッドを呼称した。

遺構の切り合い関係は予想以上に複雑で、第６号土坑、第７号土坑のように深い遺構もあり、調査はかなり手間取った。７月23日には、第12号土坑の南側は、覆土内に砂利が充満したかなり大きな遺構であることが確認され、井戸跡ではないかと思われ、第１号井戸跡とした。このような状態により、調査にはさらに時間を要することが予想され、当初予定の８月11日までには、Ａ区及びＣ区の調査を終了することが困難になってきた。また、夏休み期間中であったため、７月末より作業員の人数が減ったため、急遽８月３日より作業員を10名増員した。

８月６日以降は、Ａ区は主に遺構の平面図の実測に終始した。８月８日、Ｃ区の精査を行い、土坑４基を確認、直ちに土坑の調査を行った。８月９日、Ａ区とＣ区の全景写真を撮影、10日に器材を撤収し、予定より１日早くＡ区とＣ区の発掘調査を終了した。

Ｂ区とＤ区の調査は、11月17日・18日の、パワーショベルによる表土の除去により開始した。10月19日、Ｄ区の精査を行い、土坑10数基を確認した。10月25日、Ｄ区の範囲図を平板により実測し、全景写真を撮影、Ｄ区の調査を終了した。平行してＢ区の北半の精査を行い、第１～第５号土坑の調査を始めた。また、Ｂ区の北東隅より縄文土器片が比較的多く検出されたため、かなり念入りに精査を行ったが、埋甕１基のみしか確認できなかった。

Ｂ区も、Ａ区に近い南半は遺構の切り合いが複雑であったが、Ａ区ほどではなく、調査は比較的スムーズに進展した。11月14日、午前中にＢ区全景を撮影し、午後に器材を撤収し、第３次発掘調査を終了した。

Ａ区とＢ区の出土遺物はほぼ同様の内容で、縄文土器、埴輪、瓦質土器（内耳土鍋、鉢、手焙り

など）、土師質土器（皿など）、陶器（擂鉢、茶碗、皿、徳利、急須など）、磁器（染付茶碗、皿など）、瓦、板石塔婆、石臼、五輪塔水輪、硯などである。C区、D区からは遺物はほとんど出土しなかった。

なお、B区第1号井戸跡の壁面より観察した標準土層は、以下のとおりである。確認面から下へ約35cmまでが黄褐色ローム、約35～約60cmが黄色ローム、約60～約85cmが粒子の細かい明黄色砂層（ローム粒子を含む）、約85～約105cmが粒子の細かい褐色砂層、約105～約130cmが粒子の細かい灰色砂層、約130～約160cmが粒子の細かい褐色砂層（やや緑灰色を帯びる）、約160cm以下が粒子の粗い灰色砂層。ここでは礫層は検出されなかった。

2．A区の遺構と出土遺物

(1) 遺構（第19図～第23図）

○第1号土坑（第19図）　調査区北西隅の、250×250cmほどの範囲である。土坑3基以上の切り合いと考えられる。深さは、中央の最も深い部分で約80cm、両隅の部分で約70cmである。土師質土器、火鉢（手焙り）の底部、陶器（湯呑み、徳利）などが出土した。

なお、第2号溝状遺構との関係は不明である。

○第2号土坑（第19図）　7・8—Eグリッドに位置する。全体で260×200cmほどの範囲であるが、土坑3基以上の切り合いと考えられる。西側の180×110cmほどの長方形を呈する土坑は深さ約50cm、その東隣は深さ約30cm、北端の第2号溝状遺構を切っている土坑は深さ約40cmである。流入したと思われる須恵器甕の破片、土師質皿、炻質鉢の底部などが出土した。

○第3号土坑（第19図）　7・8—E・Fグリッドに位置し、第2号溝状遺構に切られている。幅約110cm、深さ約40cmで、底面は平坦であるが、東側に台状になった部分がある。擂鉢、火鉢（手焙り）などが出土した。

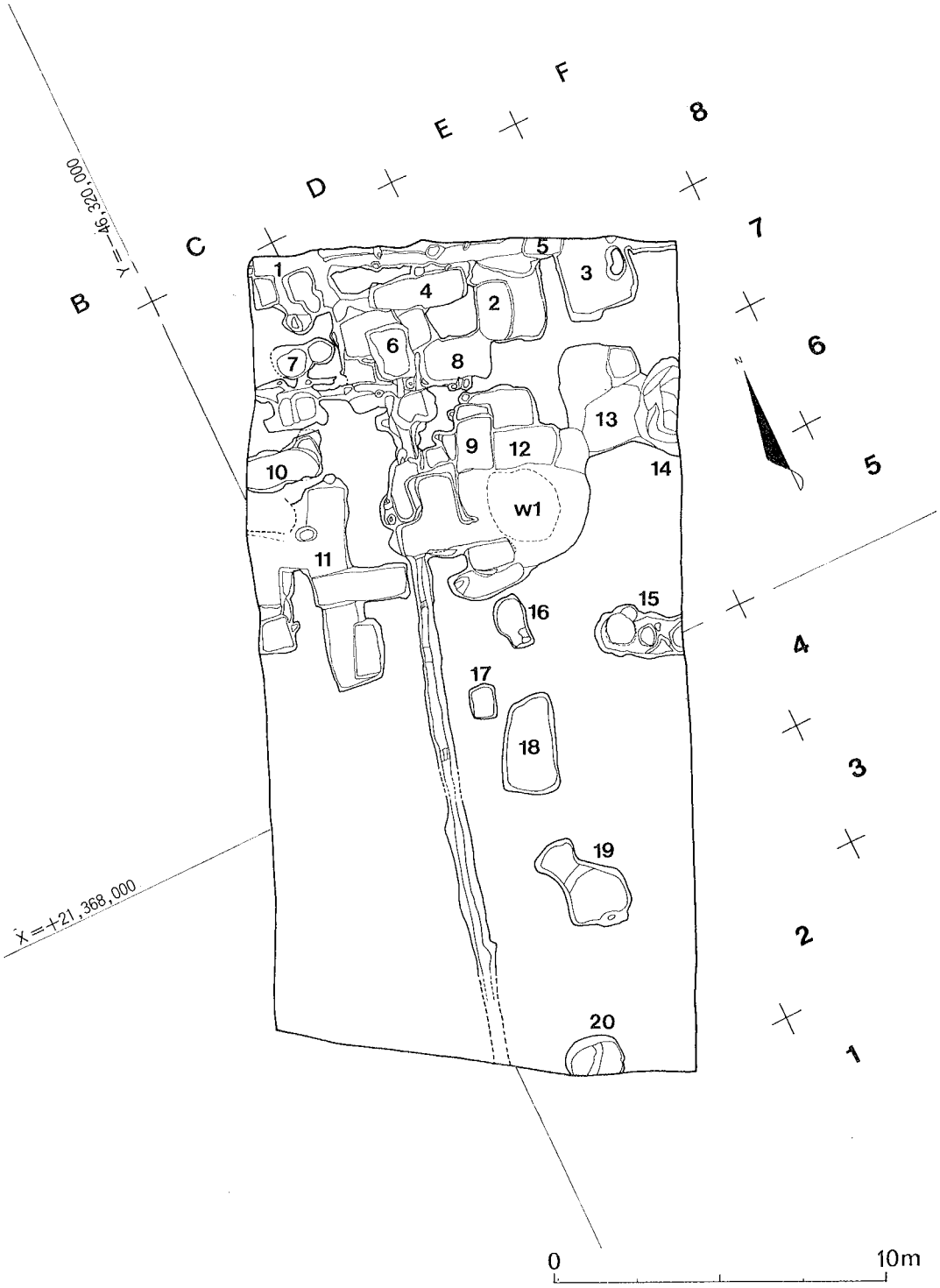
○第4号土坑（第19図）　8—D・Eグリッドに位置する。300×110cmほどの長方形を呈し、南西側の土坑に切られている。深さは約30cmで底面は平担だが、径約40cm、深さ約20cmのピットがある。流入したと思われる縄文土器、擂鉢、灯明皿、染付茶碗、布目のある瓦などが出土した。

○第5号土坑（第19図）　8—Eグリッドに位置し、第2号溝状遺構を切っている。幅約110cm、深さ約50cmで、底面は平坦である。土師質皿、瓦質鉢、陶器鉢などが出土した。

○第6号土坑（第19図）　7—Dグリッドに位置する。170×120cmほどの長方形を呈し、深さは約110cmである。底面より板石塔婆の背面が出土した。

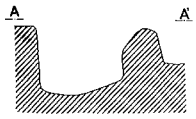
なお、第6号土坑の西側の深さ約50cmの土坑からは、素焼きの大甕、瓦質鉢、陶器擂鉢、茶碗、灯明皿、染付の湯呑みなどが出土した。

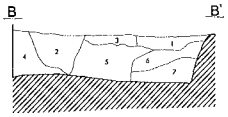
○第7号土坑（第19図）　8—Cグリッドに位置する。径約120cmの円形を呈し、深さは140cmである。硯の破片などが出土した。



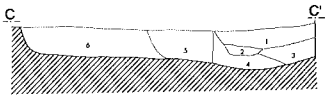
第18図　第３次発掘調査Ａ区全測図（１／200）

第19図　A区北半遺構実測図（1／80）

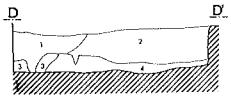




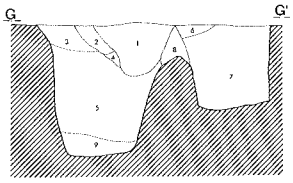
1．灰褐色土（ローム粒子を含む）
2．〃　（焼土、炭化物、ロームブロック含む）
3．〃　（ローム粒子少量含む）
4．暗褐色土（ローム粒子、炭化物少量含む）
5．褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
6．明褐色土（ローム粒子、砂、礫を含む）
7．〃　（ローム粒子、砂、礫を含む。6より明るい）



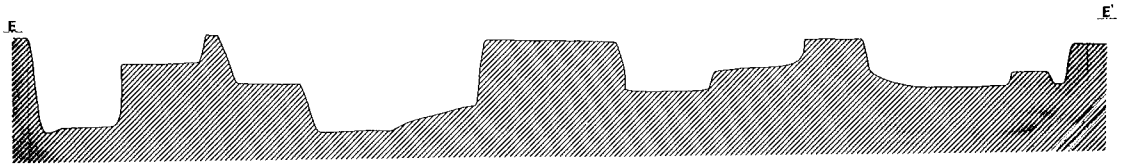
1．暗褐色土
2．〃　（ローム粒子・ブロック、焼土を含む）
3．〃　（ロームブロックを含む。1より明るい）
4．〃　（ロームブロックを含む。3より明るい）
5．〃　（ローム粒子・ブロックを含む。4より暗い）
6．〃　（ローム粒子・ブロックを含む。5より明るい）

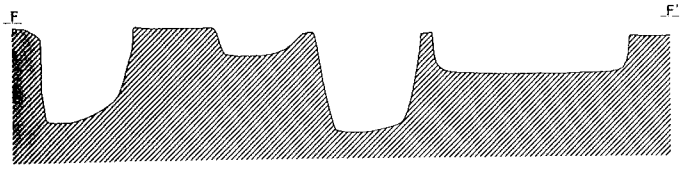


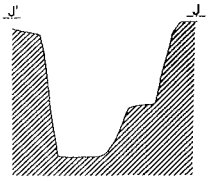
1．黒褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
2．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に、炭化物を含む）
3．〃　（ローム粒子含む）
4．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）

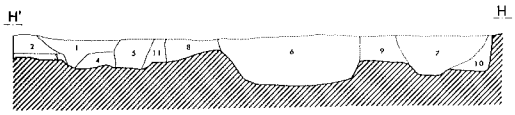


1．暗灰褐色土
2．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
3．明褐色土（焼土、ローム粒子を含む）
4．黄褐色土（焼土、ローム粒子を含む）
5．暗褐色土（炭化物、砂を少量含む）
6．灰褐色土（焼土、炭化物を少量含む）
7．暗褐色土（炭化物を少量含む）
8．明褐色土（砂を多く、ローム粒子を含む）
9．黒褐色土（砂・砂利を多く、炭化物を少量含む）

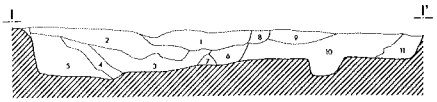




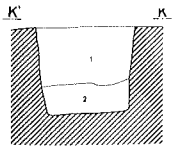




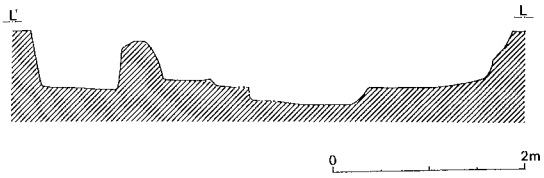
1．明褐色土（ローム粒子、砂利を少量含む）
2．黒褐色土
3．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
4．明褐色土（ローム粒子少量含む。1より暗い。
5．〃　（ローム粒子含む。1より明るい）
6．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
7．灰褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
8．〃　（7より明るい）
9．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む。6より暗い）
10．明褐色土（ローム粒子含む）
11．黄褐色土（ローム粒子、砂を多量に含む）



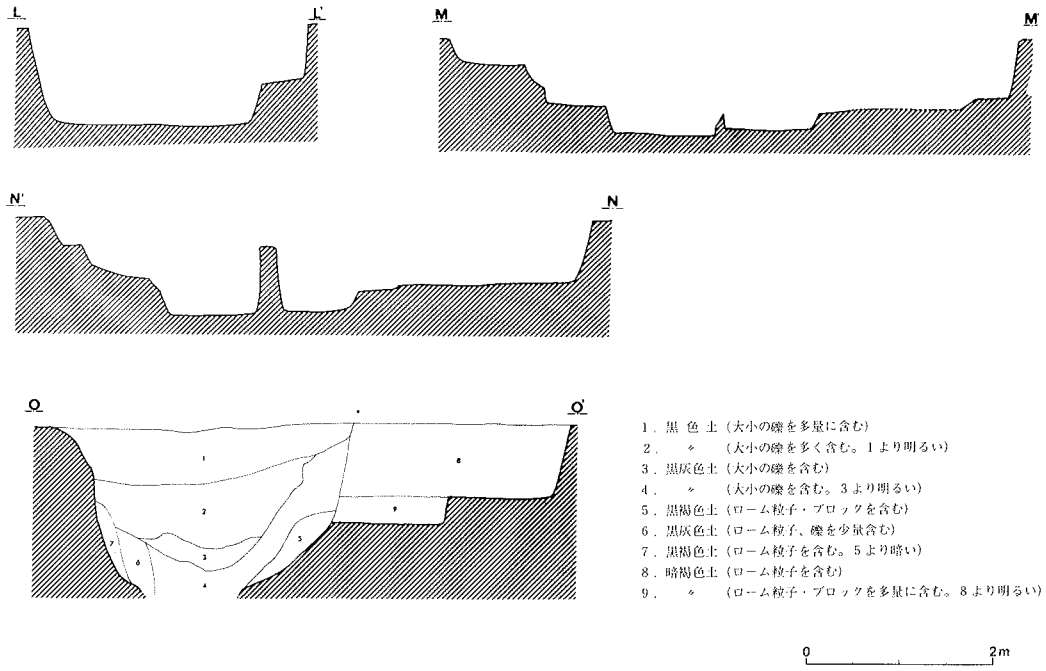
1．暗褐色土（焼土、炭化物、ローム粒子を含む）
2．灰褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
3．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
4．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
5．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
6．暗褐色土（焼土、炭化物を含む）
7．黄褐色土（ローム粒子多量に含む）
8．黒褐色土（石を含む）
9．暗褐色土（ローム粒子少量含む）
10．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）
11．〃　（ローム粒子・ブロックを多く含む。10より明るい）



1．黒褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
2．〃　（ローム粒子・ブロック、砂を含む。1より明るい）



第20図　A区北半遺構土層断面図1）（1／80）



第21図　A区北半遺構土層断面図(2)（1／80）

第7号土坑の東側の、径約80cm、深さ約40cmの土坑からは内耳焙烙が出土した。第7号土坑の南側の、深さ約90cmの土坑からは、焙烙、火鉢、陶器皿、染付茶碗、瓦などが出土した。

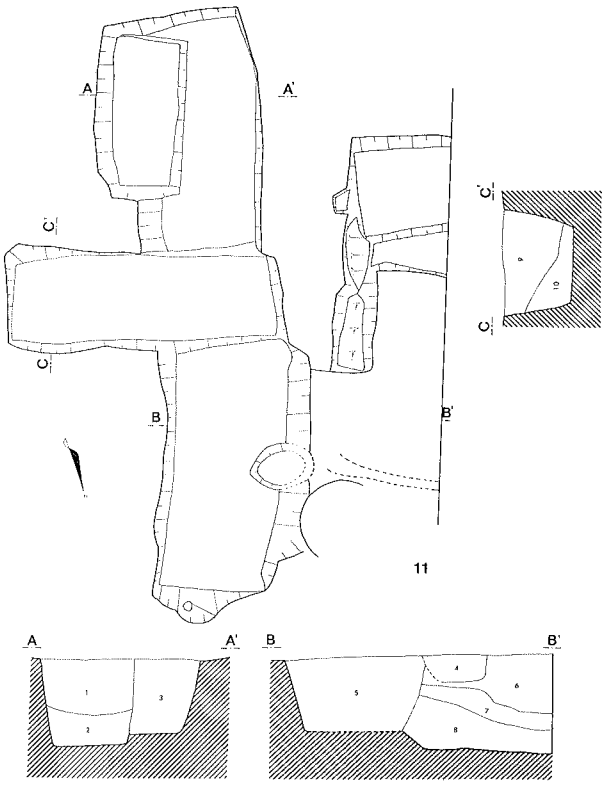
○第8号土坑（第19図）　7—D・Eグリッドに位置する。220×120cmほどの長方形を呈し、深さ約50cmである。土師質皿、灯明皿などが出土した。

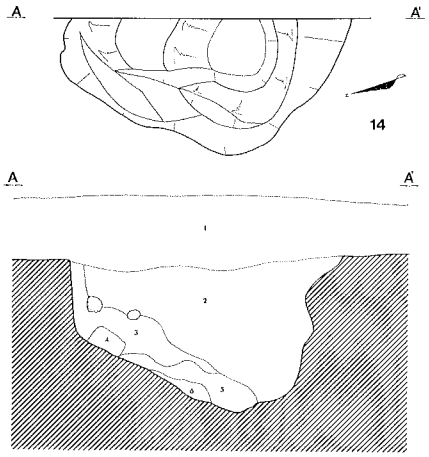
○第9号土坑（第19図）　6・7—D・Eグリッドに位置し、第12号土坑に切られている。南側の深さ約110cmの土坑を、北側の深さ約80cmの土坑が切っている。土師質擂鉢の破片が出土した。

○第10号土坑（第19図）　7—Cグリッドに位置する。幅約120cmの不整長方形を呈し、北東隅は段状（壁の一部が袋状になっている）になっており、深さは約90cmである。陶器蓋、染付茶碗などが出土した。

○第11号土坑（第22図）　5・6・7—B・Cグリッドに位置し、長方形の土坑7基以上の切り合いである。東側の土坑列は、長さ300cm前後の長方形土坑が、北から南北方向、東西方向、南北方向と並んでおり、南側の南北方向の土坑の西辺は、180×100cmほどの長方形土坑に切られている。西側の土坑列は調査区の外へ延びており、完掘はできなかった。深さは全体的に80～100cmである。南側の180×100cmの土坑から急須が出土した。

○第12号土坑（第19図）　7・8—Dグリッドに位置し、第9号土坑を切っている。第1号井戸跡との関係は不明である。300×120cmほどの長方形を呈するものと判断され、深さは80～90cmである。内耳土鍋、土師質鉢、瀬戸天目茶碗、常滑系と思われる鉢の底部などが出土した。

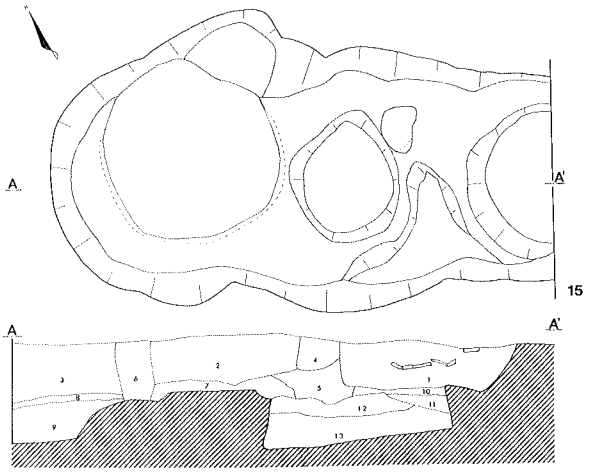




1．暗褐色土（表土）
2．黒 色 土（大小の礫を多量に含む）
3．　〃　（2より暗い）
4．黄 色 土（ロームブロック）
5．暗褐色土（ローム粒子、ブロックを多く含む）
6．　〃　（ローム粒子を少量含む）

1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
2．　〃　（ローム粒子、ブロックを多量に含む。1より暗い）
3．　〃　（ローム粒子、ブロックを多量に含む。2より暗い）
4．明褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）
5．黒褐色土（砂利を少量含む）
6．暗褐色土（砂利、ローム粒子を少量含む）
7．明褐色土（砂利、ローム粒子、ブロックを多く含む）
8．暗褐色土（砂利、ローム粒子を少量含む）
9．暗褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）
10．　〃　（ローム粒子、ブロックを多く含む。9より明るい）

0　2m



1．暗褐色土（砂、砂利を含む）
2．　〃　（ローム粒子、ブロックを多量に含む）
3．明褐色土（ローム粒子、ブロック、砂を少量含む）
4．黄褐色土（粘土質）
5．灰色粘土
6．黄褐色土（粘土質）
7．灰褐色土（粘土質、ローム粒子を含む）
8．黒 色 土
9．灰褐色土（粘土質、ロームブロックを含む）
10．黄 色 土（ローム土）
11．暗褐色土
12．黄 色 土（ローム土、10より明るい）
13．暗褐色土（ロームブロックを少量含む）

0　1m

第22図　第11～15号土坑実測図（1／80・1／40）

○第13号土坑（第19図）　7－E・Fグリッドに位置し、第14号土坑に隣接している。120×100cmほどの方形状の部分は深さ約40cmほどであるが、周辺も深さ10～20cmほどで浅く窪んでいる。飴釉茶碗、灰釉皿、内耳土鍋、瓦などが出土したが、内耳土鍋の破片は、第14号土坑から出土したものと接合したものがある。

○第14号土坑（第22図）　6－E・Fグリッドに位置する。完掘はできなかったが、平面形は270cm以上になるものと思われ、深さは約160cmである。平面・内部ともにかなり不整な形態を呈する。土師質皿、内耳土鍋、瓦質甕・鉢、陶器甕・小壺などが出土したが、特に内耳土鍋が多いことが目立ち、第13号土坑出土の破片と接合したものもある。

○第15号土坑（第22図）　4・5－D・Eグリッドに位置する。調査区外へ延びているため完掘はできなかったが、長さ270cm以上、幅は約150cmである。精査による確認の際には、径70～90cmの円形の暗褐色土が3つ並び、その外側を黄褐色土が取り巻くような状態で確認されたが、内部形態は、中央に50～60cmの台状の部分があり、その両側に径80～100cmの円形の落ち込みがある、といったものであった。深さは最も深い部分で約60cmである。最も東側部分に、一定レベルで瓦片が並んでいた。

○第16号土坑（第23図）　5－Dグリッドに位置する。150×90cmほどの不整長方形を呈し、深さは約20cmである。底面には緩い起伏がある。

○第17号土坑（第23図）　5－Cグリッドに位置する。110×70cmほどの長方形を呈し、深さは約15cmである。北東のコーナーに擂鉢状の落ち込みがあった。

○第18号土坑（第23図）　4－C・Dグリッドに位置する。300×160cmほどの不整長方形を呈する。深さは約20cmで、底面は凹凸が激しい。

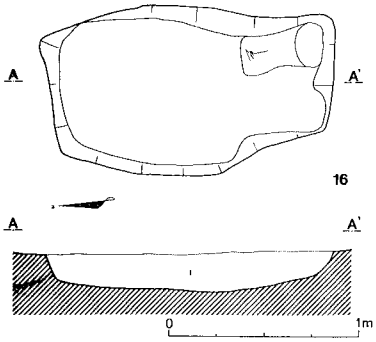
○第19号土坑（第23図）　3－C・Dグリッドに位置する。全体は330×210cmほどの瓢箪形を呈するが、土坑2基の切り合いの可能性がある。深さは、最も深い部分で約40cmである。

○第20号土坑（第23図）　2－Cグリッドに位置する。完掘はできなかったが、径170～180cmほどの不整円形を呈するものと思われる。深さは最も深い部分で約25cmで、底面は凹凸が激しい。

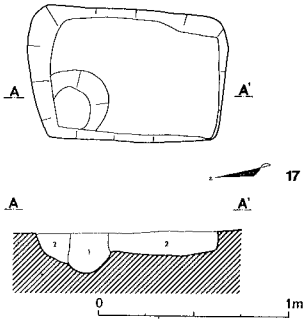
○第1号井戸跡（第19図）　6－D・Eグリッドに位置し、第9号土坑などを切っている。直径約330cmほどの擂鉢状を呈し、底は確認できなかったが、径100cmほどで更に直線的に深くなっていたようである。覆土には大小の礫が充満していた。土師質皿、土師質及び炻質の擂鉢、須恵質の鉢、瓦質の内耳鉢、焙烙、鉄釉の茶碗、瓦、石臼（茶臼及び粉挽き臼）、五輪塔の水輪、硯などが出土した。

○第1号溝状遺構（第19・23図）　調査区の中央を南北に延びており、第6号土坑の南側で直角に西へ曲がり、第7号土坑の南側で調査区外へ達する。幅50～60cm、深さ30～50cmで、各土坑を切って構築されていたようである。なお、南へ向ってしだいに浅くなっており、南端部は明確には確認できなかった。

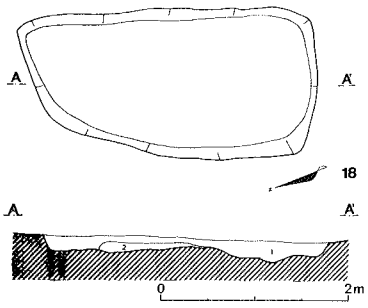
○第2号溝状遺構（第19図）　A区の北端を横断しており、第1号土坑、第2号土坑、第5号土坑などに切られ、第3号土坑を切っている。上幅60～70cm、下幅30～50cm、深さは40～50cmほどである。



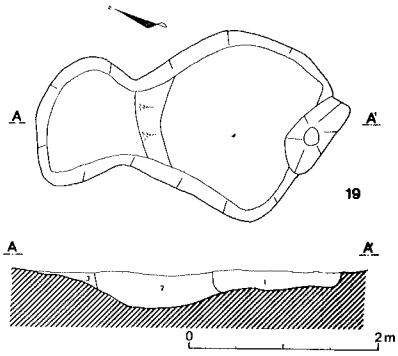
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）



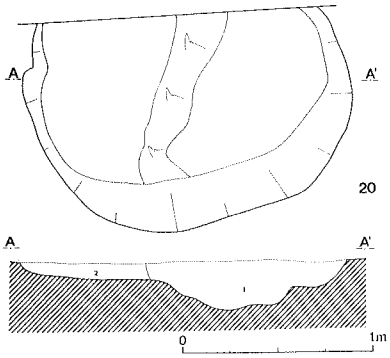
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．明褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）



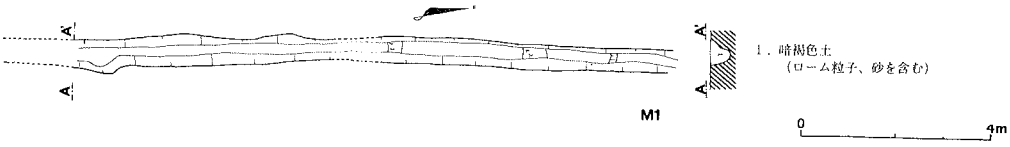
1．暗褐色土（ローム粒子、砂利を含む）
2．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）



1．明褐色土（ローム粒子含む）
2．暗褐色土（ローム粒子、砂利を含む）
3．黒褐色土（ローム粒子含む）



1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
2．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む）



1．暗褐色土
（ローム粒子、砂を含む）

第23図　第16～20号土坑・第１号溝状遺構実測図（１／40・１／80・１／160）

(2) 出土遺物（第24図～第29図）

○第１号土坑出土遺物（第24図１～６）

１．土師質皿の底部と思われる。底径3.0㎝、底面は回転糸切り後指ナデ。焼成良、淡褐色。

２～４．瓦質手焙りの底の足である。いずれも足の周囲は丁寧にナデられており、焼成良好、黒褐色を呈する。３は足が貼り付けられたことが明瞭で、体部下位に刻み状の文様が確認できる。

５．白濁した灰釉が施された湯呑みである。推定口径７㎝強。外面は釉が流されており、その流れの間に素地が露出している。素地は淡灰褐色を呈する。

６．徳利の胴部片であろう。内外面とも水挽き痕が明瞭で、外面に暗褐色の鉄釉が施されている。胎土は灰白色を呈する。

○第２号土坑出土遺物（第24図７～10）

７．土師質皿である。推定口径10.5㎝、推定底径５㎝強、器高3.6㎝。底部内面は指ナデ痕明瞭、底面はナデられている。焼成良、黄白色を呈する。

８．七輪の類の一部であろうか。口縁部に外縁が貼り付けられ、その下に孔がある。焼成良好、暗褐色を呈する。

９．炻質擂鉢の底部であろう。推定底径14㎝。底面は砂底で、外面には指の押圧調整が施されている。焼成良、やや赤みがかった褐色を呈する。

10．流入したと思われる須恵器甕の胴部片である。内外面に叩き目がある。焼成良好、灰色を呈す。

○第３号土坑出土遺物（第24図11～13）

11．瓦質手焙りの底部であろう。貼り付けによる台状の脚がある。脚との接合部の推定径は16.5㎝。底面は平坦。焼成良、灰色～黒灰色を呈する。

12．擂鉢である。推定口径34.5㎝。内外面に褐色の鉄釉が施されており、内面下位は使用のためか表面が剝離している。胎土は黄白色を呈する。

13．土師質の擂鉢である。推定底径12㎝弱。内外面とも磨滅しており、内面の櫛目も不明瞭だが、５条１組のようである。底面はヘラ状工具で削られている。焼成良、淡褐色～淡灰褐色を呈する。

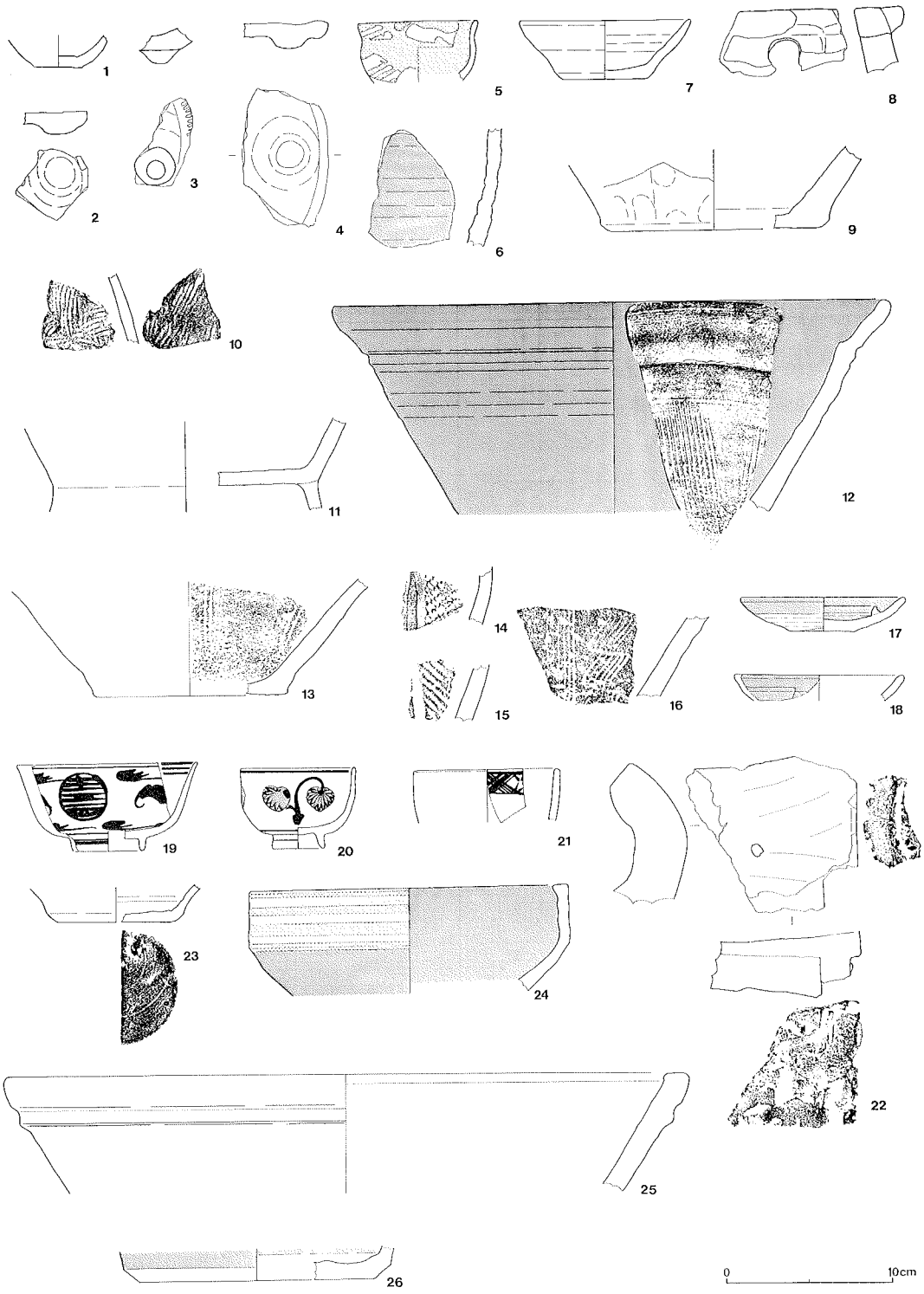
○第４号土坑出土遺物（第24図14～22）

14・15．流入したと思われる縄文土器片である。14は縄文がＲＬ単節、焼成良好、外面淡褐色、内面黒褐色を呈する。15は縄文がＬＲ単節、焼成良好、暗褐色を呈する。

16．瓦質の擂鉢である。内面の櫛目は６条１組で、直下するものと波状に下るものがある。焼成良、灰褐色を呈する。

17・18．内外面に茶色の鉄釉が施された灯明皿である。17は口径10.0㎝、底径4.0㎝、器高2.1㎝で、突堤は貼り付け、胎土は黄白色を呈する。18は推定口径10.5㎝、胎土は黄褐色を呈する。

19～21．染付茶碗である。19は推定口径11.0㎝、推定底径4.5㎝弱、器高5.4㎝。呉須の発色は青紺で鮮明、釉は透明感のない白。茶筅摺にも細い線が一条巡っている。20は湯呑みであろう。推定口径7.0㎝、推定底径３㎝弱、器高5.0㎝。呉須の発色は青紺～紺で鮮明、釉はわずかに青灰色がかっている。21は推定口径9.0㎝、呉須の発色は紺でやや不鮮明、釉は淡青灰色。



第24図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物(1)（１／４）

22．軒丸瓦である。瓦当は欠損している。外面は指ナデ、内面は布目調整の後指ナデ。焼成良好、灰褐色を呈する。なお、胎土は中心部が灰色、その外側は淡褐色を呈する。

○第５号土坑出土遺物（第24図23～26）

23．土師質皿である。底径 7.3 cm。底面は回転糸切り、焼成良好、橙褐色を呈する。

24．陶器鉢である。推定口径19.5cm。内面及び外面体部には茶色の鉄釉が施され、外面口縁部は、灰釉の上に褐釉をかけ、青緑色と黄褐色の縞模様を作っている。胎土は淡灰褐色を呈する。

25．瓦質の鉢である。推定口径42.0cm。焼成良、淡灰色を呈する。

26．鉢の底部と思われる。推定底径14.5cm。内面及び底面を除く外面に濃茶色の鉄釉が施されている。胎土は黄白色を呈する。

.○第６号土坑出土遺物（第25図27～33）

27～33は、正確には第６号土坑の西側の深さ約50cmの土坑から出土したものである。

27．素焼きの大甕の口縁部であろう。推定口径50.0cm。口縁部外縁には突帯が貼り付けられ、貼り付け面は双方とも櫛状工具で横及び斜めに調整されている（拓影は貼付面）。内面は丁寧にナデられている。焼成良、橙色を呈する。

28．素焼きの大甕の底部であろう。27と同一個体かは不明。推定底径22.0cm。粘土板を貼り付けて底部を作っている。ロクロ使用の後やや粗いナデにより調整されている。底面の調整も粗い。焼成良、橙色を呈する。

29．擂鉢の破片である。在地産であろう。焼成良好、赤褐色を呈する。

30．瓦質のこね鉢である。推定口径39.0cm。内面は光沢を帯びるほどによく磨かれている。外面に炭化物付着。焼成良好、外面黒灰色、内面黒色を呈する。

31．内外面に濃茶色の鉄釉が施された茶碗である。推定口径10.5cm。口縁部がくびれるいわゆる瀬戸天目の器形を呈する。胎土は黄白色を呈する。

32．灯明皿である。推定口径10.0cm、推定底径 4.0 cm、器高 2.0 cm。内外面とも濃茶色の鉄釉が施されている。底面は丁寧にナデられ、貼付により突堤は、裾が上へナデつけられている。胎土は黄白色～灰色を呈する。

33．染付の湯呑みである。推定口径 6 cm強。呉須の発色は、外面は淡紺、内面は灰紺である。胎土に黒色微粒子を含んでいる。

○第７号土坑出土遺物（第25図34～第26図44）

39、40、42、43を除き、第７号土坑の東側、或いは南側の土坑より出土したものである。

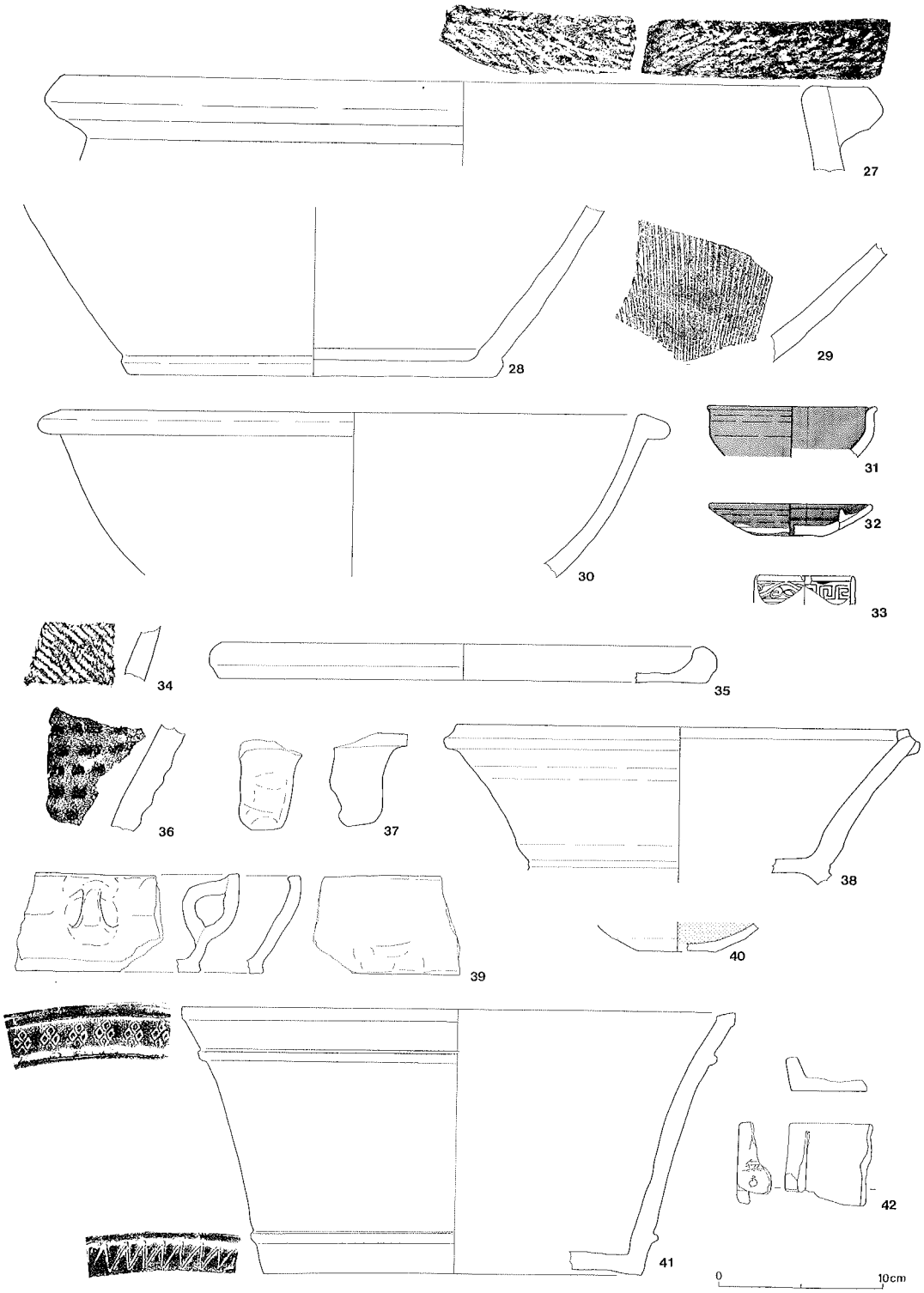
34．流入した縄文土器片である。縄文はＲＬ単節横転。焼成良好、淡褐色を呈する。

35．焙烙である。推定口径31.5cm弱、器高 2.2 cm。内耳の有無は不明。底面はほとんど調整されていない。焼成良好、暗褐色を呈する。

36．火鉢の体部破片であろう。疣状の突起が数列並んでいる。焼成良好、外面黒灰色、内面淡褐色。

37．瓦質火鉢（手焙り）の足である。断面図の左側が外側になるもので、３足のうちの１つであろう。41の足と思われる。外面は指の押圧調整。焼成良好、黒灰色を呈する。

38．瓦質の手焙りである。推定口径28.0cm。台状の脚が付いていたようであるが、欠損している。



第25図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物２）（１／４）

内面は磨滅している。焼成良好、灰色を呈する。

39．内耳焙烙である。内耳は体部に橋状に貼り付けられている。ロクロ調整の後体部外面下位には指の押圧調整、口唇部上面は平坦にナデられている。外面炭化物付着。焼成良好、黄白色を呈す。

40．内面に灰釉が施された皿である。推定底径５cm弱。貫入が認められる。胎土は黄白色を呈する。

41．瓦質手焙りである。推定口径34.0cm、推定底径23.5cm弱、器高16.3cm。体部はやや外反して立ち上り、口唇部は側面と上面が平坦にナデられている。ロクロ調整の後、内外面とも丁寧にナデられている。口縁部と底部に突帯が一条ずつ巡り、口縁の突帯の上に菱形を４つ集めた形押しの文様が並び、底部の突帯の下には櫛描きによる鋸歯状の文様が巡っている。焼成良好、黒灰色～灰色を呈する。

42．石製の硯である。内面は、側面の一部を除いてほとんど剝離している。外面の側面（傍）に、「□無古(?)」という浅い線刻がみられる。

43．染付茶碗である。推定口径12.0cm、推定底径４.５cm弱、器高５.０cm。呉須の発色は青紺で鮮明。文様はいわゆるプリントによるものである。

44．平瓦である。厚さ1.7～1.8cm。粘土板１枚作り。表面はやや風化しており、裏面には光沢がある。裏表面ともハケ状工具によるナデ痕がある。胎土は黒色粒子をわずかに含み、焼成良好、黒灰色を呈する。

○第８号土坑出土遺物（第26図45～48）

45．流入した縄文土器片である。縄文はＬＲ単節、内面に炭化物付着。焼成良、橙褐色を呈する。

46．灯明皿である。推定口径９cm強。内面及び外面口縁部にやや薄い鉄釉が施されている。突堤は貼付である。胎土は淡黄灰色を呈する。

47．土師質の皿である。口径８.５cm、底径５.１cm、器高２.３cm。底面は回転糸切りの後、柾目痕が施されている。底部内面は強い指ナデ。ロクロは右回転。焼成良好、橙褐色を呈する。

48．内面に緑灰色の灰釉が施された皿と思われる陶器である。推定底径５cm弱。底面は回転糸切り。胎土は黄白色～淡黄灰色を呈する。

○第９号土坑出土遺物（第26図49）

49．土師質の擂鉢である。内面の櫛目は５条１組である。焼成良、暗褐色～淡褐色を呈する。

○第10号土坑出土遺物（第26図50～53）

50．急須の蓋であろう。推定口径７.５cm強。内外面に透明な灰釉が施されており、貫入が認められる。胎土は黄白色を呈する。

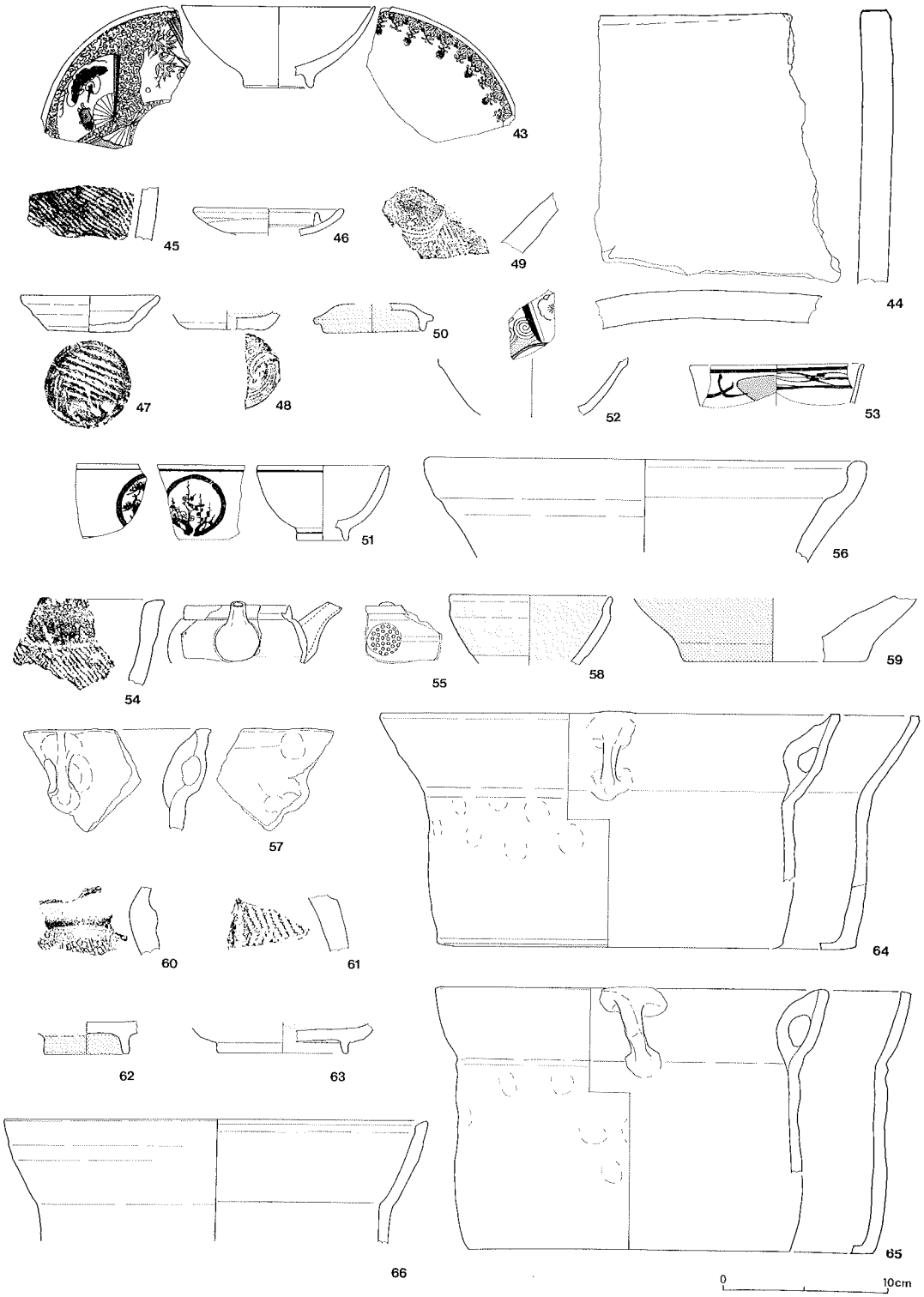
51．染色茶碗である。推定口径８.０cm、推定底径３cm強、器高４.７cm。文様はいわゆる蒟蒻判によるものであろう。呉須の発色は濃紺で鮮明。釉は淡緑色、胎土は白色を呈する。

52．絵付の施された磁器の小鉢であろう。内面に、赤（図の黒線）、緑（図のスクリーントーンの部分）、金（図の黒塗り部分）で絵付が施されている。胎土は白色を呈する。

53．染付茶碗である。推定口径11cm弱。呉須の発色は淡青紺で比較的鮮明、胎土は白色を呈する。

○第11号土坑出土遺物（第26図54・55）

54．流入した縄文土器片である。口唇部上面が平坦に成形されている。横位の沈線の下にＬ無節の



第26図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物(3)（１／４）

縄文が施されている。内外面とも調整は粗く、内面には櫛状工具痕が横に走っている。焼成良好、淡褐色～橙色を呈する。

55．急須である。推定口径6.5cm。備前系と思われる。器面は小豆色を呈し、焼成堅緻、胎土は微細で暗灰色を呈する。器面には白点による絵付が施されていたようである。

○第12号土坑出土遺物（第26図56～59）

56．土師質の鉢である。推定口径27.5cm。内耳の有無は不明。焼成やや不良、淡褐色を呈する。

57．土師質の内耳土鍋である。外面は指の押圧により調整されており、炭化物が顕著に付着している。焼成良好、暗褐色～黒褐色を呈する。

58．いわゆる瀬戸天目茶碗である。推定口径10.0cm、薄く施された釉は、発色も濃茶色～淡褐色と薄く、貫入が認められる。胎土は黄褐色を呈する。

59．常滑系の鉢の底部であろう。推定底径11cm強。外面に自然釉がかかっており、内面もわずかに釉が認められる。底面は凹凸が激しく調整は不明、胎土は灰色を呈する。

○第13号土坑出土遺物（第26図60～第27図67）

60・61．流入した縄文土器片である。60は、微隆線の下に縄文が施されている。焼成良、暗褐色を呈する。61は口縁部に近い破片であろう。ＲＬ単節の縄文が、上位で横転され、その下は縦転されている。焼成良好、暗褐色を呈する。

62．内外面に飴釉が施された茶碗の底部である。推定底径５cm強。畳付は釉がふきとられている。貫入が認められる。胎土は黄白色を呈する。

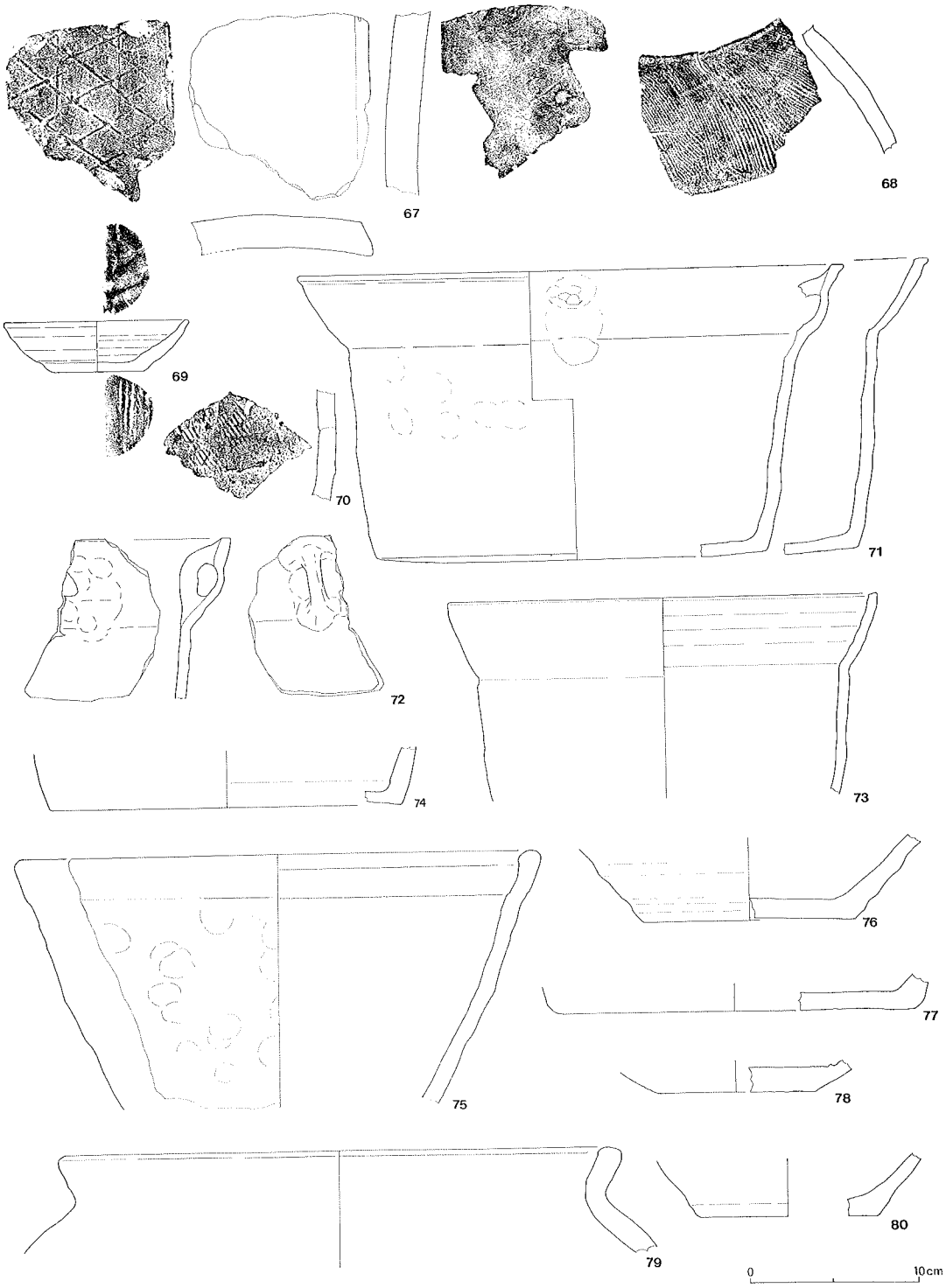
63．内面に灰釉が施された皿の底部である。貫入が認められる。胎土は黄白色を呈する。

64～66．瓦質の内耳土鍋である。64と65は、第13号土坑と第14号土坑から出土した破片が接合したものである。64は、推定口径28.5cm、推定底径25.5cm弱、器高14.6cm。口唇部は上面及び外面が平坦にナデられている。胴部は直立し、頸部の屈曲は弱く、口縁部は内彎気味に開く。内耳は１つだけ残存し、口唇部から頸部に橋状に貼り付けられている。ロクロ調整、内面全面及び外面口縁部は丁寧な横ナデが施されている。胴部下位の輪積み痕明瞭。外面に炭化物付着。なお、底部はほとんど欠損している。焼成良好、外面黒灰色、内面灰色を呈する。65は、推定口径24.0cm、推定底径19.5cm、器高16.2cm。胴部は直立し、口縁部は内彎気味に開く。内耳はほぼ対面に２つ残存し、口唇部から頸部に橋状に貼り付けられている。ロクロ調整、内面は丁寧にナデられており、外面は指の押圧の後粗くナデられている。胴部下位の輪積み痕明瞭。外面に炭化物付着。底部はほとんど欠損している。焼成良好、黒灰色を呈する。66は、推定口径26.0cm。内耳は残っていない。平坦な口唇部は内側を向いている。ロクロ調整、内外面ともよくナデられている。外面に炭化物付着。焼成良、淡灰褐色を呈する。

67．瓦である。形押しによる網目状の文様が、表面は陽、裏面は陰の状態で施されている。焼成は良好で須恵質、灰色を呈する。

○第14号土坑出土遺物（第27図68～第28図82）

68．流入した土師器甕の破片である。外面上位はハケ目調整、下位は横方向のヘラ削りのようである。内面は横方向のヘラナデ。焼成良好、淡褐色を呈する。



第27図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物(4)（１／４）

69．土師質皿である。推定口径11.0cm、推定底径５cm強、器高3.1cm。器肉やや厚く、体部は内彎気味で丸い。底部内面には指ナデ痕、底面には柾目痕がある。焼成良、淡黄褐色を呈する。

70．常滑甕の破片である。外面に叩き目があり、内面はあまり調整されていない。外面淡褐色、内面灰色を呈する。

71～74．瓦質の内耳土鍋である。71は、推定口径33.0cm、推定底径23.5cm、器高17.8cm。内耳は１つのみ部分的に残存。胴部は直立し、頸部は強く屈曲、口縁部は内彎気味に開く。ロクロ調整、内面全面及び外面口縁部は丁寧なナデ、胴部外面は指の押圧の後粗いナデ。底面はあまり調整されていない。胴部外面炭化物付着。なお、口縁部はやや扁平で、長円形状を呈するようである。焼成良好、黒灰色を呈する。72は内耳部分の破片である。内耳は向ってやや左へ傾いている。外面に炭化物付着。焼成良好、黒灰色を呈する。73は、推定口径26.0cm。胴部は直立し、口縁部は内彎気味に少し開く。胴部外面下位は指の押圧が施されており、炭化物が付着している。ロクロ調整、焼成良好、外面黒色、内面黒灰色を呈する。74は内耳土鍋の底部であろう。推定底径21.5cm。底面はナデられていたようである。焼成良好、灰色を呈する。なお、第26図64・65は、第13号土坑と第14号土坑から出土した破片が接合した内耳土鍋である。

75～77．瓦質の鉢である。75は、推定口径32cm弱。ロクロ調整、外面は指の押圧が施されている。外面に炭化物付着。外面黒褐色、内面淡灰褐色を呈する。76は、推定底径13cm弱。外面はやや磨滅しており、底面はヘラ状工具で削られている。焼成良、黒灰色を呈する。77は、推定底径22.0cm。底面はナデられている。焼成良、暗灰色を呈する。

78．陶器鉢の底部である。推定底径９cm強。底面はヘラ状工具による回転削り。部分的に流れた灰釉が認められる。黄白色を呈する。

79．瓦質の大甕の口縁部である。推定口径34.0cm。内外面とも磨滅しているが、特に内面が激しい。口唇部内面に浅い沈線状の屈曲がある。焼成良、黒灰色を呈する。

80．須恵質の鉢の底部であろう。推定底径11.0cm。底面はナデられている。焼成やや不良、淡灰色～淡灰褐色を呈する。

81．在地産と思われる壺の肩部である。外面に横位の櫛目痕がある。内面は輪積み痕明瞭。焼成良好、胎土は橙褐色、表面は灰褐色を呈する。

82．鉄釉の小壺である。推定口径7.5cm、推定底径5.5cm、器高11.5cm。外面の胴部下位と内面口縁部に小豆色の鉄釉が施されている。底部の調整はやや粗い。素地は黄白色を呈する。

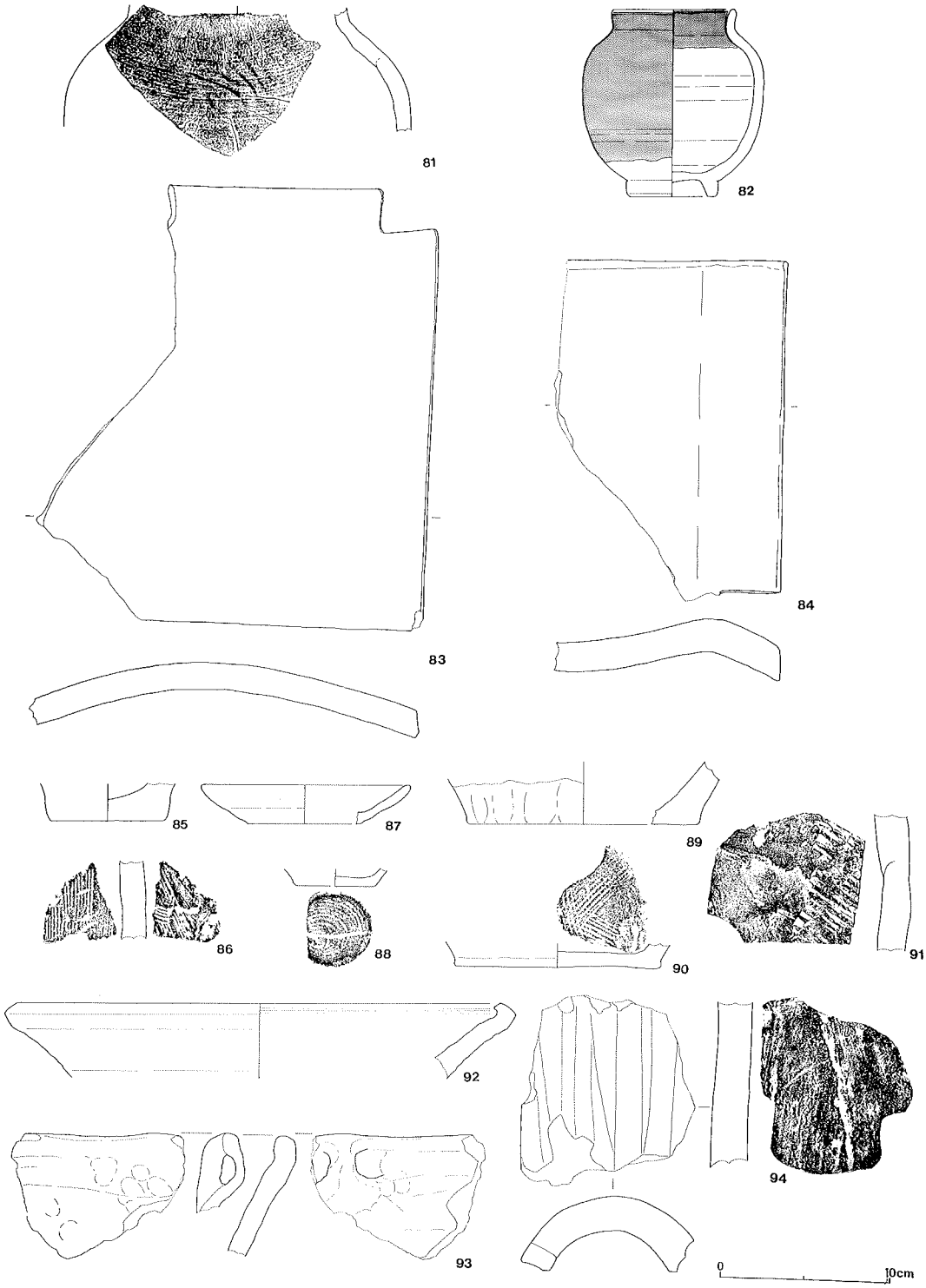
○第15号土坑出土遺物（第28図83・84）

83・84．平瓦である。いずれも粘土板１枚作りである。83は、厚さ1.6cm。上面はやや風化している。黒灰色を呈する。84は、厚さ1.7～1.9cm。裏面の調整は表面に比べやや粗い。黒灰色を呈する。

○第１号井戸跡出土遺物（第28図85～第29図104）

85．流入した縄文土器の底部である。推定底径7.0cm。底面は平坦にナデられている。焼成良好、淡橙褐色を呈する。

86．流入した埴輪片である。ハケ目は１cmあたり５～６本。焼成良、淡橙色を呈する。



第28図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物5)（１／４）

87・88．土師質の皿である。87は、推定口径13cm弱、推定底径７cm弱、器高2.4cm。焼成良好、淡褐色を呈する。88は、底径5.2cm。底面回転糸切り。焼成良好、淡褐色を呈する。

89．炻質の擂鉢であろう。内面の櫛目は不明。推定底径14cm強。外面底部の周縁に指の押圧が施されている。底面は砂底であろう。暗褐色を呈する。

90．土師質の擂鉢である。推定底径12.5cm。内面の櫛目は８条１組か。底面はナデられている。焼成良、外面淡褐色、内面暗褐色を呈する。

91．流入した須恵器甕の胴部破片である。外面に叩き目があり、内面の調整は粗い。焼成良好、淡灰色を呈する。

92．須恵質の鉢の口縁部である。推定口径31cm強。かなり開く器形と思われる。口唇部は内曲し、その先端は鋭い。焼成良好、淡灰色を呈する。

93．瓦質の内耳鉢である。内耳は橋状に貼り付けられ、貼り付け部の周辺に指の押圧が施されている。体部内面は横位のナデ、外面は指の押圧が施されている。外面に炭化物付着。焼成良好、黒灰色～灰色を呈する。

94．丸瓦である。表面はヘラ状工具で縦に削られており、裏面には布目がある。焼成良、淡灰褐色。

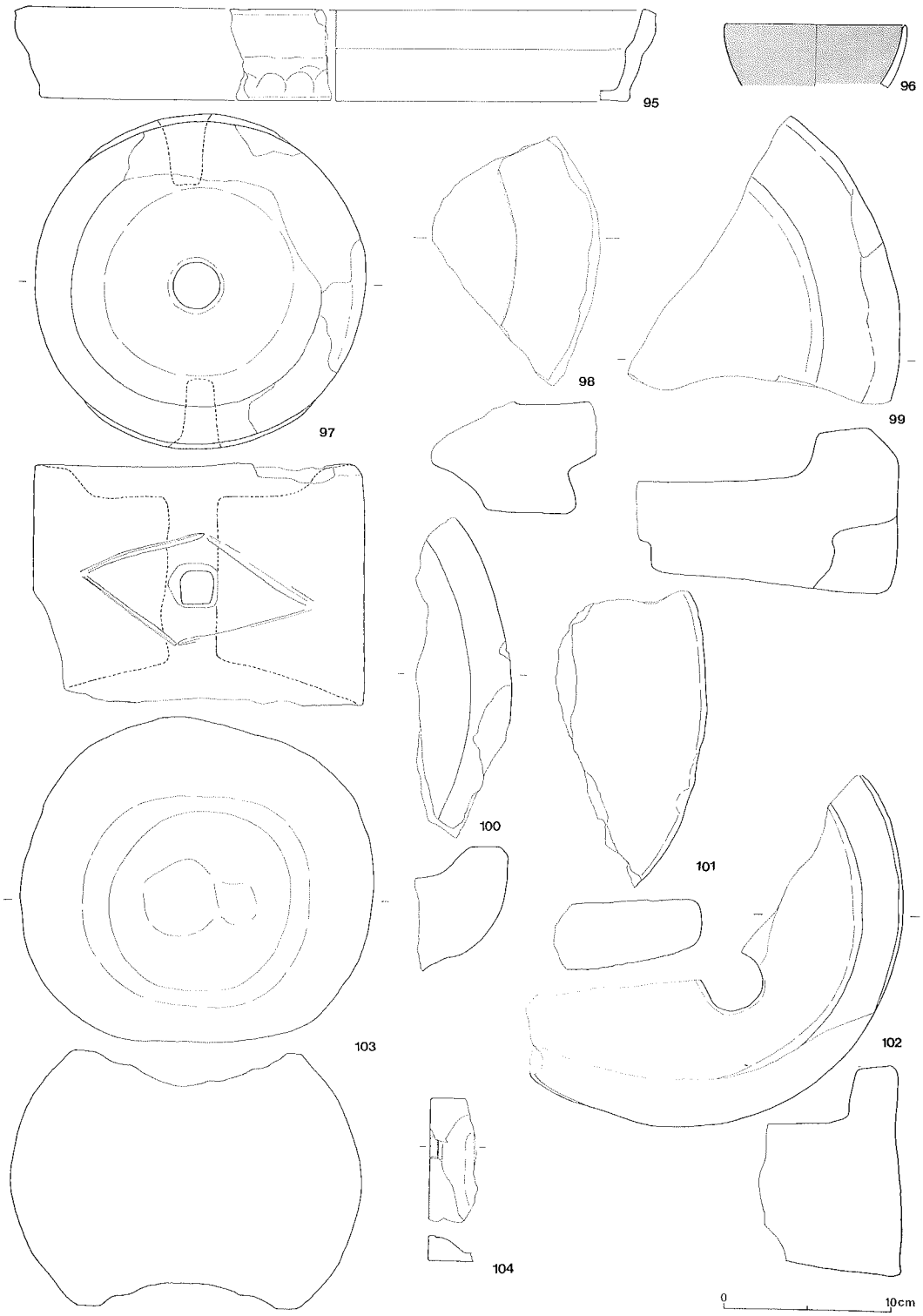
95．内耳焙烙の破片であろう。内耳は残存していない。推定口径39.0cm、器高5.6cm。外面下位は指の押圧調整、底面はほとんど調整されていない。焼成良好、外面黒褐色、内面淡褐色を呈する。

96．磁器の茶碗である。推定口径11.0cm。内外面とも褐色の鉄釉が施されている。胎土は白色を呈する。

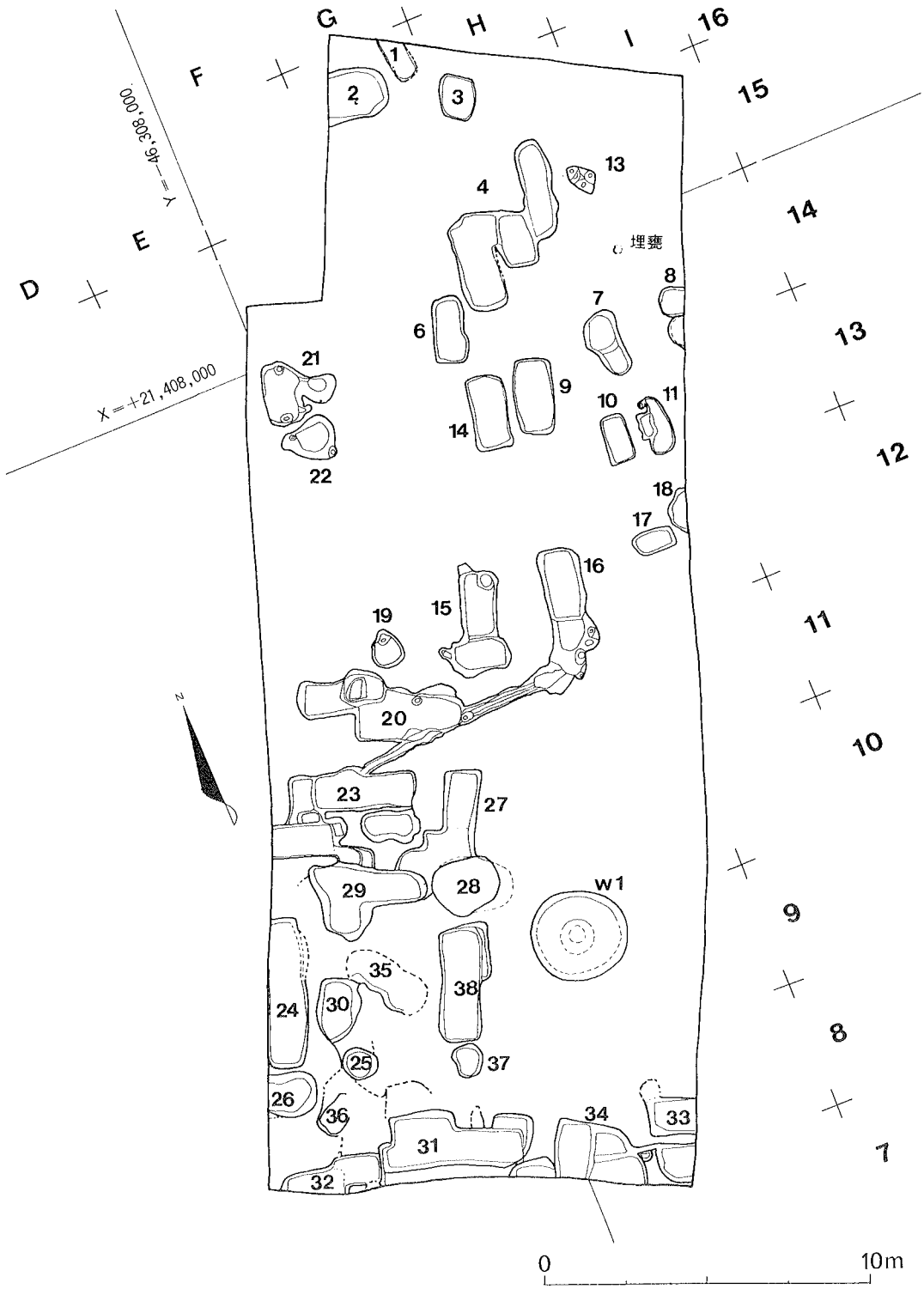
97～102．石臼である。97は茶臼の上臼である。径20.0～20.2cm、高さ14.5～14.8cm、芯棒孔径2.8cm。上面は周縁が堤状となり、中央は平坦でよく磨かれている。側面に対称的に、菱形の浮き彫りとその中央の握り手を差し込んだ方形の孔がある。凹面となっている下面は磨滅しており、溝は確認できない。石質はスコリア質の輝石安山岩である。98は茶臼の下臼である。推定底径28.0cm。受皿部の基部が残存している。底面は芯棒の孔に向ってロート状を呈していたようである。受皿部の上面と接地面はよく磨かれている。石質は輝石安山岩である。99は粉挽き臼の上臼である。推定径34.0cm、高さ10.0cm。上面は周縁が堤状となっている。凹面となっている下面は、よく使用されたものと思われ、溝は確認できない。側面に四角い孔(欠損のため内部の形状は不明)があり、下面に芯棒をさした円形の孔がわずかに認められる。石質は安山岩である。100と101は茶臼受皿の破片である。100は周縁が堤状となっており、推定径42.0cm。石質はスコリア質の輝石安山岩である。101は上面が平坦で推定径38.0cm。厚さは一定していない。輝石安山岩である。102は粉挽き臼の下臼である。推定径28.0cm、高さ12.7cm。上面は周縁が堤状となっており、穀物等を入れたと思われる孔が認められる。凹面となっている下面は磨滅しているが、粗く溝が数条認められる。石質は輝石安山岩である。

103．五輪塔の水輪である。径21.5～21.8cm、高さ15.4cm。いびつな球形を呈し、正面が平坦に成形されている。上下面は擂鉢状に窪んでいる。石質は輝石安山岩である。

104．石製の硯である。高さ1.5cm。上面の堤はわずかに残存している。よく使用されたらしく、使用面はかなり薄くなっている。



第29図　第３次発掘調査Ａ区出土遺物6)（１／４）



第30図　第３次発掘調査Ｂ区全測図（１／200）

3．B区の遺構と出土遺物

(1) 遺構（第31図～第36図）

○第１号土坑（第31図）　16―Ｇグリッドに位置する。幅約70cmの長方形を呈し、調査範囲外へ延びている。深さ約45cm。壁は若干袋状となり、底面は平坦である。

○第２号土坑（第31図）　16―Ｇグリッドに位置する。幅約150cmで、長方形状又は長円形状を呈するものと思われ、調査範囲外へ延びている。深さ約55cm。底面には緩い起伏がある。

○第３号土坑（第31図）　16―Ｈグリッドに位置する。長さ約140cm、幅約110cmの方形状を呈する。深さ約35cm。底面は平坦である。

○第４号土坑（第31図）　14・15―Ｇ・Ｈグリッドに位置する。長方形を呈する土坑少なくとも３基の切り合いである。東側の土坑は、長さ約320cm、幅約100cm、深さ約30cm。中央の土坑は、長さ約180cm、幅約120cm、深さ約35cm。西側の土坑は、長さ約305cm、幅約110～160cm、深さ30～35cmで、北端部は別土坑との切り合いの可能性がある。３基の新旧関係は、東側の土坑が最も古く、次いで中央、西側の土坑が最も新しい。

○第６号土坑（第31図）　14―Ｇグリッドに位置する。長さ約200cm、幅90～100cmの長方形状を呈する。深さは５～10cmで、ほとんど坑底部分しか残っていなかった。底面には緩い起伏がある。

○第７号土坑（第32図）　13・14―Ｈグリッドに位置する。長さ約210cm、幅75～100cm。南側は深さ５～10cmと浅く、緩く傾斜して南側は深さ約15cmである。

○第８号土坑（第32図）　13・14―Ｉグリッドに位置する。土坑２基の切り合いであるが、完掘できなかったため、形状は不明である。北側の深さ約50cmの土坑が、南側の深さ約10cmの土坑を切っている。底面はいずれも平坦である。

○第９号土坑（第32図）　13・14―Ｇグリッドに位置する。長さ約240cm、幅約120cmの長方形を呈し、深さ約100cmである。底面は平坦である。

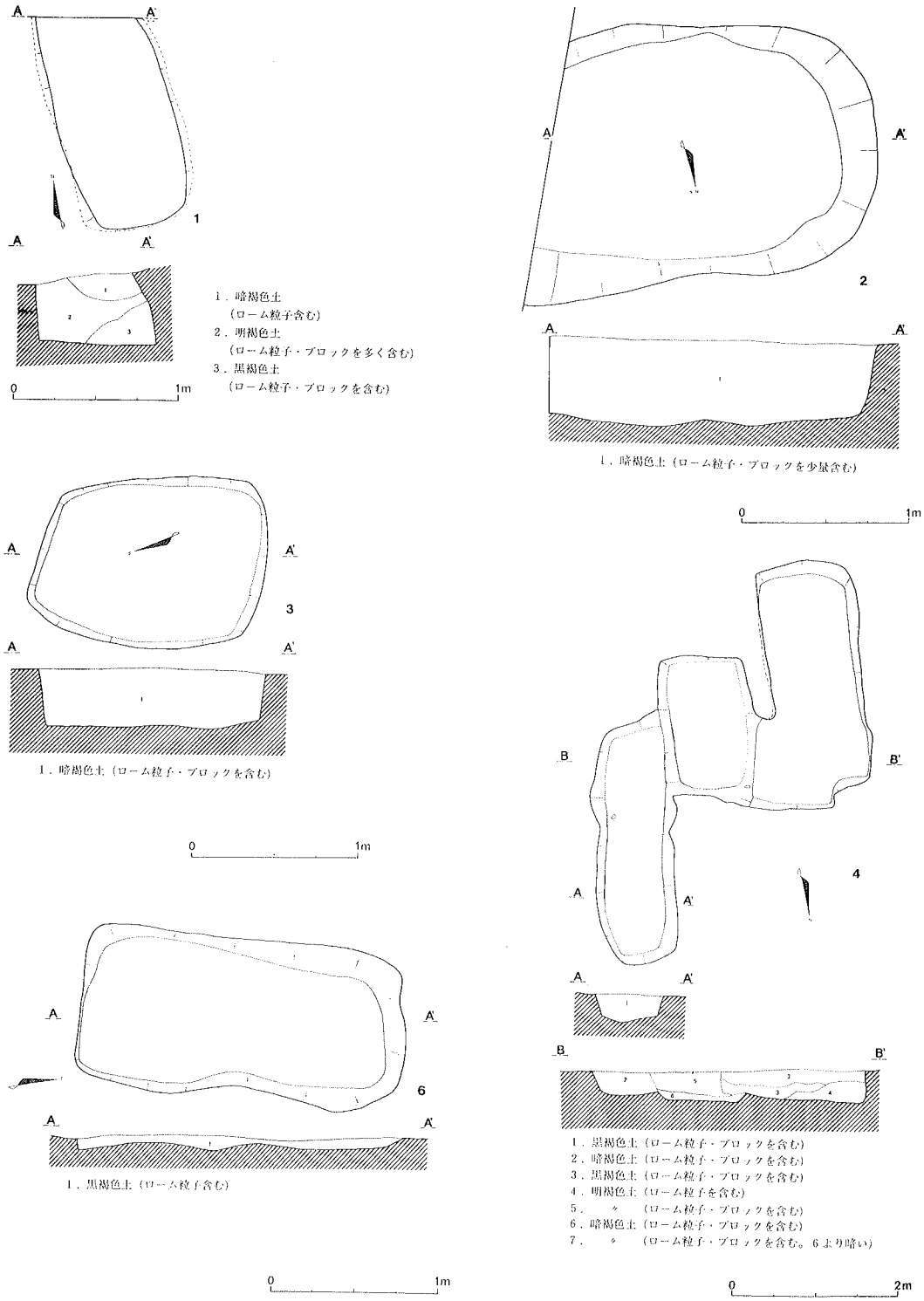
○第10号土坑（第32図）　13―Ｈグリッドに位置する。長さ約155cm、幅約80cmの長方形を呈する。深さは約10cmで、ほとんど平坦な坑底部分しか残っていなかった。

○第11号土坑（第32図）　13―Ｈグリッドに位置する。少なくとも土坑２基の切り合いで、西側の小さい土坑が東側の土坑を切っている。西側の土坑は長さ約90cm、幅50～55cmの長方形を呈し、深さは30～35cmである。底面は緩い起状がある。東側の土坑は長さ約180cm、幅45～75cm、深さ約10cmと浅く、北端は深さ約30cmほどのピット状となっている。

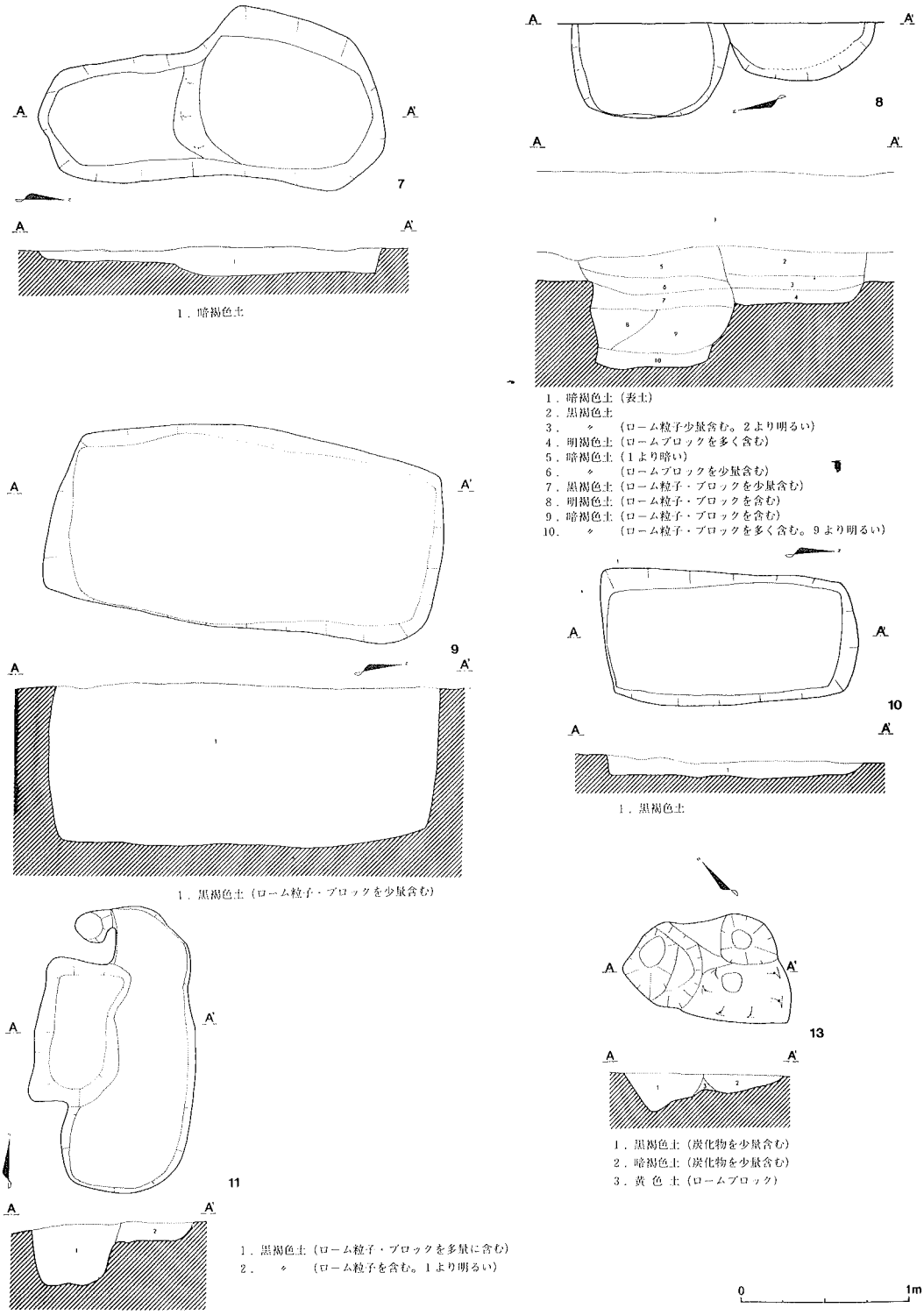
○第13号土坑（第32図）　15―Ｈグリッドに位置する。深さ10～20cmの小土坑３基が集合したものと考えられる。

○第14号土坑（第33図）　13・14―Ｇグリッドに位置し、第９号土坑と並んでいる。長さ約240cm、幅110～120cmの長方形状を呈し、深さ約90cmである。底面は平坦である。

○第15号土坑（第33図）　12―Ｆグリッドに位置する。長方形土坑２基の切り合いである。南側の土坑が北側の土坑を、掠るように切っていたようである。南側の土坑は、長さ約180cm、幅110



第31図　第１～４・６号土坑実測図（１／40、１／80）



第32図　第7～11・13号土坑実測図（1／40）

～130 cm、深さ約60cmで、西端に階段状の部分がある。南側の土坑は、長さ推定約220cm、幅約110cm、深さ60～70cm。北東隅に底面からの深さ約20cmのピット状の部分がある。底面はいずれも平坦である。

○第16号土坑（第33図）　12―Gグリッドに位置する。主体となる土坑は、北側の長さ約220 cm、幅約130 cm、深さ約80cmの長方形の土坑であるが、その南側へ数基の土坑が連続して切り合っており、さらに第1号溝状遺構へ繋がっている。

○第18号土坑（第33図）　12―Hグリッドに位置する。完掘できなかったため形状は不明である。深さは35～40cmで、底面は緩い起伏がある。

○第19号土坑（第33図）　12―Fグリッドに位置する小土坑である。径約100 cm、深さ10～15cmで北端が皿状に若干深くなっている。

○第20号土坑（第33図）　11・12―D・Eグリッドに位置する。土坑3～4基の切り合いと考えられる。西側の土坑は、長さ約330 cm、幅約160 cm、深さ約25cmで長方形を呈し、中央の土坑に切られ、第1号溝状遺構を切っている。中央の土坑は、長さ約150 cm、幅約110 cm、深さ約50cmの長方形を呈する。底面には一辺約70cmの、さらに20cmほど深いピット状の部分がある。東側の土坑は、幅105～120cm、深さ約30cmの長方形を呈する。

○第23号A土坑（第34図）　11―Eグリッドに位置する。長さ約320 cm、幅100～130cmの長方形を呈し、深さ約50cmである。底面は平坦で、西側は他の浅い土坑を切っている。擂鉢の破片などが出土した。

○第23号B土坑（第34図）　11―Eグリッドに位置する。長さ約180 cm、幅90～130 cmの不整形を呈する。深さ約40cmで、底面は平坦である。第23号A土坑との切り合い関係は不明である。灰釉の飾皿が出土した。

○第23号C土坑（第34図）　11―D・Eグリッドに位置する。幅約100 cmの長方形を呈するものと思われるが。調査範囲外へ延びているため、長さは不明である。底面には緩い起伏がある。

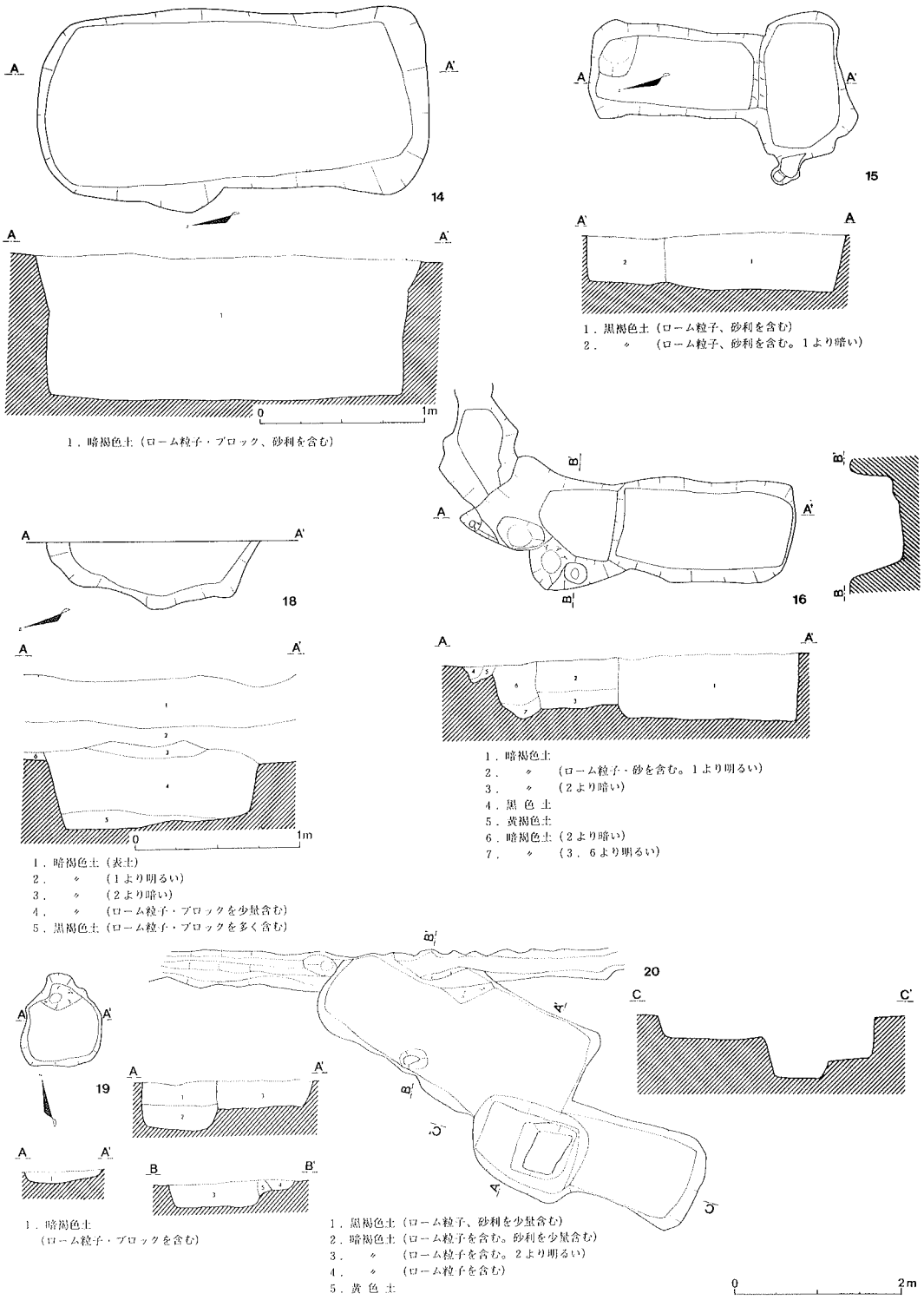
○第24号土坑（第35図）　9・10―Dグリッドに位置する。調査範囲際であるが、長さ約460 cm、幅約130 cmの長方形を呈し、深さ約90cmで底面は平坦である。東壁の一部に攪乱を受けている。土師質皿や瓦などが出土した。

○第25号土坑（第35図）　9―Dグリッドに位置する。100×110cmほどの不整円形を呈し、深さは約40cmである。備前系と思われる皿が出土した。

○第26号土坑（第35図）　9―C・Dグリッドに位置する。調査範囲外へ延びているため形状は不明だが、幅約140 cm、深さ約50cmで、底面は平坦である。

○第27号土坑（第34図）　11―Fグリッドに位置する。南端は他の土坑と切り合っているが、長さ約190 cm、幅90～110 cmの長方形を呈していたものと思われる。深さは約40cmで、底面は平坦である。

○第28号土坑（第34図）　10―E・Fグリッドに位置する。上口は170×200cmほどの不整形を呈し、深さは約150 cmで、底面は砂利層に達し、あまり平坦ではない。壁は袋状を呈し、特に東南壁は40～50cmも突出していた。須恵質鉢、土師皿などが出土した。



第33図　第14～16・18～20号土坑実測図（1／40・1／80）

○第29号土坑（第34図）　10・11—D・Eグリッドに位置する。土坑2基の切り合いで、東側の幅約90cm、深さ約50cmの土坑が、西側の長さ約250cm、深さ約60cmの土坑を切っている。なお、東側の土坑は第28号土坑に切られている。土師質甕の底部や、青磁と思われる破片などが出土した。

○第30号土坑（第35図）　10—Dグリッドに位置する。長さ約210cm、幅約140cm、深さ約20cmで底面は平坦である。

○第31号土坑（第35図）　8・9—D・Eグリッドに位置する。長さ約430cm、幅は東半が約120cm、西半が北側に突出していて約170cmである。深さは60～70cmで、底面は平坦である。西半は一部に攪乱を受けている。土師質皿、鉢、陶器の蓋のつまみ、白土を施した皿などが出土した。

○第32号土坑（第35図）　調査区の南西隅に位置し、完掘できなかった。長さ（或いは幅）約190cm、深さ約50cmで、東側の他の土坑を切っている。瓦質擂鉢の破片が出土した。

○第33号土坑（第35図）　8—Fグリッドに位置する。調査範囲外へ延びているため、形状は不明であるが、幅約110cmの長方形を呈していたようである。深さ約25cmで、一部に攪乱を受けていた。

○第34号土坑（第35図）　調査区の南東端に位置し、形状は不明であるが、土坑3基の切り合いとみられる。西側の幅約130cmの土坑は、深さ約80cm、北西部分は深さ35～40cm、南西部分は深さ約50cmである。常滑甕の胴部破片、擂鉢の底部、灯明皿などが出土した。

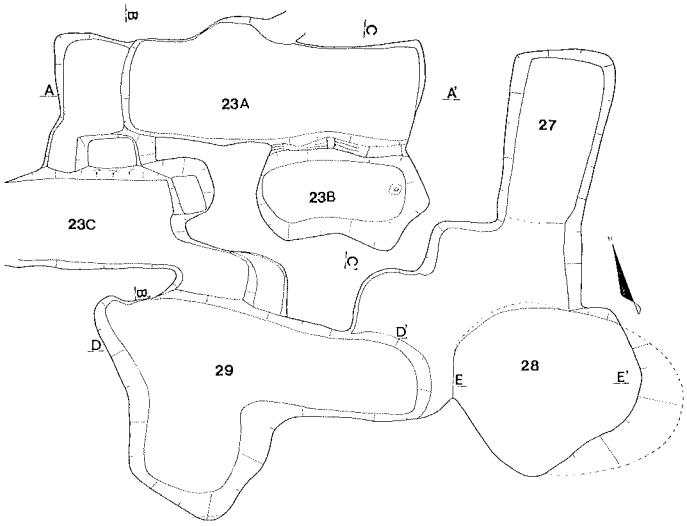
○第35号土坑（第35図）　9・10—D・Eグリッドに位置する。270×100～120cmほどの不整形を呈し、深さ5～10cmほどの浅い土坑である。土師質鉢の口縁部が出土した。

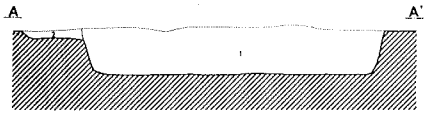
○第36号土坑（第35図）　9—Dグリッドに位置する。150×100cmほどの大きさと思われるが、深さ5～15cmと浅かったため、形状は明確にしえなかった。染付の湯呑みが出土した。

○第38号土坑（第35図）　9・10—Eグリッドに位置する。土坑2基の切り合いと思われるが、主体となる土坑は長さ約360cm、幅約120cmの長方形を呈し、深さは約75cmで、底面は平坦である。

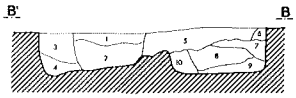
○第1号井戸跡（第36図）9・10—Fグリッドに位置する。径280～300cm、深さ約210cmで、底面は皿状に窪んでいる。土層はかなり複雑であるが、段階的に埋まっていったことが推定される。土師質皿、擂鉢、内耳鍋、瓦質鉢、瓦、砥石などが出土した。

○第1号溝状遺構（第30・33図）、11グリッド内を、第16号土坑南端部より発し、第20号土坑に切られ、第23号A土坑に達している。上幅35～50cm、下幅10～20cm、深さ15～30cmで、西側の方が若干深くなっているようである。第16号土坑と第20号土坑の間では、北壁にテラス状の部分があることが認められる。

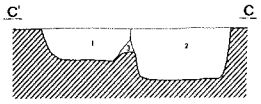




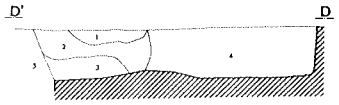
1．暗褐色土（砂利を少量含む）
2．　〃　（砂利を含む。1より明るい）



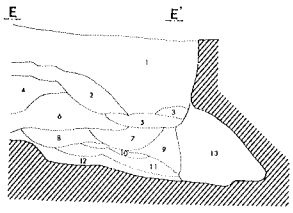
1．黒褐色土（粗い砂を多く含む）
2．暗褐色土
3．明褐色土
4．　〃　（細かい砂を含む）
5．黒褐色土
6．暗褐色土（細かい砂を少量含む）
7．明褐色土（砂を多量に含む）
8．暗褐色土（6より暗い）
9．　〃　（細かい砂を含む。8より明るい）
10．明褐色土（細かい砂を含む）



1．暗褐色土（粗い砂を多く含む）
2．　〃　（1より暗い）
3．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）



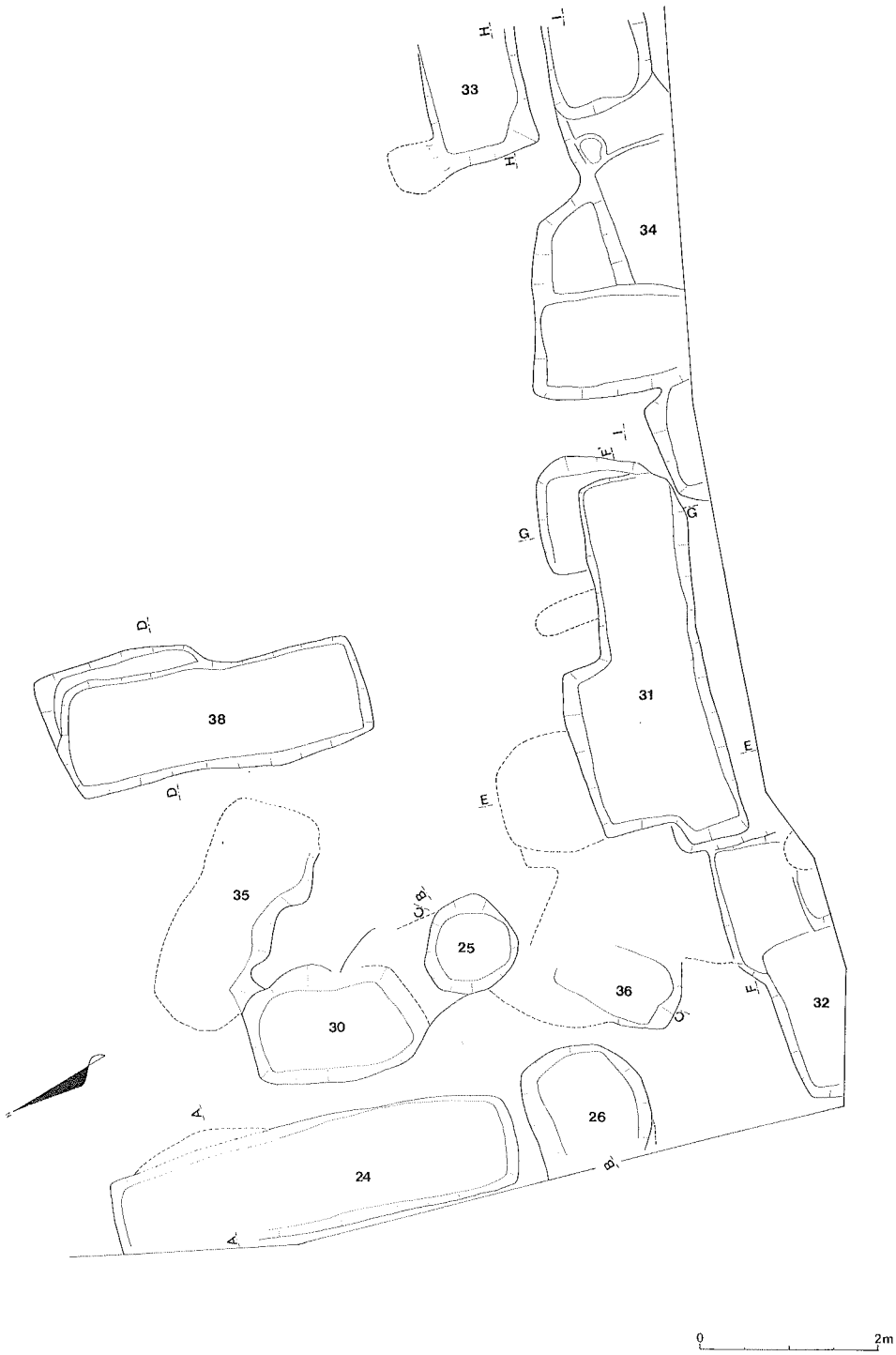
1．暗褐色土（ローム粒子、砂利を含む）
2．明褐色土（ローム粒子、砂、砂利を含む）
3．　〃　（2より明るい）
4．暗褐色土
5．黒褐色土（大小の礫を含む。第28号土坑覆土）



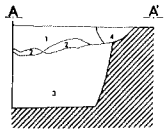
1．黒褐色土（大小の礫を含む）
2．　〃　（砂を含む）
3．　〃　（砂利を少量含む）
4．　〃　（ローム粒子を少量含む）
5．　〃　（ローム粒子を少量含む）
6．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
7．暗褐色土（ローム粒子を多量に含む）
8．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
9．　〃　（ローム粒子・ブロックを多量に含む。8より明るい）
10．黒褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
11．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む。8より暗い）
12．　〃　（ローム粒子、砂を多量に含む）
13．黒褐色土（砂利を含む）

0　2m

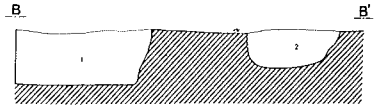
第34図　第23号A～C・第27～29号土坑実測図（1／80）



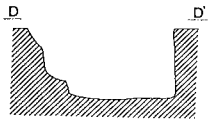
第35図　第24～26・30～36・38号土坑実測図（1／80）

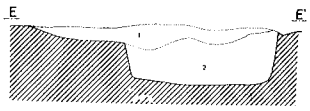


1．黒褐色土（砂利を含む）
2．暗褐色土（砂を多く、砂利を含む）
3．　　（砂・砂利を少量含む）
4．攪　　乱

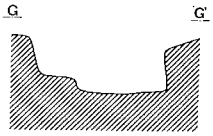


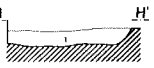
1．暗褐色土（ローム粒子、砂利を含む）
2．黒褐色土（ローム粒子、砂を含む）



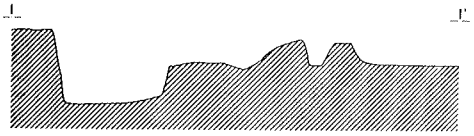


1．攪　　乱
2．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含む。炭化物を含む）

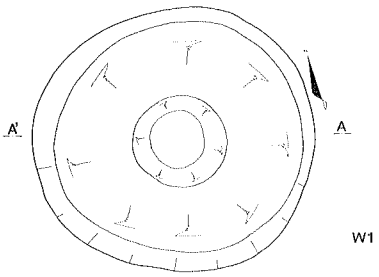


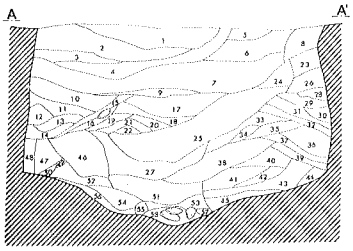


1．黒褐色土
（ローム粒子・ブロック、粘土ブロック、炭化物を含む）



1．灰色砂層（粗い砂層、砂利を含む）
2．明褐色土（細かい砂、砂利を少量含む）
3．明褐色砂層（粗い砂層、砂利を多量に含む）
4．砂　利　層
5．黒褐色土（粗い砂、砂利を多量に含む）
6．明褐色砂層（粗い砂層、砂利を多量に含む）
7．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
8．　〃　（ローム粒子、砂を含む）
9．黄褐色土（砂、砂利を含む）
10．黒褐色土（砂利を多く含む）
11．　〃　（砂利を少量含む）
12．明褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に、砂を少量含む）
13．暗褐色土（黒色、土粒子、砂利を少量含む）
14．黄褐色土（ローム質）
15．砂　　層（粗い砂層、ローム粒子、砂利を含む）
16．黒　色　土（砂を少量含む）
17．明褐色土（砂利を多く、礫を少量含む）
18．黒褐色土（砂、砂利を多量に含む）
19．明褐色土（砂を多く、砂利を含む）
20．黒　色　土（砂利を含む）
21　〃
22．黄　色　土（ロームブロック）
23．黒　色　土（砂利、礫を含む）
24．　〃　（砂利を少量含む）
25．黒褐色土（砂、砂利を多量に含む）
26．黒　色　土（ローム粒子・ブロックを含む。砂利を少量含む）
27．黄褐色土（ローム質、黒色土を多く含む）
28．黄　色　土（ローム質）
29．黒褐色土（ローム粒子、砂利を少量含む）
30．黄　色　土（ロームブロック）
31．黒褐色土（ローム粒子を含む。粗い砂、砂利を多量に含む。29より明るい）
32．　〃　（31、10より明るい）
33．　〃　（砂を含む。32より明るい）
34．明褐色土（ローム粒子を多量に含む）
35．黄　色　土（ローム土）
36．暗褐色土（ローム粒子、砂を多量に含む）
37．黒　色　土（ローム粒子を少量含む）
38．黄褐色土（ローム質）
39．黄　色　土（ローム土、黒色土を含む）
40．黄褐色土（ローム質、38より明るい）
41．黄　色　土（ローム土、40より明るい）
42．黄褐色土（ローム質、40より明るい）
43．明褐色土（緑灰色を帯び、細かい砂を多量に含む）
44．砂　　層（やや粗い砂層、ローム粒子を多く含む）
45．黒　色　土（ローム粒子を少量含む）
46．黄褐色土（ローム質）
47．黄　色　土（ローム土）
48．黒　色　土（砂、砂利を少量含む）
49．黄褐色土（ローム質、砂を少量含む。46より暗い）
50．砂　　層（細かい砂層）
51．黄褐色土（ローム質、38より暗い）
52．　〃　（ローム質、微細な砂を少量含む。46より明るい）
53．　〃　（ローム質）
54．　〃　（ローム質、細かい砂を含む。緑灰色を帯びる）
55．明褐色土（ローム質、細かい砂を含む。緑灰色を帯びる）
56．砂　　層（やや細かい砂層。ローム粒子含む）
57．　〃　（細かい砂層）
※底の地山は、砂利を多く含む粗い砂層である。





0　　2m

第36図　土層断面図・第１号井戸跡実測図（１／80）

(2) 出土遺物（第37図～第40図）

○第１号土坑出土遺物（第37図）

黒耀石のフレイクである。長さ2.1cm、幅1.2cm、厚さ0.2～0.3cm。表裏面とも細かいフィッシャーがみられる。

○第４号土坑出土遺物（第37図１～24）

第４号土坑は、第１号埋甕に近く、流入した縄文土器片が多く出土した。

１～22．縄文土器片である。１は波状口縁である。内面は横位に丁寧に磨かれており、外面には炭化物が付着している。焼成良好、黒褐色を呈する。２も波状口縁である。縄文はＲＬ単節で、口唇部で横転、それ以下は縦転である。焼成良好、黄白色を呈する。３も口縁部の破片である。沈線で文様が区画されており、縄文はＲＬ単節である。焼成良好、黒褐色～暗褐色を呈する。４は、縄文はＲＬ単節、焼成良好、暗褐色を呈する。５は、縄文はＲＬ単節、焼成良、暗褐色を呈する。６は、縄文はＲＬ単節、焼成良、橙褐色を呈する。７は、ＬＲ単節の縄文と無文部の境はわずかに隆起している。焼成良好、外面淡褐色、内面暗褐色を呈する。８は、縄文はＲＬ単節、焼成良好、暗褐色を呈する。９は胴部下位の破片であろう。縄文はＲＬ単節、焼成良、橙褐色を呈する。10は隆線が垂下している。縄文はＲＬ単節、焼成良、黄白色を呈する。11は、縄文はＬＲ単節、焼成良好、淡褐色を呈する。12は、縄文はＬＲ単節、焼成良好、淡褐色を呈する。13は、縄文はＲＬ単節、焼成良、黄白色を呈する。14は内面に炭化物が付着している。縄文はＲＬ単節、焼成良、橙褐色を呈する。15は内面がよく磨かれている。縄文はＲＬ単節、焼成やや不良、外面暗褐色、内面灰褐色を呈する。16は、縄文はＲＬ単節、焼成良好、暗褐色を呈する。17は、縄文はＲＬ単節、焼成良、外面暗褐色、内面黄灰褐色を呈する。18は内面が横位に細かく丁寧に磨かれている。縄文はＲＬ単節、焼成良好、黄白色を呈する。19は隆線が垂下している。縄文はＲＬ単節、焼成良好、淡褐色を呈する。20は、縄文はＲＬ単節、焼成良好、淡褐色～淡橙褐色を呈する。21は、文様は沈線のみで、内面に炭化物が付着している。焼成良、淡褐色を呈する。22は、縄文はＲＬ単節、焼成やや不良、淡褐色を呈する。

23．流入した埴輪片である。外面のハケ目は１cmあたり６本。内面はナデられている。焼成良好、橙褐色～暗褐色を呈する。

24．土錘である。２分の１以上を欠損している。最大径1.0cm、孔径0.35cm。孔は真直ぐに通り、表面は丁寧にナデられている。焼成良好、淡褐色を呈する。

○第９号土坑出土遺物（第37図25）

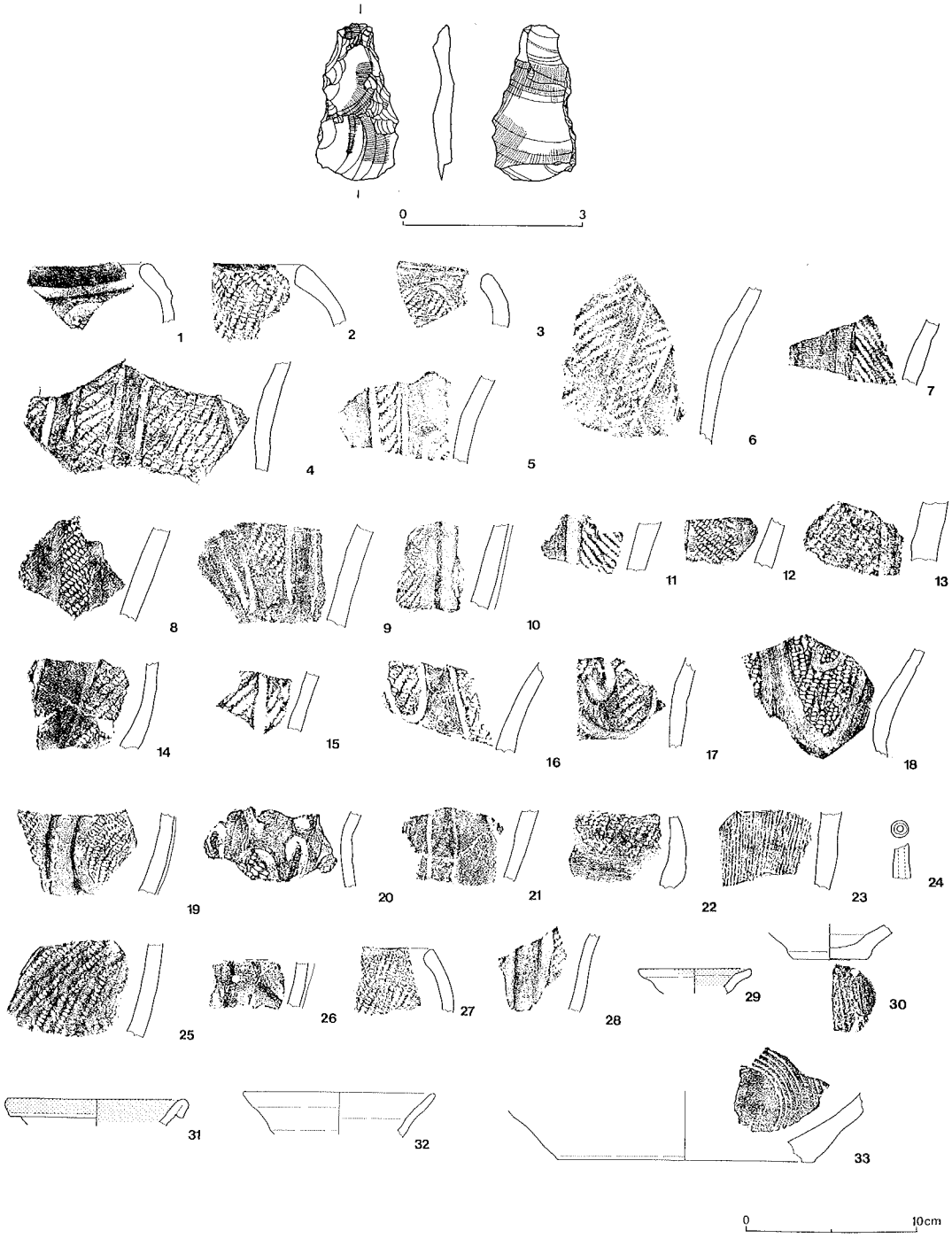
25．流入した縄文土器片である。底部に近い破片であろう。縄文はＲＬ単節、焼成良好、暗褐色を呈する。

○第11号土坑出土遺物（第37図26）

26．流入した縄文土器片である。微隆線による文様が描かれている。焼成良好、淡褐色を呈する。

○第13号土坑出土遺物（第37図27・28）

27・28．流入した縄文土器片である。27は口縁部の破片で、縄文はＲＬ単節、焼成良好、淡橙褐色



第37図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物(1)（１／２・１／４）

を呈する。28は、縄文はＲＬ単節、焼成良好、外面黄褐色、内面暗褐色を呈する。

○第15号土坑出土遺物（第37図29）

29．須恵質の小皿であろう。推定口径７㎝弱。内面に緑色を帯びた灰釉が施されており、特に下に厚く溜っており飴釉状となっている。釉の一部は外面の口縁部にも流れている。胎土は灰白色を呈する。

○第16号土坑出土遺物（第37図30・31）

30．土師質の皿又は甕の底部と思われる。推定底径4.5㎝。内面は指ナデ、底面は回転糸切りの後、柾目痕が施されている。焼成は良好で軽質である。淡褐色～黄白色を呈する。

31．須恵質の灰釉壺の口縁部であろう。推定口径11㎝弱。折り返し口縁で、外面口唇部及び内面に灰釉が施されている。胎土は灰白色を呈する。

○第21号土坑出土遺物（第37図32）

32．土師質皿である。推定口径11.5㎝。ロクロは右回転であろう。焼成良好、淡橙褐色を呈する。

○第23号Ａ土坑出土遺物（第37図33）

33．土師質の擂鉢である。推定底径15.5㎝。内面の櫛目は、底面に合わせることなく円形を描いている。内面はよく使用されている。焼成良好、淡褐色～黒褐色を呈する。

○第23号Ｃ土坑出土遺物（第38図34）

34．磁器質の灰釉飾皿である。口径15.0×10.2㎝、底径5.7㎝、器高2.9～3.4㎝。畳付及び高台内を除き灰釉が施されており、貫入が認められる。口縁部には指の成形痕が認められ、また、口縁部の一部は黒ずんでいる。素地及び胎土は灰白色を呈する。

○第24号土坑出土遺物（第38図35～37）

35．土師質皿である。底径6.4㎝。底面は回転糸切り。焼成良好、淡褐色を呈する。

36．瓦質鉢の口縁部である。内耳がつくものと思われる。外面に炭化物が付着している。焼成良、灰白色を呈する。

37．平瓦である。表面には沈線による枠線が施されていたようである。表面は櫛状工具による調整の後、ヘラ状工具でナデられている。裏面はヘラ状工具でナデられている。焼成良好、灰色を呈する。

○第25号土坑出土遺物（第38図38）

38．外面に灰釉、内面に鉄釉が施された皿である。推定底径7.5㎝。外面に透明感のある緑色を帯びた黒灰色の灰釉が施されており、貫入が認められる。内面には濃茶色の鉄釉を流しており、畳付にも薄く鉄釉が施されている。胎土は黒褐色を呈する。

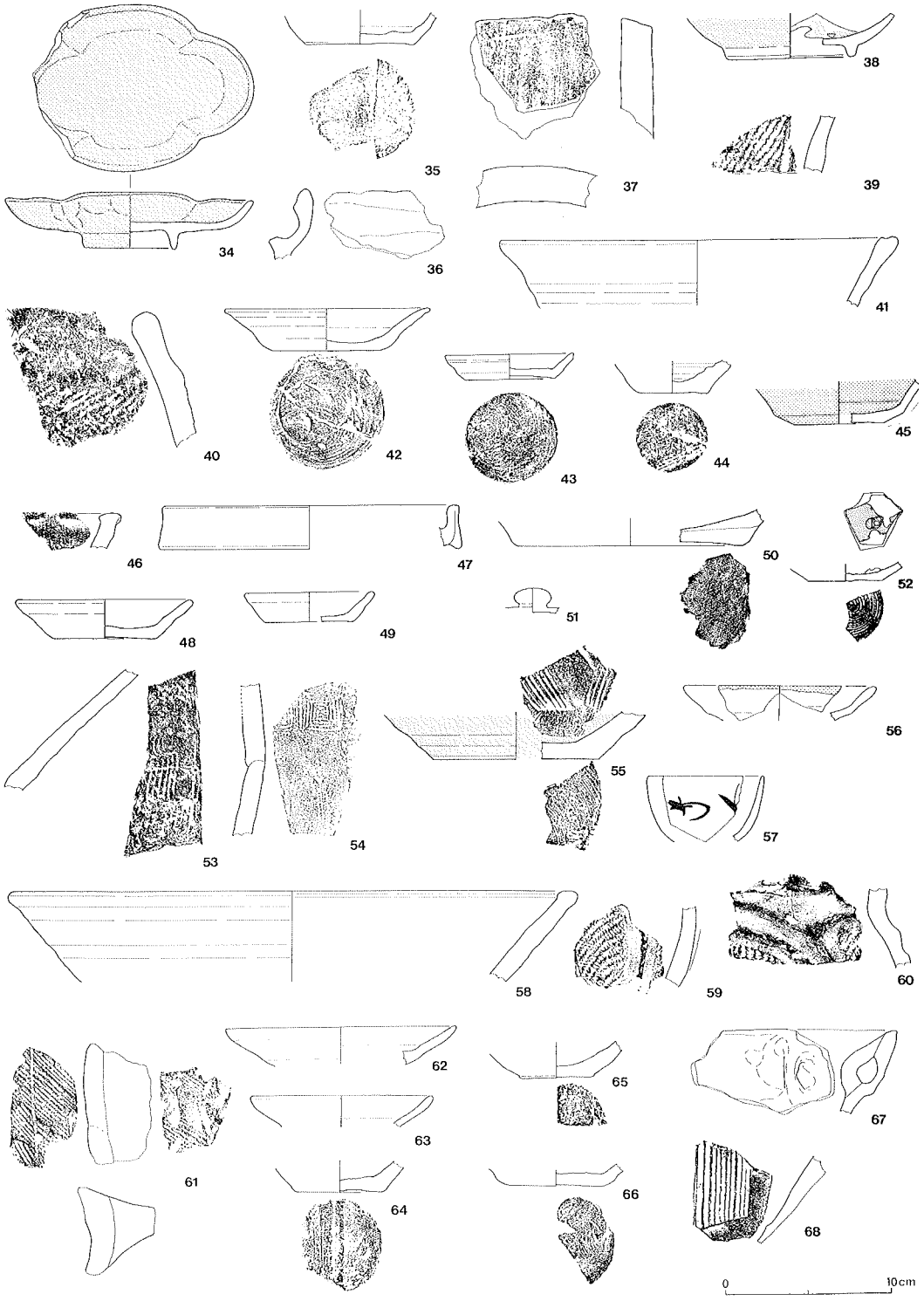
○第27号土坑出土遺物（第38図39）

39．流入した縄文土器片である。縄文はＲＬ単節。焼成良好、外面灰褐色、内面淡褐色である。

○第28号土坑出土遺物（第38図40～43）

40．流入した縄文土器片である。器面は磨滅しているが、縄文はＬＲ単節と思われ、最も上位で横転、その下は縦転している。焼成やや不良、黄白色を呈する。

41．須恵器鉢の口縁部と思われる。推定口径24.0㎝。口唇部は肥厚し、上面に沈線が巡っている。



第38図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物(2)（１／４）

外面に自然釉がかかっている。焼成良好、灰色を呈する。

42・43．土師質の皿である。42は、口径12.4cm、底径 6.6 cm、器高 2.6 cm。体部は外反して開く。底面は回転糸切り。焼成良好、暗褐色を呈する。43は、口径 7.8 cm、底径 5.5 cm、器高 1.5 cm。灯明皿であろう。外面に煤が付着している。底面は回転糸切り。焼成良、淡褐色を呈する。

○第29号土坑出土遺物（第38図44・45）

44．土師質の甕の底部と思われる。底径 4.3 cm。底面には柾目痕が残っている。焼成良好、淡灰褐色を呈する。

45．青磁の小鉢であろう。推定底径 5.5 cm弱。底面を除いて施された釉は透明な緑灰色を呈し、貫入が認められる。胎土は、やや青色を帯びた灰白色を呈する。

○第31号土坑出土遺物（第38図46～52）

46．浅鉢形の縄文土器の口縁部と思われる。平坦な口唇部は内側に突出し、外面に刻み目が施されている。焼成良、淡褐色を呈する。

47．須恵器広口壺の口縁部であろう。推定口径18.5cm。折り返し口縁である。焼成良、灰色を呈す。

48・49．土師質の皿である。48は、推定口径11cm弱、推定底径 6.0 cm、器高 2.4cm。底面は回転糸切りの後ナデられている。焼成良、暗褐色を呈する。49は、推定口径 8.0 cm、推定底径 5.5 cm、器高 1.8 cm、ロクロは左回転であろう。底面は回転糸切りの後ナデられている。焼成やや不良、淡灰褐色を呈する。

50．土師質鉢の底部であろう。推定底径13.5cm。底面は回転糸切りである。焼成良好、淡褐色を呈する。

51．陶器蓋のつまみである。上面の釉は、白色の地に橙褐色のものが霜降り状に施されている。下面の釉は、白色で貫入が認められる。胎土は黄灰色を呈する。

52．内面に白い化粧土による文様が施された皿である。推定底径 4.5 cm。釉は透明で、地は灰褐色を呈する。内面に共ドチがある。底面は回転糸切り。外面は素地のままで、灰色を呈する。

○第32号土坑出土遺物（第38図53）

53．瓦質の擂鉢である。内面は斑点状に剝離しているが、浅く目の粗い櫛目が施されている。焼成良好、外面灰褐色、内面灰白色を呈する。

○第34号土坑出土遺物（第38図54～56）

54．常滑甕の胴部破片である。外面に霜降り状に自然釉がかかっている。内面はあまり調整されていない。外面灰色～灰褐色、内面暗褐色を呈する。

55．擂鉢である。推定底径10.0cm。内外面及び底面に小豆色の鉄釉が施されている。内面の櫛目は7条1組。底面は回転糸切り。胎土は黄白色を呈する。

56．灯明皿であろう。推定口径11.5cm。口唇部に緑色を帯びた灰釉が施され、貫入が認められる。胎土は黄白色を呈する。

○第35号土坑出土遺物（第38図58）

58．土師質の鉢である。推定口径34cm強。ロクロ調整。口唇部はわずかに内曲している。焼成良、淡灰褐色を呈する。

○第36号土坑出土遺物（第38図57）

57．染付茶碗である。推定口径7.0cm。呉須の発色は青灰色で鮮明。胎土は白色を呈し、黒色微粒子を含んでいる。

○第１号井戸跡出土遺物（第38図59～第39図77）

59・60．流入した縄文土器片である。59は隆線が垂下している。縄文はＲＬ単節、焼成良、外面淡灰褐色、内面暗褐色を呈する。60は両耳壺の破片と思われる。微隆線による文様とＲＬ単節の縄文が施されている。内面はかなり剝離している。焼成良、淡褐色を呈する。

61．流入した埴輪片である。円筒に鰭状の部分が貼り付けられている。ハケ目は１cmあたり５～６本。内面はナデられている。焼成良、橙褐色を呈する。

62～66．土師質の皿である。62は、推定口径14.0cm、焼成良好、淡褐色を呈する。外面下位に黒斑がある。63は、推定口径11.0cm、焼成良好、淡褐色を呈する。64は、底径5.5cm、底面は回転糸切りで、ヘラ状工具により刻まれたような段がある。焼成良好、黄白色を呈する。65は、推定底径4.5cm、底面は回転糸切りである。焼成良好、黄白色を呈する。66は、推定底径5.5cm強、底面は回転糸切りである。

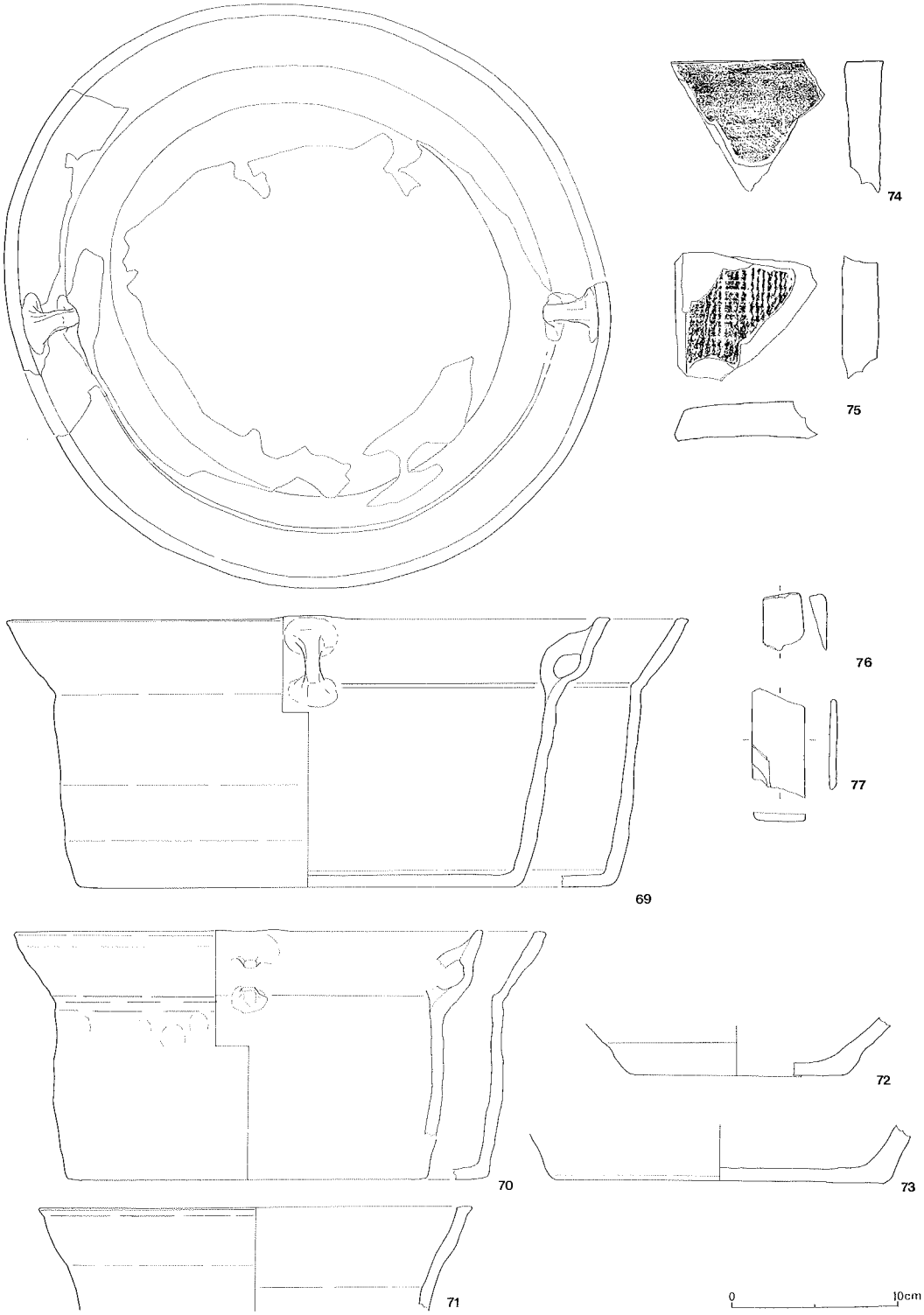
68．土師質の擂鉢である。内面に深い櫛目が施されている。外面は完全に剝離している。焼成良好、淡褐色を呈する。

67・69～71．瓦質の内耳土鍋である。67は内耳部分の破片である。内耳は向ってやや左に傾いている。内耳の下の貼り付け部は外側から強く押圧されている。外面に炭化物付着。焼成良好、灰色を呈する。69は、推定口径36.5cm、推定底径25.5cm、器高16.4cm。内耳は２つ残存し、ほぼ対面の位置に貼り付けられている。体部はわずかに外傾し、屈曲して、口縁部は内彎気味に開く。ロクロ調整の後、内面全面及び外面口縁部から体部上位は丁寧な横ナデ。体部外面下位及び底面はほとんど調整されていない。外面に炭化物付着。焼成良好、黒灰色を呈する。70は、口径28.0～29.2cm、推定底径22.0cm、器高15.1cm、口径は長円形にやや歪んでいる。内耳は、ほぼ対面の位置に２つ残存しているが、いずれも部分的に欠損している。体部は直立し、屈曲して、口縁部は外傾して開く。ロクロ調整、内面全面及び外面口縁部はよくナデられている。体部外面は、指の押圧の後に粗いナデが施されているようである。底面は周縁がヘラ状工具により削られている。体部外面に炭化物付着。焼成良好、黒灰色を呈する。71は、推定口径26cm強、内耳は残存していない。口唇部上面は平坦で、頸部の屈曲は緩い。ロクロ調整、外面炭化物付着。焼成良好、淡灰褐色を呈する。

72・73．瓦質鉢の底部である。72は、推定底径13cm強。器面は磨滅が激しい。焼成良好、灰褐色を呈する。73は、推定底径20.0cm。ロクロ調整の後、指ナデによる調整が施されている。底面も丁寧にナデられている。底面とその周縁を除き、炭化物付着。焼成良好、黒褐色を呈する。

74・75．平瓦である。74は、表面は叩いた後にヘラ状工具でナデられていたようである。裏面はヘラ状工具でナデられている。焼成良好、灰色を呈する。75は、表面に縄目が施されており、裏面はヘラ状工具でナデられている。焼成良好、灰色を呈する。

76・77．砥石である。76は、幅２.５cm、図の下面がよく使用されている。石質は凝灰岩である。77



第39図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物(3)（１／４）

は、幅3.2㎝、図の下面がよく使用されている。石質は凝灰岩である。

○埋甕（第40図78）

78．15―Eグリッドに逆位であったものである。口縁部のみ残存していた。推定口径22.5㎝。口唇部の突起は、4単位の可能性が高い。口縁部の文様は、隆線とその両脇のナデによる沈線によって描かれている。器面は磨滅が激しく、文様内を充塡する沈線は不明部分が多いが、RL単節である。内面は丁寧にナデられている。なお、この埋甕の周辺からは縄文土器片が比較的多く出土したが、柱穴等は確認できなかった。

○表面採集遺物（第40図79～104）

79．縄文土器片である。口縁部に近い破片であろう。縄文はLR単節横転。焼成良好、淡褐色を呈する。

80．灯明皿である。推定口径10.0㎝。内外面に黄橙色の釉が施されている。口唇部に煤付着。胎土は黄白色を呈する。

81．須恵器の鉢であろう。推定口径32.0㎝。口唇部が肥厚し、上面に沈線が巡る。この口唇部上面に薄く自然釉がかかっている。焼成良好、灰白色を呈する。

82・83．擂鉢である。ともに在地産と思われる。82は、内面の櫛目は密で、焼成良好、煉瓦質で赤褐色を呈する。83は、内面の櫛目は密で、焼成良好、赤褐色を呈する。

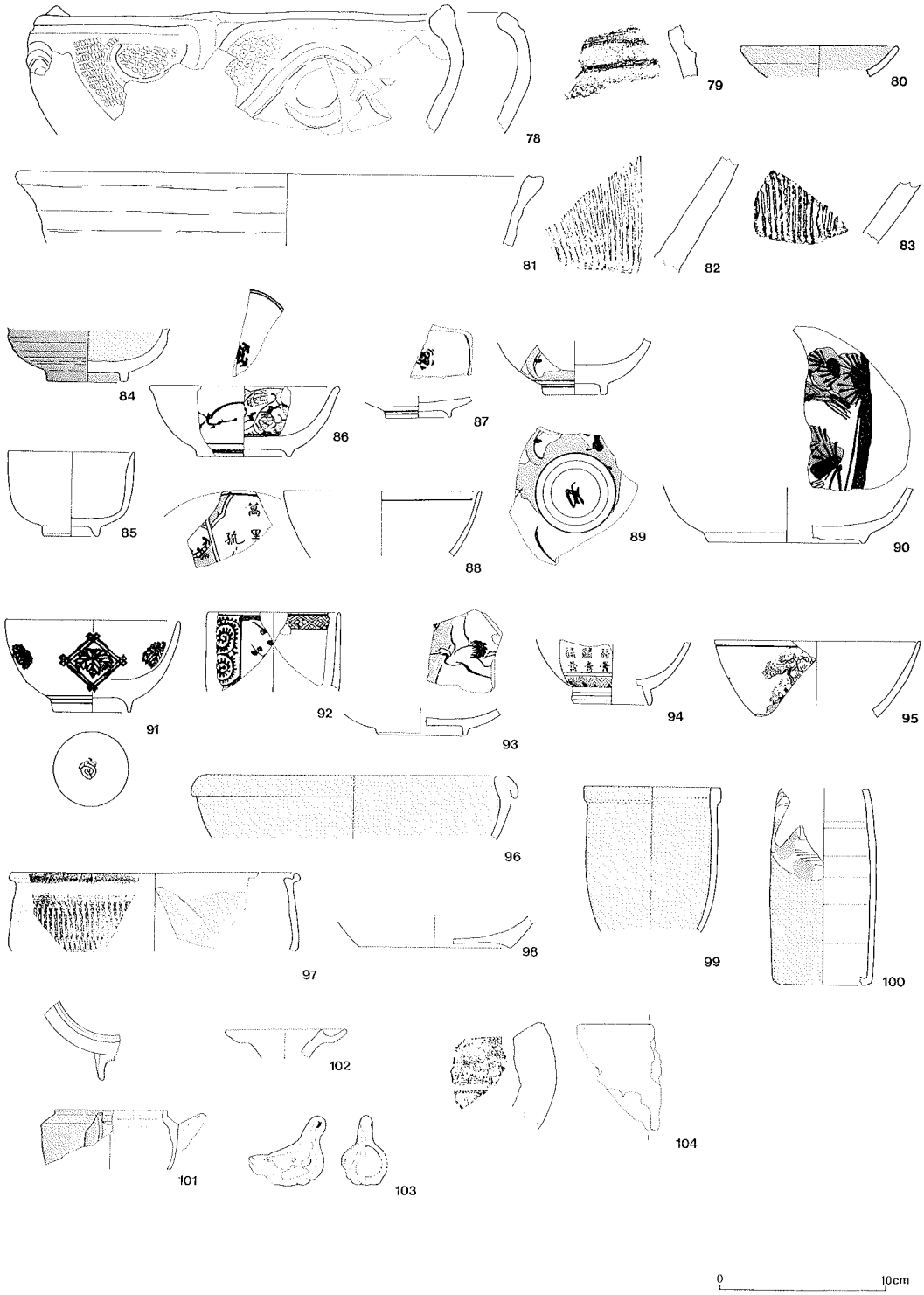
84．鉄釉と灰釉がかけ分けられた茶碗である。底径4.8㎝。外面及び高台内の鉄釉は濃茶色、内面の灰釉は貫入が認められる。畳付は釉がふきとられている。胎土は淡褐色を呈する。

85．磁器の湯呑みである。推定口径7.5㎝、推定底径3.5㎝弱、器高5.2㎝。赤い絵付けがわずかに認められるが、その形状は不明。畳付は釉がふきとられている。胎土は白色を呈する。

86～95．染付の皿、茶碗などである。86の皿は、推定口径11.5㎝、推定底径5.5㎝強、器高4.3㎝呉須の発色は紺で鮮明。底部内面中央に比較的形の整った五弁花がみられる。胎土はわずかに灰色を帯びた白色で、黒色微粒子を含んでいる。87の皿は、推定底径4.0㎝、呉須の発色は青紺で鮮明。底部内面中央にかなり形の崩れた五弁花がみられる。胎土はわずかに黄白色を帯びた白色を呈する。88の茶碗は、推定口径12.0㎝。呉須の発色は紺で鮮明。胎土は白色を呈する。89の茶碗は、底径4.0㎝。呉須の発色は淡青灰色でやや不鮮明。胎土は灰白色を呈する。90の皿は、推定底径9.5㎝。呉須の発色は濃紺で鮮明。底面は中央を除き釉がふきとられている。底面には重ね焼痕が認められる。胎土は白色を呈し、黒色微粒子を含んでいる。91の茶碗は、推定口径10.5㎝、推定底径4.5㎝、器高5.7㎝。いわゆる蒟蒻判による文様であろう。呉須の発色は灰紺でやや不鮮明。胎土は白色を呈する。92の茶碗は、推定口径8.0㎝。呉須の発色は、灰色を帯びた青紺で鮮明。胎土は白色を呈する。93の皿は、推定底径5.5㎝弱。呉須の発色は青紺で鮮明。胎土は白色を呈する。94の茶碗は、推定底径4.5㎝強。呉須の発色は紺で鮮明。胎土は白色を呈する。95の茶碗は、推定口径12.5㎝。呉須の発色は青灰で鮮明。胎土は白色を呈する。

96．鉢と思われる。推定口径19.5㎝。内外面に灰釉が施されている。貫入が認められる。口縁部は折り返しである。胎土は黄白色を呈する。

97．鉢と思われる。推定口径17.5㎝。外面は口縁部を除き薄い鉄釉が、内面も口縁部を除き褐色の



第40図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物(4)（１／４）

鉄釉が施されている。体部外面には、櫛状工具による簾状の文様が刻まれている。口縁部は受け状に成形されており、蓋がついていたものと思われる。胎土は黄白色を呈する。

98. 器形は不明である。推定底径11.0cm。内面には淡褐色の鉄釉が施されている。外面には炭化物が付着している。胎土は黄褐色を呈する。

99. 筒状の器形を呈する磁器である。推定口径 8.5 cm。内外面とも灰釉が施されており、口唇部の上面及び内面は釉がふきとられている。胎土は白色を呈する。

100. 徳利である。推定底径 6 cm弱。外面に灰釉が施されており、貫入が認められる。胴部上位に白色がおそらく円形に施され、その上に緑釉が施されている。胎土が淡褐色を呈する。

101. 急須である。推定口径 7 cm弱。内面口縁部及び外面に褐色の鉄釉が施されている。注口部の上面に長円形の注口がある。胎土は淡黄灰褐色を呈する。

102. 灯明具であろう。推定口径 7.5 cm。内外面とも淡褐色の釉が施されており、細かい貫入が認められる。突堤はつまみ出されている。胎土は黄灰色を呈する。

103. 陶製の鳥である。高さ 4.2 cm、長さ 4.7 cm、推定幅 2.8 cm。胴部は空洞となっている。頭部側面から後頭部にかけて、及び両翼が白く塗られている。目は黒灰色に塗られている。素地部分にわずかに自然釉がかかっている。素地部分は淡橙褐色を呈する。

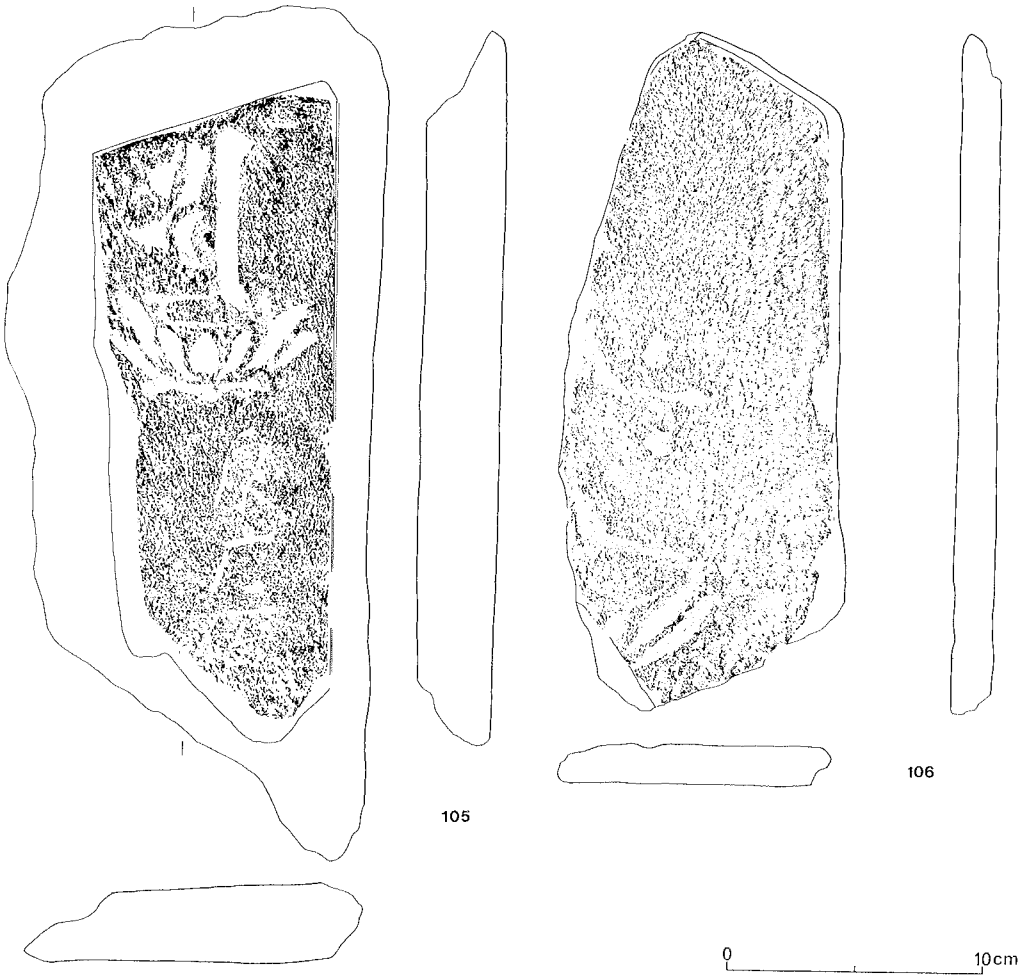
104. 瓦である。厚さ2.0～2.5cm。裏面に布目がみられる。外面はナデられている。焼成良好、灰色を呈する。

※追補

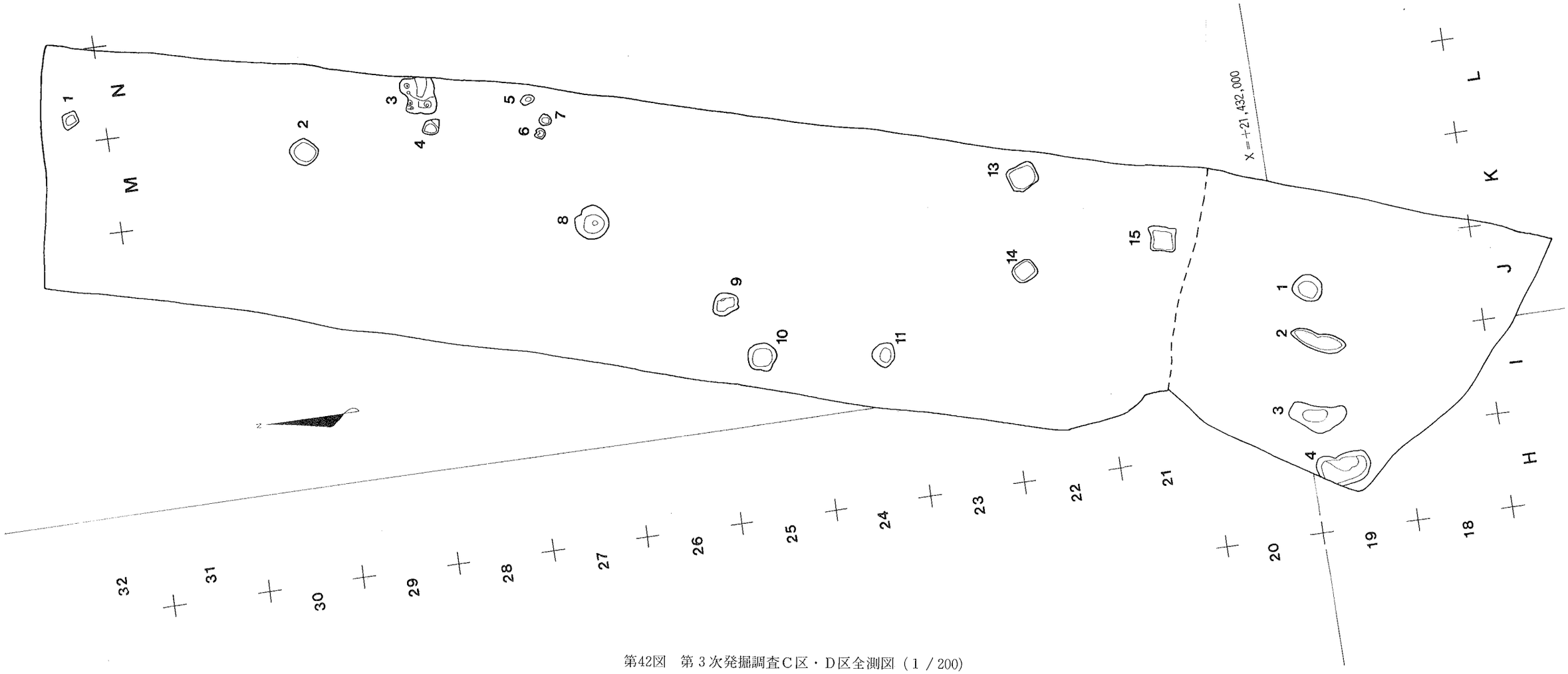
○第１号井戸跡出土板石塔婆（第41図105・106）

105. 厚さ2.8～3.1cm。薬研彫による、蓮座と脇侍種子（サ）が認められる。表面はやや磨滅しており、その下の年号は明瞭ではないが、康応２年（1390年）のようである。細い枠線も認められる。なお、種子、蓮座、年号、枠線とも黒く塗られていたようである。石質は緑泥片岩である。

106. 表裏面とも磨滅しているが、表には種子（キリーク）と蓮座の一部が、裏面にはノミ痕が認められる。石質は緑泥片岩である。



第41図　第３次発掘調査Ｂ区出土遺物5)（１／３）



第42図　第３次発掘調査Ｃ区・Ｄ区全測図（１／200）

4．C区・D区の遺構

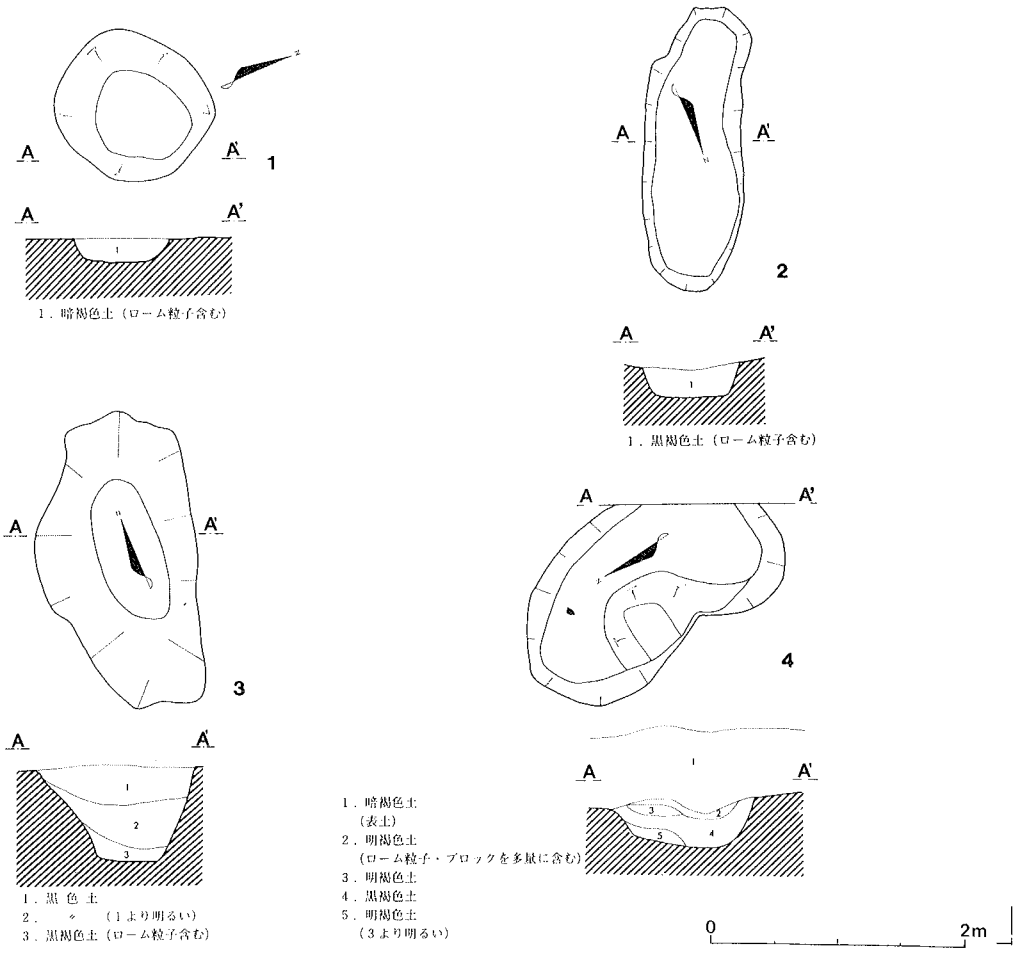
(1) C区の遺構（第42図）

○第１号土坑（第42図）　19―Ｊグリッドに位置する。径約120㎝の円形を呈し、深さは約30㎝である。全体は皿状を呈する。

○第２号土坑（第42図）　19―Ｉ・Ｊグリッドに位置する。230×80㎝ほどの細長い形を呈し、深さは約30㎝である。底面は平坦である。

○第３号土坑（第42図）　19・20―Ｉグリッドに位置する。240×130㎝ほどの不整形を呈し、深さは約80㎝である。壁は斜めに立ち上がり、底面は比較的凹凸が認められた。

○第４号土坑（第42図）　19―Ｈグリッドに位置する。220×130㎝ほどの空豆形を呈し、深さは約40㎝である。底面は緩い起伏がある。



第43図　C区の遺構実測図（1／60）

(2) D区の遺構（第44・45図）

○第１号土坑（第44図）　32―Ｎグリッドに位置する。55×60cmほどの正方形状を呈する。深さは約15cmである。底面は緩い起伏がある。

○第２号土坑（第44図）　29・30―Ｍグリッドに位置する。115×110cmほどの円形状を呈する。深さは約35cmである。底面は緩い起伏がある。

○第３号土坑（第44図）　28―Ｍ・Ｎグリッドに位置する。調査範囲外へ延びていたため完掘はできなかったが、幅105～140cmほどの不整形を呈する。全体に凹凸が激しく、ピット状の部分が４ヶ所認められた。

○第４号土坑（第44図）　28―Ｍグリッドに位置する。60×40cmほどの不整形を呈する。深さは約10cmである。

○第５号土坑（第44図）　27―Ｍグリッドに位置する柱穴状の小土坑である。55×45cmほどの長円形を呈し、深さは約20cmである。

○第６号土坑（第44図）　27―Ｍグリッドに位置する小土坑である。50×35cmほどの不整形を呈し、深さは約15cmである。底面にはわずかな段差が認められた。

○第７号土坑（第44図）　27―Ｍグリッドに位置する柱穴状の小土坑である。55×50cmほどのやや崩れた形状を呈し、深さは約20cmである。

○第８号土坑（第44図）　26・27―Ｌグリッドに位置する。150×140cmほどの円形状を呈し、深さは約40cmである。全体は皿状を呈し、中段にわずかな稜が認められた。

○第９号土坑（第44図）　25―Ｋグリッドに位置する。 110×90cmほどの、やや崩れた長円形状を呈し、深さは約25cmである。礫が二段に重ねるように配置されており、特に下段の礫は、地山のロームに埋め込むようにがっちりと配置されていた。なお、礫は上段・下段とも、中央に最も大きいものが置かれており、特に上段のそれが際立っていた。

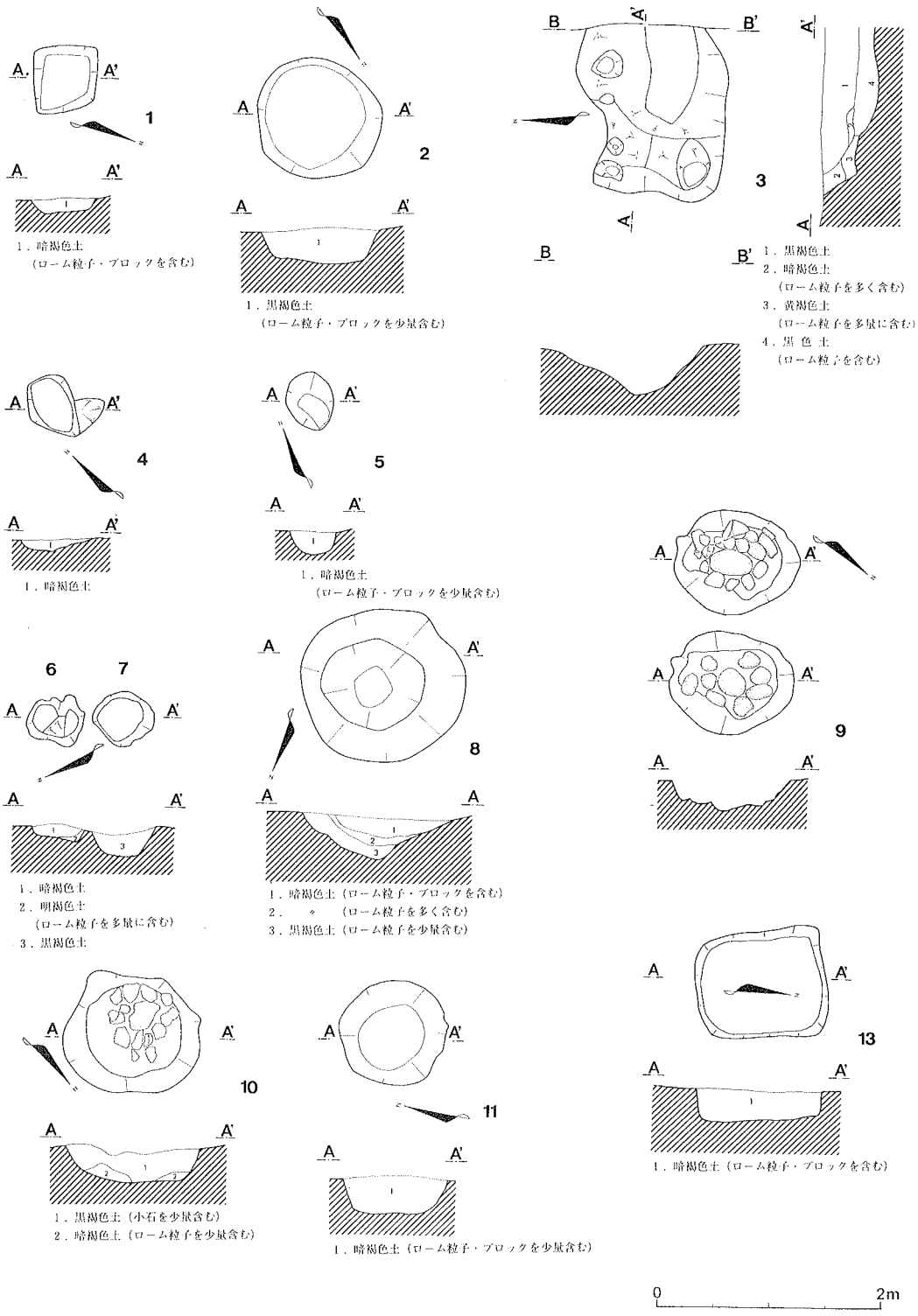
○第10号土坑（第44図）　25―Ｊグリッドに位置する。120×105cmほどの、やや崩れた長円形状を呈し、深さは約30cmである。第９号土坑と同じように礫が配置されていたが、２段にはなっておらず、土坑の西側へやや偏って配置されていた。また、地山のロームに埋め込むような状態ではなく、底面は比較的平坦であった。なお、中央に最も大きな礫が配置されていたことは、第９号土坑と同様である。

○第11号土坑（第44図）　24―Ｊグリッドに位置する。径約 100 cmの円形状を呈し、深さは約30cmである。全体は擂鉢状を呈する。

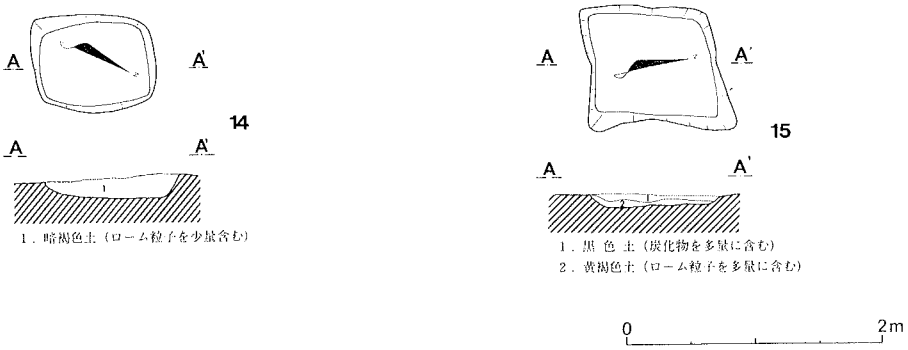
○第13号土坑（第44図）　22―Ｌグリッドに位置する。120×100cmほどの長方形状を呈し、深さは約30cmで、わずかに南側の方が深くなっていた。

○第14号土坑（第45図）　22―Ｋグリッドに位置する。95×80cmほどの長方形状を呈し、深さは約20cmで、底面は北へ向って傾斜していた。

○第15号土坑（第45図）　21―Ｋグリッドに位置する。１辺約 100 cmのやや崩れた正方形状を呈し、深さは約10cmである。底面には緩い起伏が認められた。



第44図　D区の遺構実測図(1)（1／60）

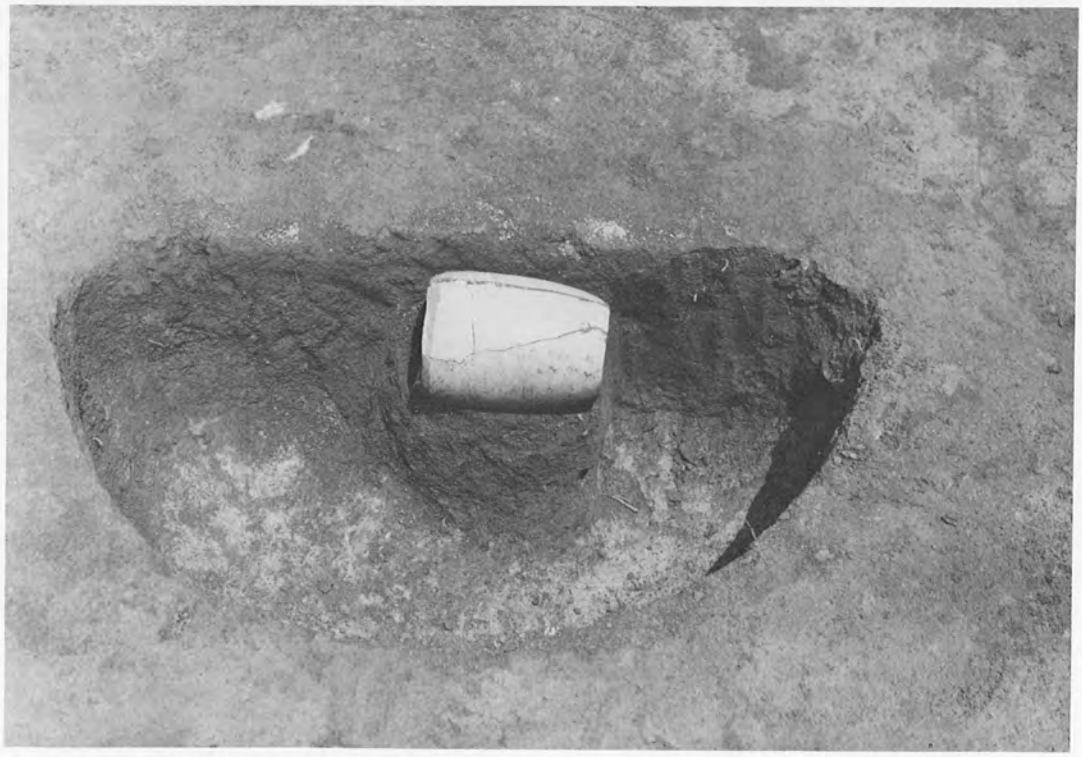


第45図　D区の遺構実測図(2)（1／60）

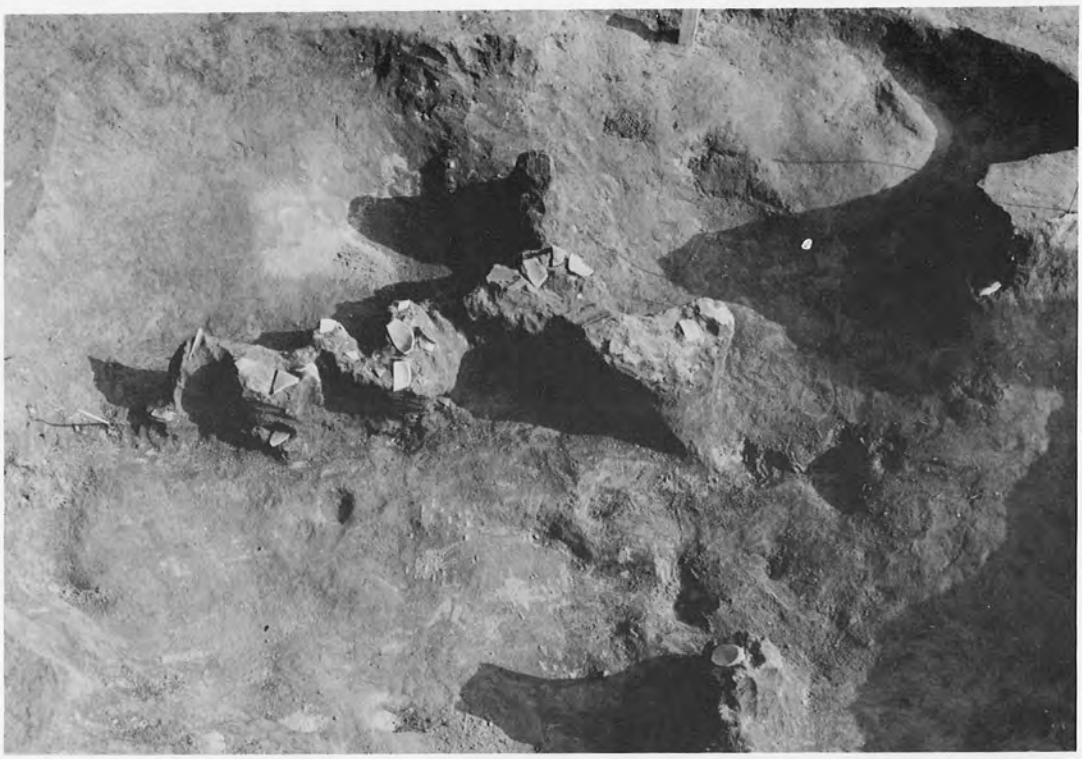
写　真　図　版

図版 1

1．第 1 次発掘調査区全景



2．第 1 号土坑　遺物出土状態



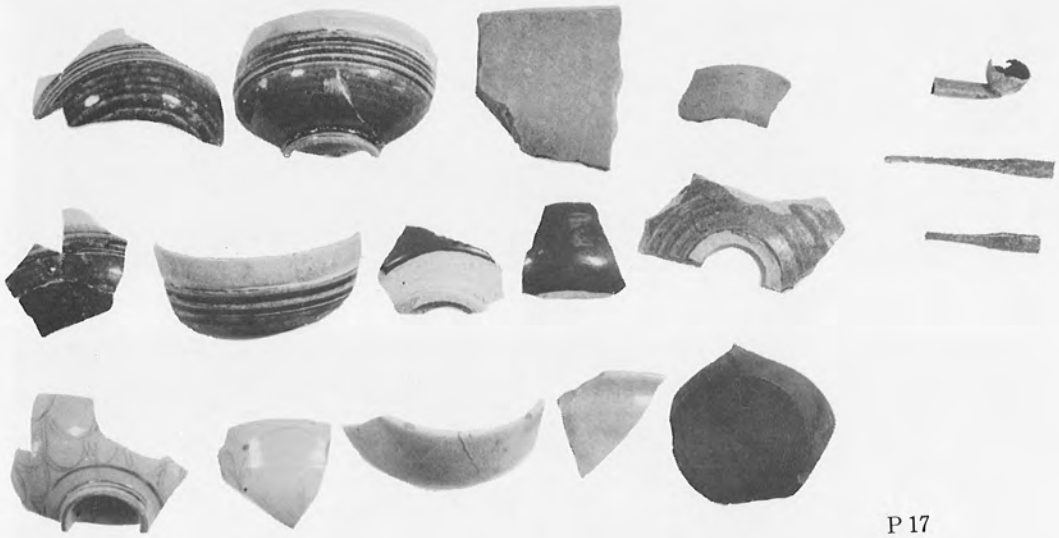
3．第17号土坑 遺物出土状態

4．第18号土坑 遺物出土状態

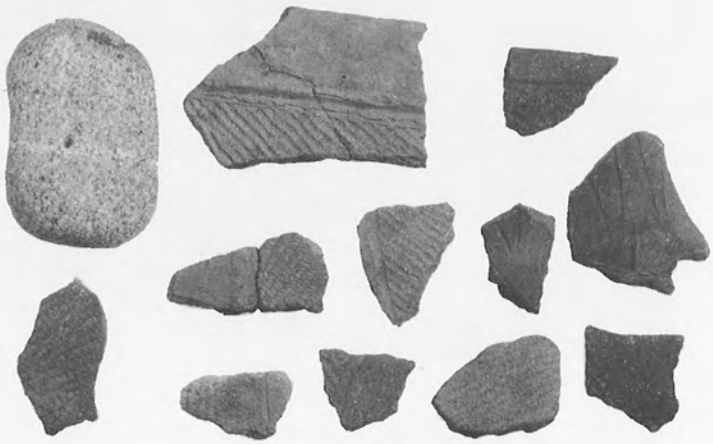
図版 3

P 2

P 14



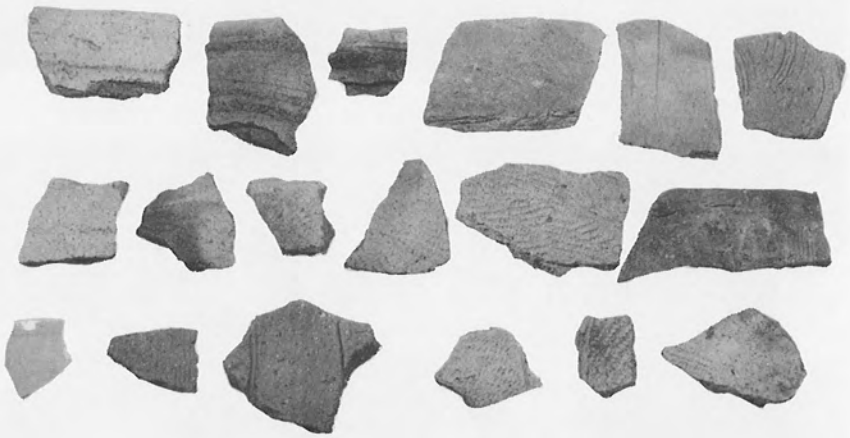
P 17



P 18

5．第１次発掘調査出土遺物(1)

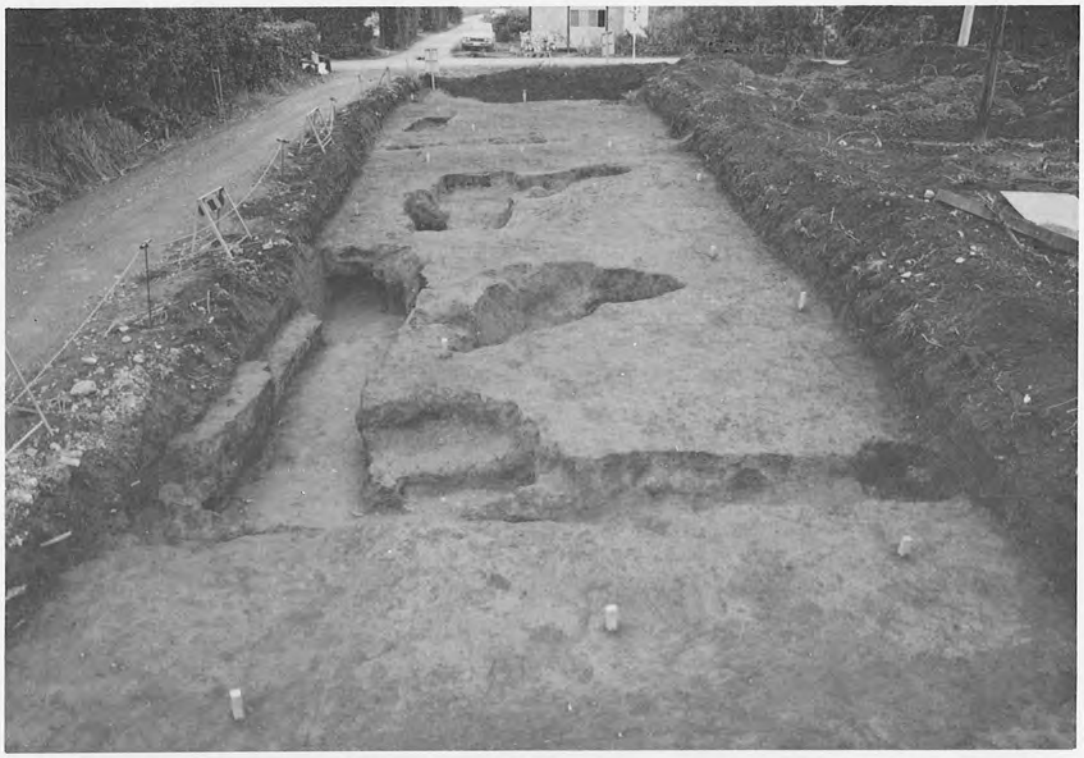
表採



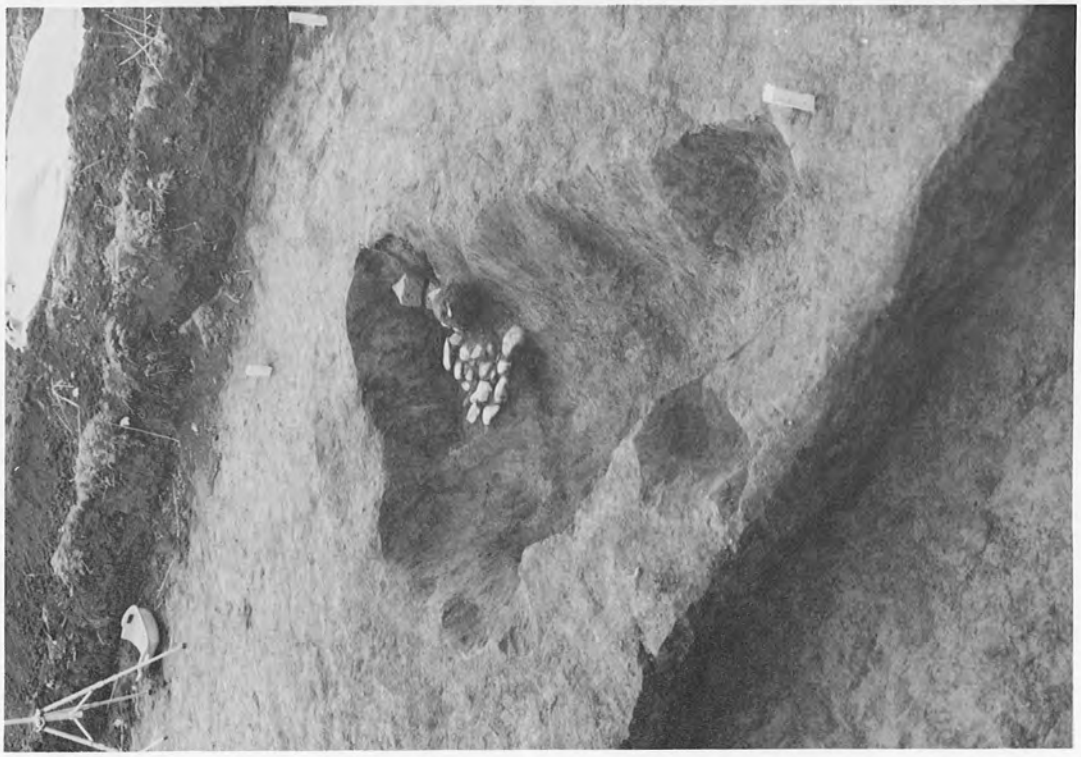
M 1

6．第１次発掘調査出土遺物(2)

図版 5

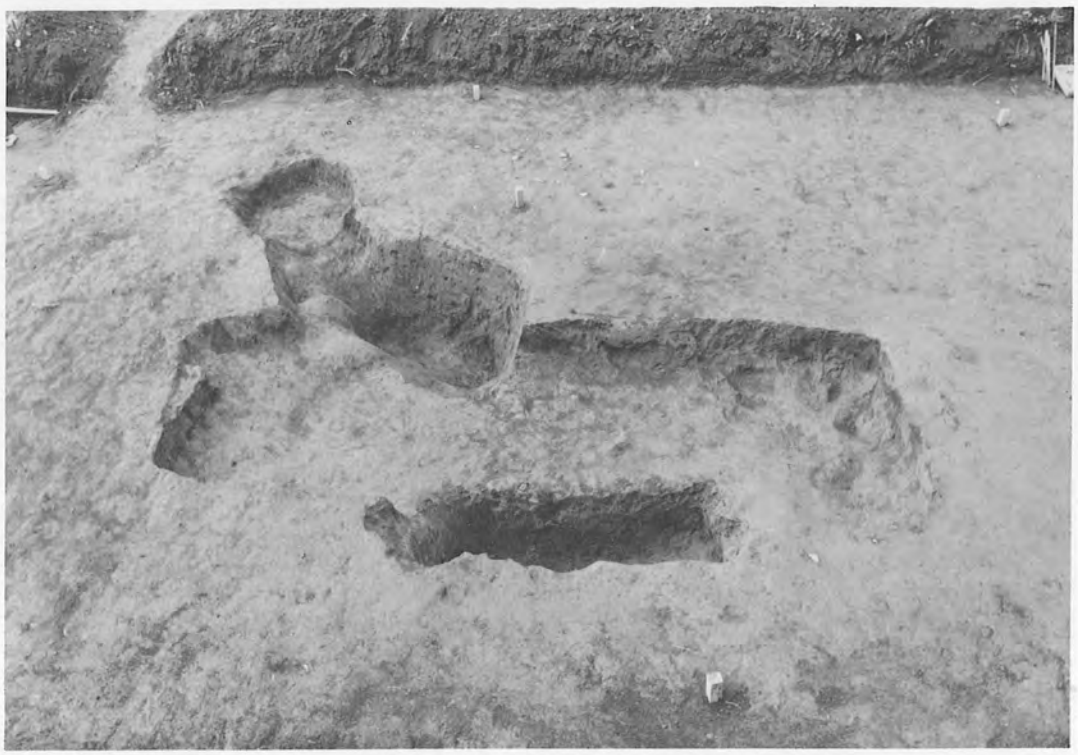


7．第２次発掘調査全景



8．第２号土坑

9．第 2 号土坑遺物出土状態



10. 第 3 号土坑

図版 7

11. 第 2 次発掘調査出土遺物

12. 第 3 次発掘調査A区全景（北から）

13. 第 3 次発掘調査A区北側

図版 9

14. 第 6 号土坑

15. 第 7 号土坑

16. 瓦質火鉢出土状態

17. 第1号井戸跡

図版11

18. 第3次発掘調査A区出土遺物(1)

P 12

P 10

P 13

P 14

19. 第3次発掘調査出土遺物(2)

P 14

W 1

17. 第3次発掘調査出土遺物(3)

20. 第3次発掘調査B区全景

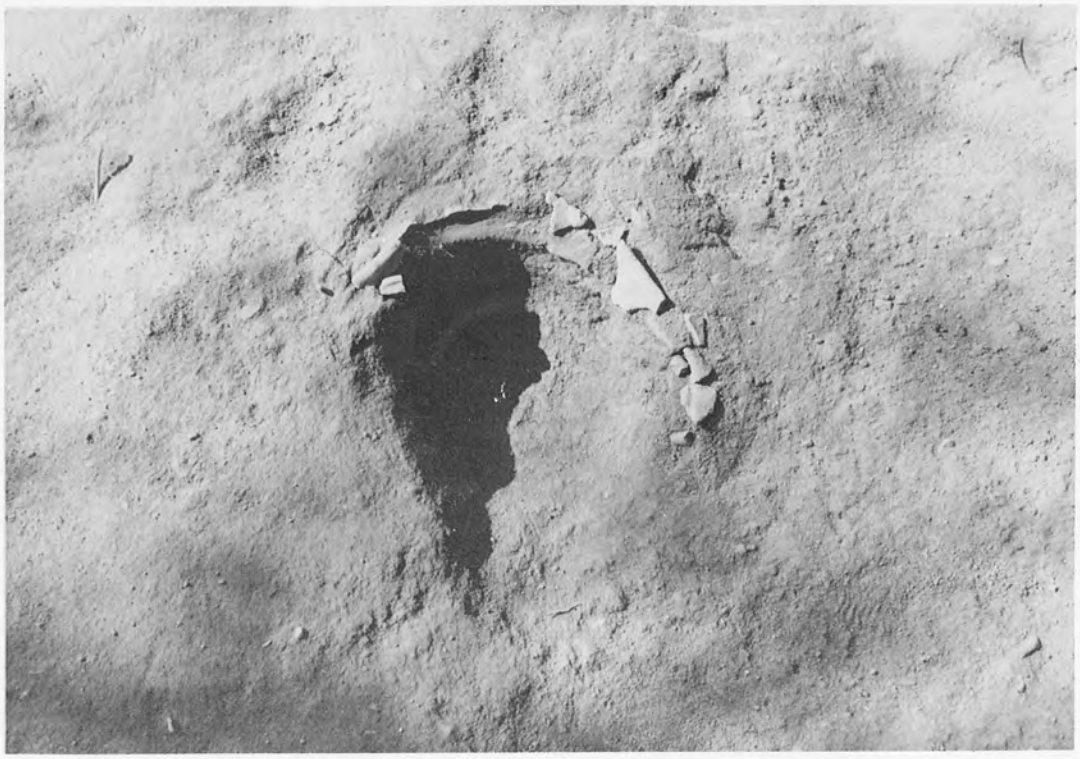
21. 第4号土坑

図版15

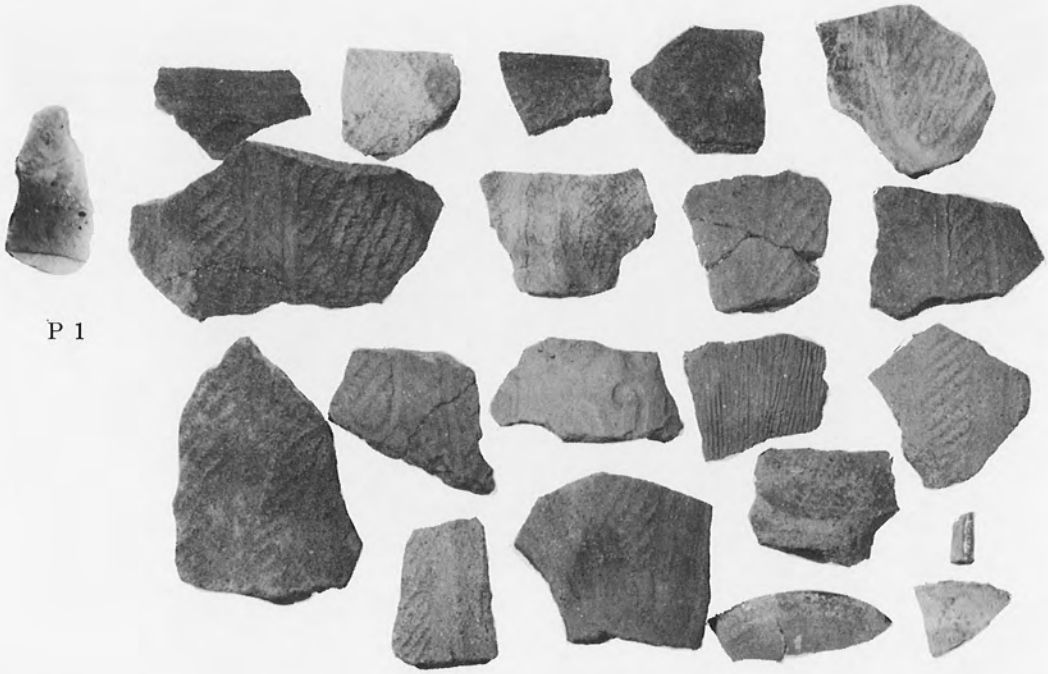
22. 第９号土坑(左)　第14号土拡(右)

23. 第23土坑B　遺物出土状態

24. 第1号井戸跡



25. 埋甕



P 1

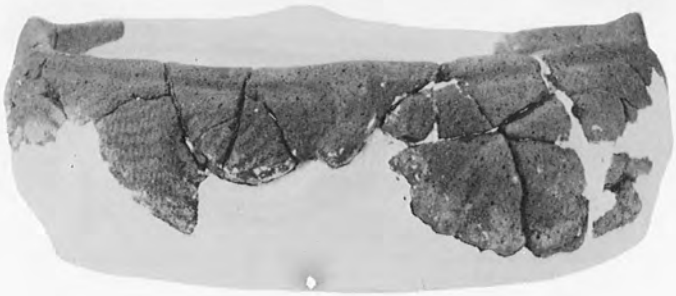
P 4

P 23

P 28

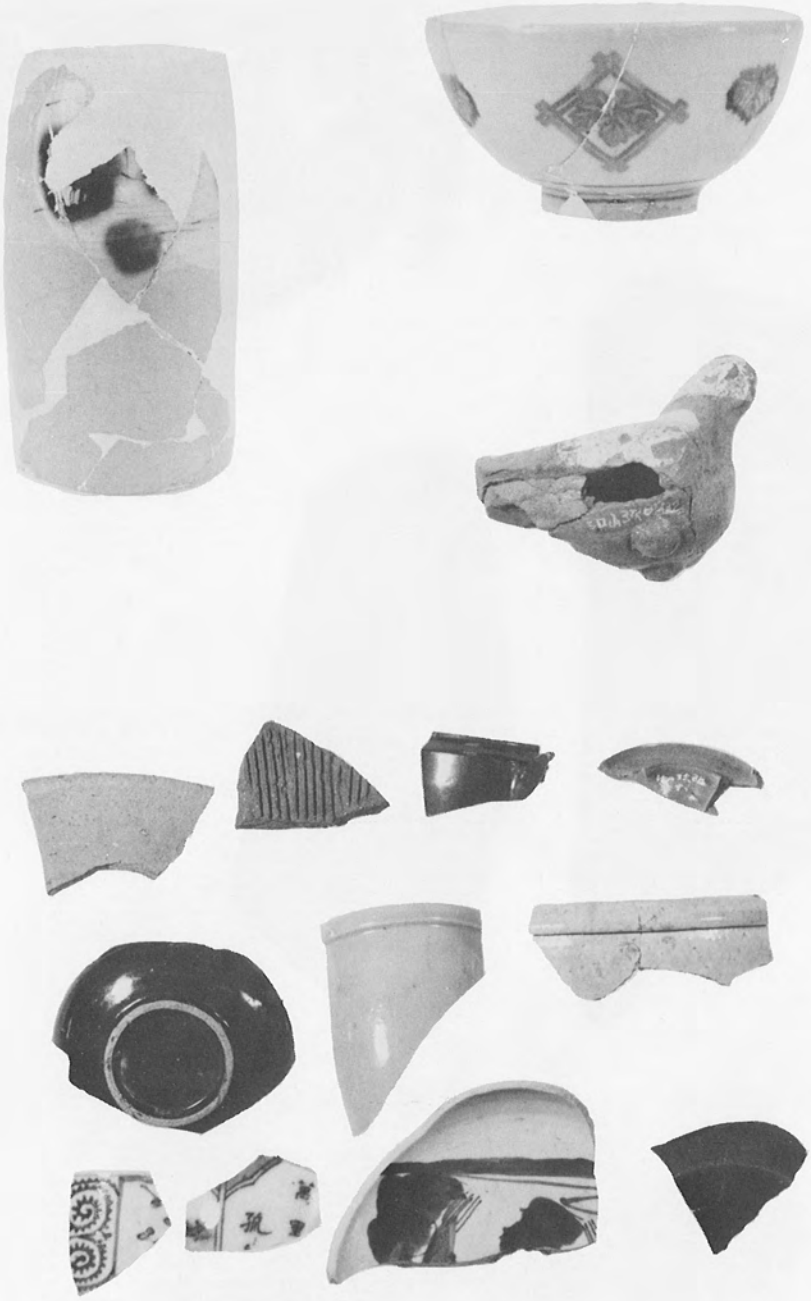
26. 第３次発掘調査Ｂ区出土遺物(1)

W 1



埋甕

27. 第3次発掘調査B区 出土遺物(2)



表採

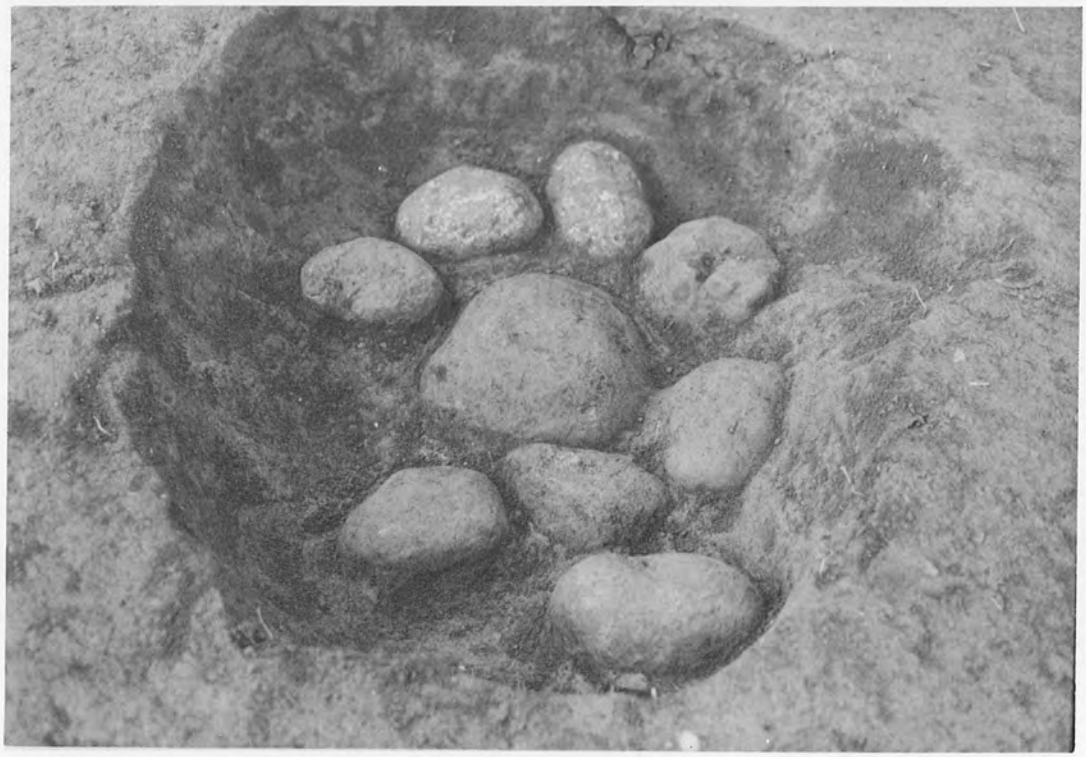
28. 第３次発掘調査Ｂ区 出土遺物(3)

29. 第3次発掘調査C区 全景

30. 第3次発掘調査D区 全景

図版21

31. 第9号土坑上層



32. 第9号土坑下層

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

東方城山遺跡群

印刷　昭和61年3月21日
発行　昭和61年3月31日

発行　深谷市教育委員会
印刷　博文社

正誤表

ページ	部分	誤	正
P5	l31	第2次発掘調査（註6）	第2次発掘調査（註7）
〃	l37	註6 澤出晃越「城下遺跡（第2次）」 昭和57年3月 深谷市教育委員会	註6 澤出晃越他「深谷町遺跡」 昭和60年3月 深谷市教育委員会 註7 澤出晃越「城下遺跡（第2次）」 昭和57年3月 深谷市教育委員会
P17	表題		第10図 第1次発掘調査出土遺物(1)(1/4)
P20	表題		第11図 第1次発掘調査出土遺物(2)(1/4)
P44	l30	染色茶碗	染付茶碗
P61	W1土層	13. 暗褐色土（黒色、土粒子、	13. 暗褐色土（黒色土粒子、
P69	l5	充填する沈線	充填する縄文
P71	l7~8	上位に白色が	上位に白土が